

第七百二十號 呼出ヲ受ケテ出席セサル證人アル時ハ或ハ之ヲ宥恕シ或ハ之ニ罰金ヲ科ス第三百五十五條第二項ニ曰ク如何ナル場合ニ於テモ呼出ヲ受ケテ出席セサル證人又ハ誓詞ヲ陳フルヲ肯ンセス若クハ證ヲ述フルヲ肯ンセサル證人ハ第八條ニ記スル所ノ罰ヲ言渡サル可シト又第三百五十六條ニ據レハ其罰金ノ申渡ヲ受ケタル證人ハ其故障ヲ申陳フルヲ得ルト謂ヒ且ツ其證ノ定マリタル上ニテ或ハ其罰金ヲ免シ或ハ之ヲ減スルト謂フノ法章アリ

又其證人ノ不在セシ事及ヒ之ヲ宥恕ス可キ事ニ附テハ重罪審院自カラ之ヲ審判ス可シ千八百二十九年八月 又其判決書ニハ必ス其理由ヲ記ス可キナリ 千八百三十一年八月 若シ又既ニ閉會ノ後ニ故障ヲ陳ヘタル時ハ之ヲ次會ニ讓ル者トス 千八百三十七年四月二

第七百二十一號 他日又ハ次會ノ會議ニ引延スル事○宥恕ヲ與フル

カ若クハ罰金ヲ申渡シタル後ハ重罪審院ニテハ更ニ其證人ノ出席セサルニ附キ何レノ處置ヲ爲ス可キヤヲ視察セサル可カラズ

重罪審院ニテ出席セサル證人ノ申陳ハ格別事實ヲ證明スル爲メニ必要ナル者ニ非スト思料シタル時ハ其不在ナルニ拘ハラズ對質ヲ爲ス可キ旨ヲ命ス可シ

若シ是ニ反シテ其出席セサル證人ノ申陳ハ必要ナリト思考シタル時ハ事犯ノ取調ヲ次期ノ會議第三百五十四條 又ハ時間ト入費トヲ省ク爲メニ本會ヲ他日ニ延引ス可キ旨ヲ命スルヲ得可シ千八百二十七年六月十一日、千八百二十四年四月二十六日、大審院判決、千八百二十四年三月三十一日、大審院判決 但、更ニ其證人ニ通知スルヲ要ス

此取調ノ延引ヲ命スルハ或ハ犯人ノ請願ニ因リ千八百三十二年一月 或ハ檢事ノ請求ニ因リ又或ハ重罪審院ノ特權ニ因ルナリ千八百二十年

等ノ大審院判決ハ專ラ其對質ヲ取消スヲ避クルノ目的ナリト雖モ若シ常ニ之ヲ實地ニ踐行スル時ハ是カ爲メニ多少其手續ノ保證ヲ減殺スルヲ免カレサル可シ

凡ソ重罪審院ニテハ既ニ呼出ヲ受ケテ出席セサル證人アルニ附キ事犯ヲ次期ノ會議ニ付ス可キ旨ヲ言渡シタル時ハ該證人ノ位置大ニ惡シクナル者ナリ蓋シ此場合ニ於テハ重罪審院判決ニテ延期ニ關スル費用ハ悉ク該證人自カラ之ヲ擔當ス可キヲ言渡スヲ得但、事宜ニ因テハ之ヲ拘留ス可キヲ命スルヲ有ル可シ又該證人ヲシテ證ヲ述ヘシムル爲メ公力ヲ以テ之ヲ本院ニ引出サシム可キ旨ヲ命スルヲ得可シ第三百五十五條

出席セサル證人アル時ハ犯人ハ唯、其延期ヲ請フノ權アルノミ共刑ヲ求ムルハ特リ檢事ノ管主スル所ナリ

第七百二十三號 證人室ニ退ク事第三百十六條ニハ二個ノ制限ヲ定メタリ第一、上席人ハ證人ニ別段指定アル室ニ退キ以後憑證ヲ陳述スル爲メノ外猥リニ室外ニ出ツ可カラサル旨ヲ命ス可シ第二、又上席人ハ事宜ニ因リ證人等互ニ談話スルヲ防ク爲メノ處置ヲ爲ス可シ此法則ハ實際上甚タ有益ナル者ナリ然レモ又假令ヒ之ヲ執行セスト雖モ是カ爲メニ其手續ヲ取消ス可カラズ是レ全ク上席人ノ敏識ト證人ノ本心トニ任放サレタル法式ナリ

故ニ左ノ事件アリト雖モ是カ爲メニ辯護ニ障害アリト陳フルヲ得ス○數多ノ證人共ニ一室内ニ退キタルヲ證認シサル事千八百十八年七月七日、千八百七十八年十一月五日、千八百六十六年七月七日、千八百七十八年十一月五日、千八百六十六年七月七日○數多ノ證人訟庭ニ止マリ他ノ證人ノ申渡ヲ聽取セシ事千八百十九年四月○免責證人ノ一人若クハ數人ヲ訟庭中止ノ間暫時上席人ヨリ命シテ別室ニ引分ケタ

ル事 千八百四十年四月二日大審院判決

証人等猥リニ格外ノ交談ヲ爲シタル事ヲ對質中ニ認メタル時ハ訴訟人ヨリ其証人ノ申陳ヲ爲ス時ニ此事ヲ舉示シ以テ其質議ヲ爲スヲ得若シ又証人等ノ談話ヲ禁スル爲メ度外ノ處置ヲ受ケタル者アル時ハ自カラ其故障ヲ陳述スルヲ得可シ

此ノ如ク常ニ証人等ノ爲メ殊更ニ注意豫防ヲ爲スノ目的ハ單ニ各証人ヲシテ敢テ他ノ扶助ヲ受ケス自由ニ共證ヲ陳ヘシムルニ在ルナリ

○第二節 犯人ヲ糾問スル事

第三百二十九條
第三百二十七條及第三百三十四條

第七百二十四號 糾問ノ事 ○成典ニハ嘗テ犯人糾問ノ事ヲ確定明記シタル成條無シ故ニ成典ノ法案ニ據レハ犯人ハ決シテ此糾彈法ヲ受ク可カラスト爲シ唯、犯人ハ常ニ自カラ証人ノ申述ヲ聽彈シ且ツ自カラ之ヲ論爭スルノ權ヲ有スル者ナルヲ以テ一旦悉ク其証人申陳ノ終

決シタル後ニ非サレハ自己ノ意見ヲ表シ且ツ其答辯ヲ陳フルニ及ハスト爲ス千八百六十九年三月十八日大審院判決 此決定ハ所謂ルアキニサトリル告訴法ニ據テ然ル者ナ

リト雖モ古今一般之ヲ實地ニ踐行セシト無シト謂フ蓋シ第三百十九條ニハ「上、席、人、裁、判、官、陪、審、官、及、ヒ、訴、訟、人、ヲ、シ、テ、証、人、證、ヲ、述、ヘ、タル、毎、ニ、事、實、ヲ、明、白、ナ、ラ、シ、ム、ル、爲、メ、必、用、ナ、リ、ト、思、考、ス、ル、所、ノ、諸、件、ヲ、犯、人、ニ、訊、問、ス、ル、ノ、權、アリ、ト、謂、フ、ニ、因、リ、又、犯、人、ヲ、糾、彈、ス、ル、ヲ、得、可、キ、ト、ハ、推、シ、テ、之、ヲ、定、ム、ル、ニ、足、ル」

抑、犯人糾問ノ方法ハ同時ニ其答辯ノ一具トナリ又其吟味ノ一方法トナルヲ以テ口上吟味ノ場合ト雖モ書記吟味ノ場合ニ等シク常ニ之ヲ用フルヲ得可キヤ明カナリ

故ニ苟モ犯人ニ對シテ質疑ヲ爲シ且ツ是ニ事實ヲ明白ナラシムル爲メノ諸件ヲ求ムル所ノ法官ハ該犯人ヲシテ其辯明ヲ爲サシムル爲メ

犯人ヲ糾問スル事

又其有罪ナルヲ自認セシムル爲メ常ニ之ヲ糾問スルノ權アリトス
 又此法官ハ決シテ其犯人ヲ促進陥害スルヲ無ク又之ヲ驚駭恐怖スル
 ヲ無ク自在ニ其事實ヲ申明セシムル爲メ其口述ニ充分ノ自由ヲ與ヘ
 サル可カラス又此法官ハ主トシテ方正公平ヲ守リ專ラ其事實ノ存ス
 ル所ヲ探定スルヲ要ス
 夫レ犯人ノ糾問ハ論議ニ非ス爭辯ニ非ス又對質ト謂フニモ非サルナ
 リ特リ其主トスル所ノ目的ハ專ラ辯護ノ方道ヲ指示シ以テ其對質ノ
 主要及ヒ吟味ノ要點ヲ定ムルニ在ルノミ
 因テ犯人自カラ共辯護ヲ爲スニ障害アリト思量シタル時ハ其糾問ニ
 應答スルヲ拒否スルノ權アリトス但、是カ爲メニ共對質ヲ停止ス可
 カラス

第七百二十五號 犯人ノ糾問ハ圓ヨリ吟味ノ程式ナリト雖モ管テ之

ヲ制定シタル成條ナキヲ以テ之ヲ行フト否トハ全ク適宜ノ者トス八千
 八百六十九年三月十日 故ニ大審院ノ判決ニテハ法律ハ敢テ上席人ヲシテ
 一人若クハ數多ノ證人ノ申述ヲ聽彈スル前ニ其犯人ノ糾問ヲ爲ス可
 キ責務ヲ負擔セシメス全ク其事實ヲ詳明ナラシムル爲メニ犯人糾問
 ノ要否ヲ測定スルノ自由ヲ以テ上席人ノ活斷ニ任放シタル者ナリト
 謂フヲ以テ常例ト爲ス月千八百二十年六月二十九日、千八百二十七年九
 月七日、大審院判
 決 且ツ犯人ヲ糾問ス可キ時機ヲ量定スルモ亦等シク其上席人ノ權ニ
 在ル者トス犯人ノ糾問ヲ爲スハ或ハ證人申陳ノ前ニシ或ハ證人申陳
 ノ後ニス尤モ證人申陳ノ終リタル後ニ犯人ノ糾問ヲ行フヲ以テ常慣
 ト爲ス千八百四十一年九月四日、千八百六十
 七年四月二十三日、大審院判
 決 第七百二十六號 犯人取調ノ順序ヲ指定スル事〇第三百三十四條ニ
 據レハ凡ソ犯人數多アル時ハ上席人自カラ其取調ノ順序ヲ定ム可シ

ス千八百三十年一月二且ツ此等ノ方法ヲ適用スル場合ニハ必ス第三百二十七條ニ明定アル一大要件ヲ遵守セサル可カラズ即チ然レモ各犯人ニ其席ニ居ラサル時間ニ爲シタル所ノ諸件ヲ具ニ告知シタル上ニ非サレハ更ニ總體ノ對質ニ取掛ルヲ得ス云々ノ條件是ナリ

右ハ上席人ヨリ各犯人ニ其席ニ在ラサル時間ニ爲シタル諸件ヲ告知スルノミチ以テ足レリトス證人若クハ其犯人ヲシテ一旦申述シタル事柄ヲ更ニ再陳セシムルニ及ハス千八百四十二年二月然レモ此告知ハ實ニ重要ナル法式ナリト謂ハサル可カラズ何トナレハ犯人ハ常ニ自己ノ負荷スル所ノ責任ヲ自カラ熟了シタル上ニ非サレハ更ニ其保辯ヲ爲スヲ能ハサルヲ以テナリ千八百二十九年九月

故ニ若シ調書ニ犯人ヲ認庭ヨリ退ケタル旨ヲ記シタリト雖モ更ニ其席ニ在ラサル間ニ爲シタル諸件ヲ具ニ告知シタル旨ヲ附記セサル時

ハ必ス其對質ヲ取消ス可キ者トス千八百三十五年七月

又上席人ハ自カラ此告知ヲ爲サズ更ニ他ノ裁判官一人ニ命ジテ之ヲ代行セシムルヲ得千八百二十六年五月唯犯人ヲシテ其熟知ス可キ諸件ヲ悉ク詳了セシムルヲ要ス

若シ又此程式ヲ缺失シタル時ハ尙ホ其對質ヲ閉止スル前一旦其犯人ノ席ニ在ラサル間ニ爲シタル諸件ヲ具ニ告知シタル後ヲ復タ既ニ吟味ノ濟ミタル證人ノ再陳有ルニ非サレハ他又之ヲ矯改スルニ由ナシ千八百三十一年一月十日千八百四十一年一月二十一日大審院判決

○第三節 證人申陳ヲ爲ス事

○第一項 申述ヲ聽斷ス可キ證人

第七百二十八號 重罪審院ニテ證人タルヲ得ル者ハ何人ナル乎○夫レ證人トハ一般ニ自カラ認知シタル事柄ヲ誓詞ヲ爲シテ申述フル

證人申陳ヲ爲ス事 申述ヲ聽斷ス可キ證人

第三百十五條
第三百十六條
第三百十七條
第三百十八條
第三百十九條
第三百二十條
第三百二十一條
第三百二十二條
第三百二十三條

爲メニ法式ニ循テ裁判所ニ呼出サル、者ヲ謂フ
 法律ハ總テ事實ヲ詳明ナラシムル爲メニ有益ナリト思料シタル人ノ
 申述ヲ聽ク事ニ附テハ無限ノ自由ヲ與ヘタルニ因リ從テ檢事犯人及
 ヒ民事原告人ハ各自其差出サント欲スル所ノ證人ノ姓名目錄ヲ記シ
 且ツ自カラ求メテ其證人ヲ呼出サシムルノ權有リトス是レ第七百十
 九號ニ於テ既ニ說明シタル者ナリ
 第三百十五條第三百十六條及ヒ第三百十七條ノ法則ハ第五百五十三條
 第五百五十四條及ヒ第九百九十條トハ大ニ異ナル所有リテ右ノ如ク一旦
 規則ニ依遵シテ差出サレタル證人出席シタル時ハ必ス之ヲ聽斷スル
 ナ要スト謂フ但、別段其證人ヲ除退ス可キ原由有ルカ若クハ訴訟人ヨ
 リ其證憑ヲ得ルヲ抛棄シタル時ハ格別ナリトス
 右第三百十五條第三百十六條及ヒ第三百十七條等ニハ更ニ彼ノ違警

罪裁判官ニ允許シタル如キ適宜ニ考定スルノ自由ヲ記セス第二百七
 十條ハ事實ヲ明瞭ナラシムルニ益ナク徒ラニ對質辯論ヲ冗長ナラシ
 ムル者ナリト認メタル時ハ上席人ヲシテ之ヲ制止セシムルノ權ヲ許
 與シタリ然レ此權利ハ亦必ス法律ノ諸條規ニ記スル所ノ者ト互ニ
 恰合セサル可カラサルヲ以テ是カ爲メニ他ノ諸般ノ權利ヲ害スルヲ
 得ス是レ前第六百四十三號ニ於テ既ニ詳論セシ者ナリ然ルニ證人ヲ
 差出スノ權ハ即チ其吟味及ヒ辯護ノ爲メニハ實ニ至重至要ナル權利
 中ノ一ナリト謂フ可キ者ナリ
 第七百二十九號 故ニ一旦規則ニ循テ呼出サレ且ツ既ニ訴訟人へ報
 知サレタル證人ハ悉ク其對質ニ屬ス可ク且ツ誓詞ヲ宣ヘテ其申述ヲ
 爲ス可キナリ因テ上席人タリニ亦重罪審院タリニ最早妄リニ其證人
 等ノ名義ヲ剝奪スルヲ得ス
 千八百四十八年三月二日、千八百五十年
 四月十一日、千八百五十三年三月四日、千

申述ヲ聽斷ス可キ證人

權有ル可シ假令ヒ全ク之ヲ差止ルノ權無キモ必ス其證人タルノ名義
 ナ以テ其申陳ヲ爲スニ附キ故障ヲ陳フルノ權有ル可キナリ
 第三百十五條ニハ報知ノ不正ナル事ニ附キ故障ヲ陳フルノ權ヲ記載
 シ又第三百二十二條ニハ血屬ノ親若クハ姻屬ノ親ニ關シテ確定サレ
 タル制限ニ基キ故障ヲ陳フルノ權ヲ揭示セリ後第七百三十八號及ヒ
 第七百四十六號ニ至リ復タ此二個ノ權利ヲ擴張シテ一般ノ規則ト爲
 シ以テ何レノ場合ト雖モ毎子ニ規則ニ違背シテ差出サレ且ツ其申述
 ナ爲シタル證人有ル時ハ必ス其故障ヲ陳フルノ權有リトセシ事ヲ說
 明ス可シ

第七百三十二號 訴訟人ヨリ證人ヲ抛却スル事○訴訟人ハ一旦自カ
 ラ差出シタル證人ヲ抛棄スルヲ得可シ因テ之ヲ抛棄シタル上ハ必ス
 其證人ヲ對質ヨリ排除ス可キナリ
千八百四十二年十一月十六日、千八百五十年、千八百五十二年、千八百五十四年、千八百五十六年、千八百五十八年、千八百六十年、千八百六十二年、千八百六十四年、千八百六十六年、千八百六十八年、千八百七十年、千八百七十二年、千八百七十四年、千八百七十六年、千八百七十八年、千八百八十年、千八百八十二年、千八百八十四年、千八百八十六年、千八百八十八年、千八百九十年、千八百九十二年、千八百九十四年、千八百九十六年、千八百九十八年、千八百九十九年

四年五月五日假令ヒ其抛棄ニ錯誤有ル場合ト雖モ必ス右同一ノ結果
 ナ生ス可シ
千八百四十年八月十二日、千八百五十五年十一月二十二日、千八百六十年八月十二日、千八百六十五年十一月二十二日、千八百七十年八月十二日、千八百七十五年十一月二十二日、千八百八十年八月十二日、千八百八十五年十一月二十二日、千八百九十年八月十二日、千八百九十五年十一月二十二日、千八百九十九年八月十二日、千八百九十九年十一月二十二日

然レモ訴訟人一同承諾ノ上ニテ爲シタル抛棄ニ非サレハ正効ヲ生ス
 ルヲ得ス何トナレハ凡ソ證人タルノ名義ヲ剝奪スルニハ必ス訴訟
 人一同ノ承諾ヲ要スルヲ以テナリ例之ハ民事原告人ヨリ差出シタル
 證人ヲ抛棄スルニハ必ス其民事原告人、檢事及ヒ犯人ノ承諾有ルヲ要
 ス又民事原告人ノ在ラサル時檢事若クハ犯人ヨリ差出シタル證人ヲ
 抛棄スルニハ必ス其檢事及ヒ犯人ノ承諾有ルヲ要ス

證人ヲ抛棄スルニ明認有リ又默認有リ、訴訟人ヨリ別段故障ヲ陳ヘサ
 ル時ハ是ヲ以テ證人抛棄ノ默認ト爲ス
千八百三十九年二月二十一日、千八百四十年八月十六日、千八百四十二年四月十八日、千八百四十四年十二月二十二日、千八百四十六年八月十四日、千八百四十八年十二月二十二日、千八百五十年八月十六日、千八百五十二年四月十八日、千八百五十四年十二月二十二日、千八百五十六年八月十四日、千八百五十八年十二月二十二日、千八百六十年八月十六日、千八百六十二年四月十八日、千八百六十四年十二月二十二日、千八百六十六年八月十四日、千八百六十八年十二月二十二日、千八百七十年八月十六日、千八百七十二年四月十八日、千八百七十四年十二月二十二日、千八百七十六年八月十四日、千八百七十八年十二月二十二日、千八百八十年八月十六日、千八百八十二年四月十八日、千八百八十四年十二月二十二日、千八百八十六年八月十四日、千八百八十八年十二月二十二日、千八百九十年八月十六日、千八百九十二年四月十八日、千八百九十四年十二月二十二日、千八百九十六年八月十四日、千八百九十八年十二月二十二日、千八百九十九年八月十六日、千八百九十九年十一月二十二日

申述ヲ聽斷ス可キ證人

又證人ヲ拋棄スル事ハ別段之ヲ判決スルニ及ハス唯、調書ニ之ヲ附記
 スルヲ以テ足レリトス 千八百四十九年九月二十四日、千八百
 五十六年九月十九日、大審院判決
 第七百三十三號 證人タルヲ得サル者○諸多ノ理由ニ因リ證人タ
 ルヲ得サル者ハ即チ左ノ如シ裁判所ニ於テ證人タルヲ得サル旨
 ナ申渡サレタル者○幼年者若クハ不具ニシテ正確ノ保證ヲ有セサル
 者○血屬若クハ姻屬ノ親ニシテ僞證ヲ爲スノ恐レ有ル者○他ニ職務
 有リテ證人ヲ兼ヌルヲ得サル者○證人タルノ責ヲ免除サレタル者
 第七百三十四號 裁判言渡ヲ受ケタルニ因リ證人タルニ無能力ナル
 者○裁判所ニ於テ證人タルヲ得ス唯、參考ノ爲メノミニ其申述ヲ爲
 スヲ得ル者ハ即チ左ノ如シ○第一、施體若クハ加辱ノ刑ヲ言渡サレ
 タル者○第二、懲治刑ノ言渡書ヲ以テ明カニ證人タルヲ禁止サレタ
 ル者

此無能力タルヤ必ス一ノ裁判言渡ニ因テ生スル者トス 明治三十二年
 四月二十日、千八百四十三年十一月二十五日、大審院判決 且ツ其最終裁判言
 渡ナルヲ要ス 千八百三十八年十一月十三日、大審院判決、千八百

凡ソ訟庭ニ於テ證人ノ無能力タルヲ證スルハ甚タ困難ノ者トス、先
 ツ一般ニハ其無能力タル事ヲ申出タルニ附キ證人モ亦訴訟人モ更ニ
 故障ヲ陳ヘサルヲ以テ充分ナリトス且ツ能力有ル證人ノ申述ヲ誓詞
 ナ爲サスシテ聽斷シ若クハ能力無キ證人ノ申述ヲ誓詞ヲ爲シテ聽斷
 スル事有リト雖モ更ニ其故障ヲ陳ヘサル犯人ハ最早此等ノ錯誤ニ因
 テ自カラ損害ヲ被リタリト申立ツルヲ得ス 千八百一一年、千八百三十五年三
 月二十日、千八百三十七年二月二十四日、大審院判決
 然レモ若シ未ダ對質ヲ閉止スル前ニ其錯誤ヲ認定シタル時ハ或ハ更
 ニ證人ニ誓詞ヲ爲サシメタル上ニテ再ヒ其申述ヲ聽斷シ 千八百三十
 年十月七日、

申述ヲ聽斷ス可キ證人

千八百三十三年五月或ハ不正ノ誓詞ヲ取消シ千八百六十年十月以テ之
ヲ矯正スルヲ得可キナリ

無能力ナル事ハ敢テ常赦ヲ以テ之ヲ去止スルヲ能ハスト雖モ大赦及

ヒ復權ニ因テ之ヲ廢止スルヲ得可キナリ後段ニ於テ之ヲ再説ス可

シ

無能力ナル證人ノ申述ヲ爲ス事ニ附キ訴訟人ヨリ故障ヲ陳フルノ規

則ハ恰モ法式ニ違背シテ差出サレタル證人ニ附テ故障ヲ陳フル場合

ト等一ナリトス第九百三十號參照然レモ證人ノ無能力タルヲ申渡スハ必

ス其重罪審院ニ限ル者トス千八百三十二年二月二日大審院判決且ツ法律ハ假令ヒ誓

詞ヲ爲シタル證人ヲ退止スルヲ有リト雖モ更ニ參考ノ爲メニ其申述

ヲ聽斷スルヲ認許ス故ニ此參考ノ爲メニ證人ノ申述ヲ聽斷スルヲ

ハ固ヨリ法律ノ允許スル所ナルヲ以テ敢テ之ヲ其上席人適意ノ處理

ナリト謂フ可カラズ

第七百三十五號 十五歳以下ノ幼者○第七十九條ニ於テ十五歳以下

ノ幼者ノ爲メニ定メラレタル無能力ノ規則ハ重罪審院ニモ亦必ス之ヲ

適行セサル可カラズ千八百四十二年十二月三日、千八百四十一年六月九

年十月一日、千八百六十四年六月四日大審院判決此等ノ幼者ハ誓詞ヲ爲スヲ無ク唯、其實事ヲ申

述ルヲ得可シ

然レモ此例外ノ方法ハ全ク其上席人ノ自由ニ處置スルヲ得ル者ナ

リ法律ハ之ヲ其上席人ノ活斷ニ任放ス故ニ上席人ハ常ニ其功者ノ年

齡ニ循ヒ其才力ノ多少ヲ量リ且ツ其教育ノ有無ヲ探リ以テ或ハ誓詞

ヲ爲サシメ或ハ之ヲ爲サシメサル事有ル可シ千八百三十八年三月八

年三月、同年七月三日、千八百五十六年十一月二十四日、千八百五十三因テ幼者

誓詞ヲ述ヘタルモ亦別段之ヲ述ヘサルモ更ニ其手續ヲ取消スヲ得ス

申述ヲ聽斷ス可キ證人

然レモ訴訟人ノ一方ヨリ故障ヲ述ヘテ幼者ノ誓詞ヲ宣ヘ證ヲ爲ス
ヲ拒否シタル時ハ必ス之ヲ採用セサル可カラス何トナレハ其故障ハ
法則ニ依遵シテ陳ヘラレタル者ナルヲ以テナリ

滿十五歳ノ幼者ハ必ス誓詞ヲ宣ヘサル可カラス又若シ年齢ニ錯誤アリ
リシト雖モ別段故障ヲ陳フル者無キ時ハ誓詞ヲ爲サシテ其中述ヲ
聽斷シタルニ附キ損害有リト陳フルヲ得ス
千八百三十三年十一月
六月二十七日、千八百五十年八月九日、大審院判決然レモ若シ其故障ヲ陳フル
者有ルカ若シハ年齢ニ疑有ル時ハ必ス之ヲ調査セサル可カラス然ル
後十五歳以下ノ幼者タルノ確證有ルニ非サレハ誓詞ヲ用ヒス
テ申述ヲ爲スヲ許シタル法律ノ免除ヲ適行ス可カラス

第七百三十六號 不具者○精神ノ不具モ亦身體ノ不具モ一般ニ之ヲ
無能力ノ原由ト爲ス可カラズ精神在亂シタル者ノ申述ヘタル證狀ノ

効力ハ固ヨリ輕弱ナル可シ然レモ假令ヒ其者既ニ治産ノ禁ヲ受ケタ
ル後ト雖モ決シテ是ニ由テ證人タルニ無能力トナル者トハ謂フ可
カラサルナリ
千八百三十七年三月二十日、千八百三十九年十二月十四日、
大審院判決
此ノ如キ場合ニ於テハ訴訟人ヨリ之ヲ拋棄スルカ若シハ
一個ノ判決ヲ爲シ以テ其證人タルノ名義ヲ奪取シ唯參考ノ爲メノミ
ニ其中述ヲ聽取スルヲ以テ適當ナリトス

然レモ聾者、盲者及ヒ其他ノ不具者ハ必ス誓詞ヲ爲サシメ證人ノ名義
ヲ以テ其中述ヲ聽カサル可カラズ
第七百三十七號 血屬若シハ姻屬ノ親ニ附テ定メラレタル制限○血
屬若シハ姻屬ノ親ニシテ犯人ト直接ノ關係有ル者ハ廢斥シテ其證人
タルヲ許サス
第三百二條 父母及ヒ其他尊屬ノ親ニ附テ此制限ノ及
可キ者ハ即チ正等ノ父母及ヒ其尊屬ノ親、養父母、私生ノ父母ナリ
千八百九

申述ヲ聽斷ス可キ證人

大審院判決然レ私生ノ祖父母ニハ之ヲ及ホス可カラス又卑屬ノ親
ニ附テハ此制限ハ私生ノ子千八百三十二年九月 姦通ノ子千八百九年
審判及ヒ養男女ニ及フナリ

又兄弟姉妹ニ附テハ此禁制ハ同父母兄弟姉妹異父兄弟姉妹及ヒ異母
兄弟姉妹ニ及ホス可シ又姻屬ノ親ニ附テハ此制限ハ婿嫁千八百五月
九日大審院判決先夫若シハ先婦ノ子千八百三十二年五月三日千八百
ナリ假令ヒ先夫若シハ先婦更ニ子女無クシテ死去シタル場合ト雖モ
其姻屬タル事ハ常ニ存續ス可キカ故ニ必ス其死ト共ニ消散ス可キ者
ナリトハ謂フ可カラサルナリ千八百三十九年十月十日千八百四十年
大審院判決

然レ此制限ハ必ス此ニ止マル可キナリ因テ姻屬親ノ夫又ハ婦九和
十號六月六日千八百五十二年九月十日千八百二十一年三月 犯人ノ伯父、叔母、

甥姪、從弟、從妹ニ至テハ右ノ制限ヲ及ホサルナリ千八百三十三年四月
五日千八百五十三年九月十五日大審院判決

凡ソ自カラ犯人ノ親屬ナリト申立テタル證人有ル時何等ノ親タル
ヲ認定セスシテ之ヲ退除シタル時ハ必ス其手續ヲ取消ス可キ者トス
千八百三十六年十月七日千八百五十年一月三日大審院判決又制限有ル血屬及ヒ姻屬ノ親ヨリ傳聞
シタル事柄ヲ申述フル證人有リト雖モ之ヲ除去スルヲ得ス若シ之
ヲ除去スル時ハ必ス第三百二十條ノ法則ヲ犯スニ至ル可シ千八百三十
三十一月十六日同年五月三日千八百三十二年六月九日大審院判決又犯人トノ結續ハ對質中別段之
ヲ穿鑿スルヲ得ス唯、是カ爲メニ別段ノ理由有ルカ又ハ是ニ附テ故
障ヲ陳フル者ノ有無ニ從テ其證人ヲ許否スルノミトス

第七百三十八號 凡ソ制止サレタル證人ヲ除却スルニハ或ハ訴訟人
故障ヲ陳ヘタルニ因リ或ハ特權ヲ以テ重罪審院又ハ其上席人ヨリ之

申述ヲ斷斷ス可キ證人

ヲ命スル者トス

第三百二十二條第二項ニ據レハ此等證人ノ證ヲ述フル時檢事民事原告人若クハ犯人其證ヲ述フルニ附キ別段故障ヲ申立サルニ於テハ其證ヲ申述フルハ効有リトスト謂フ此法章ニ據テ左ノ結果ヲ生ス○第一證人ニ制限ノ定則ヲ適施スルニハ其訴訟人ヨリ爲ス故障ノ申述ニ據ルヲ以テ通常ノ規則ト爲ス○第二故障ノ申立アルニ拘ハラズ證人タルノ名義ヲ以テ其制限有ル證人ノ申述ヲ聽斷シタル時ハ必ズ其手續ヲ取消ス可キ者トス○第三然レモ是ニ附テ別段故障ヲ申立ル者無キ時ハ更ニ其手續ヲ取消ス可カラズ八百八十六年七月十三日大審院判決又同一ノ吟味ヲ受ケタル數多ノ犯人中一人ノミニ關スル親屬ノ證人有ル時ト雖モ其故障ヲ申述フルヲ得可シ千八百八十八年四月二日訴訟人ハ自カラ差出シタル證人ニ附キ故障ヲ申述フルヲ得可シ千八百

十三年一月十三日大審院判決

故障ヲ申立ルハ常ニ其證人自カラ證ヲ述フル爲メニ出席シタル時ニ限ル者トス然レモ又其證人既ニ誓詞ヲ宣ヘタル後ナト雖モ未タ其證ヲ申述ヘサル間ハ其故障ヲ申立ルヲ得可シ千八百三十八年四月二十二月十二日千八百五十年此場合ニ於テハ其宣誓ヲ取消スカ若シハ原來誓詞ヲ爲サル者ト看做ス可キナリ千八百四十一年九月十五日大審院判決一旦既ニ申述ヲ爲シタル證人事宜ニ因リ再度ノ申述ヲ爲ス時ト雖モ其故障ヲ申立ルヲ得可シ千八百四十六年四月四日大審院判決凡ソ故障ヲ申立テタル時別段他ニ質疑ス可キ事件無キ時ハ上席人自カラ之ヲ處斷スルヲ得可キナリ千八百三十八年四月八日大審院判決然レモ或ハ殊更ニ取消ヲ要スル誓詞ヲ述ヘタル後ニ故障ヲ申立テタルカ千八百四十五年四月四日千八百四十八年九月二十一日大審院判決或ハ制限有ル血屬ノ親又ハ姻屬

申述ヲ聽斷ス可キ證人

ノ親タルニ附キ争論ヲ生スルカ或ハ法式ニ背ヒテ故障ヲ申立テタル
カ月五日大審院判決此等附屬ノ吟味ヲ要スル時ハ必ス其重罪審院ニ
非サレハ之ヲ處理スルヲ得ス

第七百三十九號 第三百二十二條ノ頭初ニ揭示アル左ノ證人ノ申述
ハ之ヲ聽ク可カラス云々ノ法章ニ據テ之ヲ觀ル時ハ總テ制限サレタ
ル證人ハ上席人若シハ重罪審院ノ特權ヲ以テ之ヲ退除スルヲ得可シ
故ニ重罪審院及ヒ上席人(附屬ノ吟味ヲ要セサル場合)ハ假令ヒ其制止
アル證人ノ申述ヲ爲ス事ニ附キ訴訟人ヨリ別段故障ヲ申立テスト雖
モ制限ノ定則ニ基キ自己ノ特權ヲ以テ斷然其證人ヲ除去スルヲ得可
シ千八百三十九年十月十日、千八百四十六年七月九日、千八百四十
九年十二月二十七日、千八百六十一年十二月二十日大審院判決
右ノ如ク或ハ訴訟人ヨリ故障ヲ陳ヘタルニ因リ或ハ特權ヲ以テ其證
人ヲ退却スルヲ有リト雖モ上席人ハ自己ノ特權ヲ以テ更ニ之ヲ呼出

シ以テ證人タルノ名義ニ因ラス全ク參考ノ爲メノミニ其申述ヲ聽取
スルヲ得可シ第六百四十號參考然レ此上席人ノ特權ハ誓詞ヲ宣ヘテ申
述ヲ爲スヲ禁制サレタル證人ニ非サレハ之ヲ適施スルヲ得ス因
テ其制限中ニ含入セサル證人ニシテ規則ニ循テ差出サレタル者ニハ
決シテ之ヲ當行スルヲ得ス千八百五十五年十一月
大審院判決

第七百四十號 犯罪告發者○告發者ニ二級有リ一ハ法律ニ因リ給料
ヲ付與サル、者ニシテ他ノ一ハ其給料ヲ受ケサル者是ナリ第三百二
十三條

第一級ノ告發者ハ常ニ不義誣罔ノ所爲有ルノ恐レ有ルカ故ニ證人ノ
名義ヲ以テ其中述ヲ爲スヲ得ス又假令ヒ之ヲ得ルトスルモ訴訟人
ハ其者自カラ誓詞ヲ陳ヘテ申述ヲ爲スヲニ附キ故障ヲ申立ルヲ得
可シ

申述ヲ聽斷ス可キ證人

第二級ノ告發者ハ證人ト成リテ、其中述ヲ爲スヲ得可シ然レモ告發者ノ身分ハ必ス之ヲ共陪審官ニ告知スルヲ要ス但、別段之ヲ告知セサルモ更ニ其手續ヲ取消スニ及ハス千八百九十二年七月十六日、千八百九十年一月十四日、大審院判決、千八百七十九年九月十四日、大審院判決。

右二種ノ告發者ヲ相區別スルハ常ニ困難ノ者トス抑、法律ニ據リ給料ヲ受クル告發者ト謂フハ或ハ自カラ其事犯ヲ覺認シ或ハ其徵憑ヲ見出シ或ハ其參考ト爲ル可キ諸件ヲ發顯シ以テ刑訟ヲ行フ爲メニ之ヲ差出シタルニ附キ其賞トシテ褒賞金ヲ受クル者ナリ、此告發者ノ部内ニハ治安裁判官及ヒ警察官ノ如キ常ニ輕重ノ罪犯ヲ探索シ以テ其證據ヲ取ル可キ職務アル官吏ハ決シテ共ニ之ヲ合入ス可カラス千八百九十二年二月二十八日、大審院判決。官吏ト常人トヲ問ハス一般犯罪ノ告發ヲ爲シタリト雖モ是カ爲メニ別段其褒賞ヲ受ケサル者モ亦本報ヨリ之ヲ除ク可シ

又自カラ損害ヲ被ラサル事犯ヲ適意ニ申出タル告發者ハ第一、證人ト之ヲ分別セサル可カラズ證人ハ別段裁判所ニ呼出サレタル上ニ非サレハ其中陳ヲ爲サス第二、又哀訴者ト之ヲ區別ス可シ哀訴者ハ常ニ自カラ損害ヲ受ケタル事件ヲ告訴スル者ナリ

第七百四十一號 民事原告人○自カラ損害ヲ受ケタル者民事ノ原告人ト成リテ訴ヲ爲シタル時ハ證人ノ名義ヲ以テ其中述ヲ爲スヲ得ス是レ蓋シ何人ト雖モ自己ニ關スル事柄ニ附キ自カラ證人ト成リ、以テ其中述ヲ爲スヲ得スト謂フノ原則ニ據テ然ルナリ

民事原告人ハ即チ其訴訟人ノ一人ナリ第三百七十七條民事原告人ハ檢事ニ附屬シタル訴訟人ナリ第三百七十二條民事原告人ハ自カラ其證人ヲ差出シ以テ其犯罪有ルヲ主張スル者ナリ民事原告人ハ其被告人ニ罪有リト

申述ヲ聽斷ス可キ證人

陳スル者ナリ因テ民事原告人ハ誓詞ヲ宣ヘ以テ自カラ證人ト成リ共
申述ヲ爲スヲ得ス千八百三十九年十月十四日、大審院判決
然レモ此規則ヲ實地ニ踐行スルニハ必ス又左ノ區別ヲ爲サ、ル可カ
ラス

第一 對質ノ前ニハ未タ民事ノ原告人ト成ラス單ニ證人トシテ呼出
サレタル者ハ必ス共證人タルノ名義ヲ以テ其中述ヲ爲ス可ク且ツ共
者對質ノ後ト更ニ民事原告人ト成ルト雖モ既ニ證人ノ名義ヲ以テ申
述ヘタル事柄ハ猶ホ正當ノ者トシテ之ヲ保存ス可シ千八百三十九年一月十七日、千八百五十二年一月二十五日、大審院判決 特リ此ノ如キ場合ニ於テ
ハ上席人ヨリ共民事原告人ト成リタル者ノ豫メ爲シタル申述ノ模様
ヲ陪審官ニ告知スルヲ以テ相當ノ處分ナリトス千八百五十四年五月十二日、大審院判決

第二 民事ノ原告人ト成リタル者ハ右ニ陳ヘタル如ク假令ヒ證人タ
ルノ名義ヲ以テ誓詞ヲ宣ヘタル上ニテ其中述ヲ爲スヲ能ハスト雖モ
又或ハ上席人ノ特權ニ因リ或ハ第三百三十五條ノ許與スル所ノ權利
ニ基キテ單ニ參考ノ爲メノニニ其中述ヲ爲スヲ得第二百六十九條、
第三百三十五條
第三 民事原告人自カラ誓詞ヲ宣ヘテ申述ヲ爲シタル時ハ犯人ハ之
ニ就テ其故障ヲ述フルヲ得可シ然レモ民事原告人自カラ宣誓シテ
其中述ヲ爲シタルニ附キ犯人ヨリ別段其故障ヲ申立サル時ハ假令ヒ
其中述ハ規則ニ違背シタル者ナリト雖モ決シテ是ヲ以テ其手續ヲ取
消スノ原由ト爲ス可カラスト謂フヲ以テ大審院判決ノ常例ト爲ス千
八百四十四年十一月二十八日、千八百四十七年五月十四日、千八百五十九年五月十三日、大審院判決 然レモ若シ犯人ヨリ
其故障ヲ申立タルニ拘ハラズ宣誓シタル民事原告人ノ申述ヲ聽斷
シタル時ハ必ス其手續ヲ取消ス可キ者トス千八百三十九年十一月十一日、千八百四十九年十一月十一日

申述ヲ聽斷ス可キ證人

大審院判決

此禁制法ハ妄リニ他ニ之ヲ擴及ス可カラサル者ナリ故ニ左ノ者ニハ決シテ之ヲ適用スルヲ得ス

○第一、贓物ノ取戻シヲ要請スルト雖モ更ニ民事原告人ト成リテ訴ヲ爲サ、ル者千八百六十一年七月 ○第二、一旦民事原告人ト成リテ重

罪審院ニ訴ヲ爲シタリト雖モ大審院ニテ其裁判ヲ破毀シ以テ他ノ重罪審院ニ之ヲ送付シタル時更ニ民事ノ原告人ト成ラサル者千八百

一、千八百八十一年十一月十日 ○第三、民事原告人ノ血屬及ヒ姻屬ノ親千八百八十

外ニ除却サレタル共同ノ被告人千八百八十五年五月六日、千八百八十二年

大審院判決 ○第五、一旦僞證ノ疑ヲ受ケタリト雖モ更ニ其冤ヲ解キ

件ニ附キ其權利者及ヒ管理人千八百四十九年五月、千八百五十二年

者トナリタル代理人及ヒ代訟人千八百三十五年六月 司法警察官、書

記官及ヒ書記見習ニシテ該事犯ノ豫審吟味中ニ自カラ其職務ヲ行

第七百四十二號 兼務ノ禁 ○自カラ證人トナル可カラサル職務有ル

者ハ即チ重罪審院ノ裁判官、書記官、陪審官及ヒ通辯官是ナリ第三百三

官吏ハ兼テ證人タルヲ得ス 第七百四十三號 證人タルノ責ヲ免除スル事 ○此事ニ附テハ法律上

申述ヲ聽斷ス可キ證人

如シ

刑法第三百七十八條ニハ唯一人ヲ凌辱シ若クハ人ニ損害ヲ被ラシメ
カ爲メニ惡意ヲ以テ自カラ依託ヲ受ケタル密事ヲ漏告スルヲ禁シ
タルノミナリ故ニ該條ニ記列スル所ノ職業有ル者ハ都テ自カラ了知
スル事件ニ附テハ證人ト成リテ裁判所ニ出テ其中述ヲ爲サ、ル可カ
ラス

然レモ正理ニ適シタル至貴至重ノ利益及ヒ權利ヲ保護スル爲メニ特
ニ大審院ノ判決ヲ以テ左ニ記スル若干ノ人ニ對シ裁判所ニ於テ證據
ヲ述ヘサル許可ヲ與ヘタリ蓋シ人民ノ爲メニ緊要ナル若干ノ職務ヲ
保護シ且ツ之ヲ貴重シタル者ナリ其職務有ル者ハ即チ第一、醫師、下等
醫師、産婆及ヒ賣藥者ナリ第二、説教僧ナリ第三、代言人、代訟人及ヒ公證
人ナリ此等ノ職業有ル者ハ其職務執行中ニ自カラ認知シタル事件ニ

附キ證人ト成リテ申述ヲ爲サ、ルノ權有リトス

然レモ此權利ニハ亦其制限アリ蓋シ此等ノ者ヨリ唯其職務ノ執行中
ニ認定シタル事柄ナリト陳ヘタルノミニテハ尙ホ未タ其證人ト成ラ
サルノ免許ヲ得ルニ足ラサルナリ必ス其職業中ニ殊更ニ封印シタル
委託狀ヲ受ケタル密事タル事ノ證有ル場合ニ非サレハ自カラ證人ト
成ラサルノ免許ヲ得ルヲ能ハス千八百四十五年七月二十六日、千八百五十三
年六月十日大審院判決故
ニ醫師及ヒ下等醫師ハ其病者ノ治療中ニ密事ヲ發顯シタルニ因リ自
カラ證人タルノ責務無シト陳フルヲ得ス又僧官ハ其説教中ニ認知
シタル事件有ルニ因リ自カラ證人タルノ責務ナシト陳フルヲ得ス
又代言人及ヒ代訟人ハ其依頼人ヨリ辯護ノ爲メニ密事ヲ告ケタルニ
因リ自カラ證人タルノ責ナシト陳フルヲ得ス又公證人ハ自カラ依
賴ヲ受ケタル事件ナルニ因リ其證人タルノ責ナシト陳フルヲ得ス

申述ヲ聽斷ス可キ證人

十四年八月四日、千八百三十七年十二月十四日、大審院判決。又、證人ニハ各自別々ニ其證ヲ申述ヘシ、ム可シト謂フノ規則ナリト雖モ同時ニ二人若シハ數多證人ノ申述ヲ聽斷スルモ更ニ差支ヘ無カル可シ。千八百十八年四月十六日、千八百十八年二月五日、千八百二十四年一月十三日、千八百五十五年七月二十八日、千八百六十七年十月三日、大審院判決。

第七百四十五號 證人重罪審院ニ出席シタル時ハ上席人ハ各其姓名、身分及ヒ犯人トノ關係ヲ糾問ス可シ第三百七條

此ノ如ク各證人ノ身位ヲ認定スル爲メニ行フ所ノ糾問ハ其證人ノ誓ヲ宣フル前ニ之ヲ爲ス可キ手又ハ其宣誓ノ後ニ之ヲ爲ス可キ乎實際上ニ於テハ宣誓ノ後チ其糾問ヲ爲スヲ以テ常例トス然レモ第三百十七條ニ據レハ證人其證ヲ申述フル前即チ其糾問ノ後チニ其誓ヲ爲ス可シト謂フ蓋シ證人ノ無能力タル原由アル時ハ尙ホ誓ヲ陳ヘサル前ニ豫メ之ヲ詳認スルヲ以テ正當ノ處置ナリトス何トナレハ若シ之ヲ

宣誓ノ後ニ認メタル時其故障ヲ申立ル者アルニ於テハ必ス又其誓詞ヲ取消サ、ル可カラサルヲ以テナリ

然レモ又大審院ニテハ左ノ判決ヲ爲シタリト謂フ第一、證人ノ糾問ヲ爲スハ決シテ其宣誓ノ前後ニ拘ハルヲ無カル可シ。千八百三十六年四月四日、大審院判決。第二、證人ノ糾問ハ何程緊要ノ者ナリト雖モ之ヲ認定セサルニ因リ必スシモ其手續ヲ取消スニ及ハス常ニ其糾問ヲ行ヒタリト謂フノ推測アリトス。千八百十八年七月十六日、千八百二十一年四月十三日、千八百五十二年十一月二十四日、大審院判決。

第七百四十六號 訴訟人ハ常ニ其證人ノ申述ヲ爲サントスル時ニ第一、其申述ヲ爲スヲ抛却スルノ權アリトス第二、其申述ヲ爲スニ附キ故障ヲ述フルノ權アリトス證人ノ申述ヲ爲スヲ抛棄スルニ附キ依遵ス可キ法式及ヒ其効果ノ如何ハ既ニ第七百三十二號ニ於テ之ヲ解

證人其證ヲ陳ルニ附キ依遵ス可キ法式

説シタリ又證人申述ヲ爲スニ附キ故障ヲ陳フルハ左ニ記スル二個ノ
 場合ナリトス第一其證人ハ犯人ノ爲メニハ法ノ制限シタル血屬若ク
 ハ姻屬ノ親タル時又ハ共事犯ノ告發者タル時第二其證人ノ姓名ヲ告
 知セサルカ若クハ之ヲ告知シタリト雖モ其法式ニ適セサル時第一ノ
 場合ハ第三百十二條ニ規定スル所ニシテ前段第七百三十七號ニ於テ
 之ヲ説明セリ又第二ノ場合ハ第三百十五條ノ揭示スル者ニシテ即チ
 告知書ニ證人ノ姓名ヲ記セサルカ若クハ詳カニ其諸件ヲ記セサル場
 合ナリ

總テ證人ニ關シテ故障ヲ申立ルニハ或ハ願書ニテ之ヲ爲シ或ハ口上
 ニテ之ヲ爲シ又或ハ簡單ニ其旨趣ヲ告グルノミニ止マルコト有リ又其
 故障ハ證人ヨリ其姓名及ヒ身位ヲ陳ヘタル上ニテ之ヲ申立ツ可シ又假
 令ヒ證人宣誓ノ後ト雖モ其中述ヲ始ムル迄ハ其故障ヲ申立ルコト得

可シ第七百三十
第八號參考

第七百四十七號 規則ニ背キタルニ附キ故障ヲ陳フルニ二個ノ方法
 アリ即チ其一ハ證人ヲ差出ス手續ニ關スル者ニシテ其二ハ證人ノ申
 述ニ關スル者ナリ

第一ノ場合即チ證人ヲ差出ス手續ニ關シテ規則ニ背キタル事アルニ
 附キ其故障ヲ述フルヲ得ルハ檢事若クハ犯人ニ限ル者トス何トナレ
 ハ民事原告人ニハ何レノ告知モ爲サ、ルヲ以テナリ

若シ呼出又ハ告知ノ不規則ナルニ附キ別段訴訟人ヨリ其故障ヲ申立
 サル時ハ原來其規則ニ違背セシコト無キ者ト看做ス可シ何トナレハ是
 カ爲メニ何レノ損害モ生セサリシ者ト推測ス可キヲ以テナリ左ノ場
 合ニ於テモ亦同一ノ結果ヲ生ス可シ即チ告知シタル證人ノ姓名目錄
 ニ錯誤アル時千八百五十二年三月
千八百二十一年四月十一日
大審院判決又遲延シテ告知シタル時千八百二十一年
四月十一日

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違マ可キ法式

ス可カラスト謂フヲ以テ大審院判決ノ常例ト爲セリ○一旦誤テ誓詞
 ナ爲サ、ル證人ノ申述ヲ聽斷シタリト雖モ尙ホ其對質中ニ更ニ法式
 ニ循ヒ改メテ其申述ヲ爲サシメタル時千八百九十一年四月十七日、千
 八百九十四年五月五日、同
 年七月九日大審院判決○退除シタル證人ヲ其告知ノ目錄ニ記入セサ
 ル時又ハ訴訟人ヨリ其證人ヲ拋棄シタリトノ推測アル時千八百六十
 二年八月九日大審院判決○一旦呼出テ受ケタル證人ニシテ告知サレサル
 者ヲ上席人ヨリ召出シテ己レノ特權ヲ以テ申述ヲ爲サシメタル時千
 八百五十五年一月十九日、千八百五十六年十月十六日大審院判決此場合ニ於テモ尙ホ訴訟人
 ヨリ其告知ヲ爲サ、リシヲ以テ既ニ其證人ヲ拋棄シタリト謂フノ推
 測有リトス

第七百四十九號 既ニ前段ニモ陳ヘタル如ク凡ソ故障ヲ申立ル者ア
 ル時ハ重罪審院自カラ之ヲ處理スルヲ以テ通規ト爲ス何トナレハ故

障ヲ申立ルハ常ニ裁判上ノ要點ニ關スル者ヲ以テ最も多シトス且ツ
 其故障ノ結果ハ一旦自カラ其訴訟ニ立入リタル證人ヲ更ニ退除スル
 ニ在ルヲ以テナリ千八百三十一年六月三十日、千八百
 三十七年六月三十日大審院判決
 然レモ若シ證人ノ無能力者ナル事若クハ法律ノ制止シタル證人ナル
 ニ附キ故障ヲ陳フル者有ル時別段爭論ヲ生セサルニ於テハ上席人自
 カラ之ヲ處決スルヲ得可シ
 何レノ場合ト雖モ必ス之ヲ判決セサル可カラス第四百八條而シテ或ハ其
 故障ノ申立ヲ採用シ以テ其證人ヲ退去セシムル者アリ但、參考ノ爲メ
 ニ其申述ヲ聽斷スルハ更ニ差支有ルヲ無シ或ハ又全ク空無ノ事件ニ
 附キ故障ヲ申立テタルカ若クハ其理由有リト雖モ是カ爲メニ證人ト
 爲リテ證ヲ陳フルヲ殊更ニ制止スルヲ要セサル時ハ斷然其故障ノ
 申立ヲ却下ス可シ

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

第七百五十號 證人ノ宣誓 ○法律ノ指定シタル順序ニ循テ召出サレタル證人ハ總テ其證ヲ申述ル前ニ誓詞ヲ宣フ可シ此法式ハ大ニ公益ニ關スル者ニシテ證人ノ申述フル所ノ證據ヲ重固ナラシメ以テ裁判上ノ利益ヲ圖ランカ爲メニ定メラレタル者ナリ

前段ニモ陳ヘタル如ク訴訟人ハ常ニ自カラ差出シタル證人ヲ拋棄スルヲ得ルト雖モ證人誓詞ヲ宣ヘテ其申述ヲ爲ス可キ法式ヲ拋棄スルヲ能ハス參考ノ爲メノミニ證人ノ申述ヲ爲サシムルハ特リ上席人ノ權ニ在ルノミ且ツ大審院ニ於テモ亦第三百十七條ハ確乎タル一般ノ法章ナリトシ以テ何レノ證人ト雖モ必ス誓詞ヲ爲シタル上ニテ其申述ヲ聽斷ス可シ但重罪審院ニテ其證人ノ申述ヲ聽ク可カラサル正當ノ理由アリト決定シタル時ハ格別ナリトス然レモ上席人ハ其特權ヲ以テ參考ハ爲メハミニ其證人ノ申述ヲ爲サシムルヲ得可シト謂

フナ以テ其判決ノ常例ト爲ス一千八百三十九年六月八日、千八百四十年七月四日、
大審院判決

第七百五十一號 若シ證人誓詞ヲ宣フルヲ拒ミタル時ハ第八十號ニ記スル所ノ罰ヲ言渡サル可シ第三百五十五條蓋シ證人自カラ其證ヲ陳フルハ即チ一般人事ノ職務ヲ行フ者ナルヲ以テ何レノ事件ニ關スルト雖モ自カラ秘默シテ其實ヲ述ヘサル者ハ必スシモ他ノ權利ヲ損スルヲ無キヲ保シ難シ是レ裁判上ノ利益ノ爲メニ殊更ニ法律上誓詞ヲ命シタル所以ナリ

何レノ證人ト雖モ其誓詞ヲ宣フル時ハ或ハ宗旨ニ背クト言ヒ或ハ他人トノ盟約ニ反ス千八百二十年十一月十日大審院判決ルト言フ必ス自己ノ爲メニ損害ヲ生スルノ理由アリト述ヘ以テ此誓詞ヲ宣フルノ義務ヲ免カル、
一能ハス但法ノ認許シタル免除アル時ハ格別ナリトス又證人ハ或ル

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

人ノ許諾ヲ得タル上ニ非サレハ誓詞ヲ爲サスト述フルヲ得ス千八百五十二年十二月十五日大審院判決

第七百五十二號 第三百十七條ニ記載アル誓詞ノ式文ハ決シテ變更ス可カラサル者ナリ、一文詞ト雖モ之ヲ缺失スル時ハ必ス其誓ヲ取消サ、ル可カラス何トナレハ其法定ノ文詞ヲ缺失シタルハ實ニ微細ノ事ニ關スル場合ト雖モ必ス是ニ由テ果シテ幾分カ其誓詞ノ勢力ヲ減スルヲ免カレサルカ故ナリ

又妄リニ他ノ適當ノ文詞ヲ代用スルヲ許サス且ツ大審院判決ニテハ誓詞ノ規文中些細ノ文字ヲ取替ヘタリト雖モ必ス之ヲ取消ス可キ者トス就中左ノ場合ニ於テハ誓詞ヲ取消シタル大審院判決ノ最モ著シキ者ナリ○證人自カラ誓詞ヲ宣フル代リニ單ニ其約束ノミヲ爲シタル時千八百五十二年七月○證人愛憎畏懼ノ心ナク千八百五十二年七月

若クハ單ニ畏懼ノ心ナク千八百五十二年七月正實ヲ述フ可キ旨ヲ明陳スルヲ忘レタル時○證人總テノ正實ヲ述フルト謂フ代リニ單ニ正實ヲ述フルト宣誓シタル時千八百五十二年五月十八日、千八百五十二年九月十四日、同年同月二十一日、千八百四十九年二月一日、千八百四十八年九月十四日、同月一日、同年九月十三日、大審院判決○證人正實ノミヲ述フ可キ旨ヲ附加セサリシ時千八百四十六年七月九日、千八百五十年八月八日、千八百五十年九月九日、千八百五十年九月二十七日、大審院判決以上數多ノ大審院判決ニテ其誓詞ノ取消ヲ命シタルハ全ク其規文ノ語詞ヲ缺キタルニ因ルナリ

第七百五十三號 誓詞ハ必ス對質ノ調書ニ之ヲ證明ス可シ而シテ又此調書ニハ法條ノ命スル所ノ規式ハ悉ク之ヲ遵奉セシ旨ヲ明記スルヲ要ス故ニ左ノ場合ニ於テハ必ス其取消ヲ命ス可キ者トセリ何トナレハ調書ニ記載ナキ法式ハ悉ク之ヲ缺亡サレタル者ト看做ス可キヲ以テナリ○調書ニ證人ノ誓詞ヲ全ク記セサル時千八百十八年九月十一日、千八百十九年九月十一日

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

四月七日千八百四十七年 ○調書ニ謄寫シタル法式中ニ一文詞或ハ數多
 ノ文詞ヲ缺キタル時千八百二十七年一月但、文詞中綴字ノ誤リハ別段
 關係ナシ百五十二年七月四日大審院判決單ニ證人誓詞ヲ宣ヘタル上
 ニテ○共中述ヲ爲シタル旨ヲ調書ニ記シタル時千八百四十四年三月或
 ハ單ニ法律上ニテ規定アル誓詞ヲ宣ヘタル旨ヲ記シタル時千八百一
 九月十五日千八百五十四年或ハ誤テ見合セノ爲メニ誓詞ノ規文ノ記載ア
 ル法條ニ非サル箇條ヲ記シタル時千八百七十三年十
 然レモ又左ノ場合ニ於テハ別段其取消ヲ命スルニ及ハストセリ○證
 人第三百十七條ニ規定アル誓詞ヲ宣ヘタル旨ヲ記シタル時千八百三
 五月十七日千八百三十九年 ○證人第三百十七條ニ記定アル例詞ニ循テ
 誓詞ヲ宣ヘタル旨ヲ記シタル時千八百四十九年二月 ○又誓詞ヲ宣ヘ
 且ッ第三百十七條ニ規定有ル法式ヲ執行シタル旨ヲ記シタル時千五

十四年三月五日千八百四十八年 ○又中述ヲ爲シタル數多ノ證人等ハ悉ク
 第三百十七條ニ規定有ル例式ニ循テ誓詞ヲ宣ヘタル旨ヲ一度ニ記
 シテ認定スルノミヲ以テ足レリトス 千八百三十四年七月八日大審院
 判決

若シ一個ノ事犯ニシテ數會ヲ要スル者有ル時ハ必ス各會ノ調書ヲ以
 テ其中述ヲ爲シタル證人ノ誓詞ヲ證スルヲ要ス、前會ノ誓詞ヲ以テ次
 會ニ及ホスニハ必ス格別ニ密着シタル關係有ル時ニ非サレハ之ヲ爲
 スコトヲ得ス 千八百一十二年四月十八日、千八百二十四年九月二十日、同
 以上陳ヘタル事柄ハ總テ負責證人ト免責證人トニ拘ハラス共ニ之ヲ
 通行ス可キ者ナリ 千八百五十七年四月九日、千八百五十六年六月十三日、
 大審院
 判決

第七百五十四號 證人誓詞ヲ爲スニハ常ニ左ノ規則ニ依遵ス可シ上

證人其證ヲ陳フルニ附キ依遵ス可キ法式

席人先ツ其誓詞ノ例文ヲ讀上ケタル後テ證人ハ脱帽直立シ右手ヲ舉
ケ以テ(余之ヲ盟フ)ト答フ可シ

然レモ此宣誓ノ方法ハ決シテ變更スルコト能ハスト謂フ可キ者ニ非ス
例之ハ證人疾病ナル時ハ必スシモ殊更ニ帽ヲ脱シ直立シテ誓詞ヲ宣
フルヲ要セス又必スシモ右手ヲ舉ルヲ要セス何トナレハ是レ全ク一
個ノ慣習ニシテ嘗テ法律ニ規定セシメ無キ者ナルヲ以テナリ
十月八日、千八百六十六年 又證人ノ答詞明確ナルニ就テハ別段余之ヲ
七月二十六日大審院判決 盟フ)ト言フノ答ヲ爲サスモ可ナリ
月二日大審院判決

軍人自カラ證ヲ陳フル時ハ先ツ豫メ其兵器ヲ渡シ置クヲ以テ常トス
然レモ假令ヒ刀劍ヲ携帯シテ其中述ヲ爲スト雖モ是ヲ以テ別段法律
ヲ犯シタル者ト謂フ可カラズ
千八百三十六年六月 第七百五十五號 常ニ其證人ノ違奉スル所ノ宗教ニ循テ其誓詞ノ方

法規式ヲ異ニスルコト有リ證人ハ各自ノ崇奉スル所ノ宗旨ニ因リ定
メラレタル法式ニ循テ宣誓スルヲ得可シ
千八百二十年七月十二日、千八
百二十年四月九日大審院判決
決故ニ猶太教ヲ奉スル者ハ其教法「モールシユダイコー」ニ循テ誓詞ヲ
爲スコトヲ得
千八百二十二年十二月 又回教ヲ奉スル者ハ手ヲコラン
同教法
タル書ノ上ニ置キ其宗教ノ法式ニ循ヒ且ツ其回教ヲ奉スル裁判補官
ノ面前ニテ誓詞ヲ陳フルコトヲ得
千八百三十八年二月 又「カケ」宗旨ハ
法律上ノ誓詞ヲ宣フルヲ禁スルカ故ニ其教徒ハ單ニ自己ノ魂魄ト本
心トニ循テ眞實ノ事ノミヲ陳フルト謂フノミヲ以テ足レリトス
千八
百十八
年三月二十八日大審院判決 然レモ異教ノ宗旨ヲ奉スル證人通常ノ誓詞ヲ宣フルモ
更ニ支障有ルコト無シ
千八百二十六年五月十九日、千八百二十八年七月
故ニ異教ヲ奉スル證人其誓詞ヲ宣フル時自己ノ宗旨ノ定則ニ循フモ
若クハ法律上ニ規定有ル通常ノ法式ニ據ルモ其手續ノ正當ナル事ニ

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

附テハ更ニ支障有ルヲ無シ

第七百五十六號 證人ノ申述ニ關スル法式○都テ證人ハ其誓詞ヲ宣
ヘタル上ニテ其中述ヲ始ムルナリ第三百十七條ニ據レハ證人ハ總テ
口上ニテ證ヲ述フ可シト謂ヒ又第三百十九條ニ據レハ證人其證ヲ述
フル間ハ他ヨリ詞ヲ參フ可カラスト謂フ故ニ證人ハ悉ク口上ニテ自
由ニ其證ヲ供述ス可キナリ
是レ蓋シ訟庭ノ吟味ハ悉ク口上ニテ之ヲ爲ス可シ云々ナル刑事吟味
ノ一大原則ヲ適施シタル者ナリ

對質中ニハ書記吟味ヲ爲スヲ得ステニ其訟庭ニ於テ得ル所ノ證據
類ヲ詳認スルヲ要ス因テ對質ヲ爲ス時ハ最早書類ニ就テ吟味ヲ爲ス
ヲ止ムルナリ蓋シ書記ノ吟味ハ口上ノ吟味ヲ爲ス時ニ比較照驗ス
ル爲メノ具ト爲ルノミ對質ハ自由辯護ニ基キテ自カラ其吟味ノ資料

ヲ得ルチ主トス千八百四十年十一月七日、千八百六十六年五月三十一日、大審院判決此規則ハ固ヨリ重
要ノ者ナリト雖モ其適度ノ外ニ及ホス可カラズ故ニ何レノ性質タル
ヲ問ハズ書類及ヒ其他ノ書類ヲ對質中ニ差出スモ更ニ支障有ルヲ
無カル可シ何トナレハ書記ノ證據ハ總テ口上ノ證據及ヒ有形ノ證據
ト等シク常ニ之ヲ喚起スルヲ得可キカ故ナリ然レモ其書類ハ必ス
又之ヲ口上吟味ニ懸ケ以テ評察議定セサル可カラズ而シテ其陪審官
ノ法則タル可キ無形ノ證據ノ資料ノミヲ選取ス可シ

第七百五十七號 故ニ對質ハ悉ク口上吟味ヲ要ス云々ノ規則ニハ其
例外アリ又其制限アリ其例外ト爲ス可キ者ハ即チ左ノ如シ○第一、第
六百十四號第六百十五號、第六百十六號ニ記載アル場合若クハ證人申
述ノ異同ヲ調査スル時ニ上席人ヨリ其證人ノ差出シタル書類及ヒ豫
審吟味ノ書類ヲ朗讀セシムル事第七百六十八號參考○第二、共和二年芽月十八

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

日ノ勅令ニ據テ現ニ兵役中ニテ事犯ノ土地ニ在ラサル軍人ニ陳述書ヲ認メテ送付スルヲ許シタル事但、此勅命ハ果シテ法律ノ勢力アルヤ否ヤハ太々疑フ可キ者ナルヲ以テ必要ノ場合ニ於テハ必ス共者自カラ出席セサル可カラス○第三、第五百十條以下ノ諸簡條及ヒ千八百十二年五月四日ノ勅命ヲ以テ若干ノ官吏ニ陳述書ヲ控訴院へ差出ス可キ旨ヲ命シタル事○以上ノ例外ハ各、確手タル定限アル者ニシテ是ニ由テ却テ其一般ノ規則ヲ重固ナラシムルニ至ルナリ

第七百五十八號 其制限タル者モ亦甚々僅少ナリトス對質ハ必ス口上ニテ爲ス可シ云々ノ原則ヨリ生ス可キ結果ノ一ハ即チ證人ハ總テ陳述書ヲ讀ムヲ得ス又其略記書ヲ見ルヲ得スト謂フ事ナリ千八百十九年四月十二日大審院判決

然レモ事柄ニ因テハ證人自カラ其略記書ヲ參觀スルヲ得ル場合アリ

例之ハ數字、計算書、計價書又ハ學問上ニ關スル表目等ニ附テ吟味ヲ行フ場合ノ如キ是ナリ千八百二十一年三月二十日大審院判決又證人ハ上座人ノ許可ヲ得テ其事犯ニ關スル書狀或ハ諸多ノ書類等ニシテ自己ノ差出シタル申述中ニ在ラサル者ハ自カラ之ヲ宣讀スルヲ得可シ但、此書類等ハ悉ク其吟味ニ接續スル者ナルヲ要ス千八百四十一年一月二十六日、同年十二月二日、千八百四十一年六月六日大審院判決又此等ノ書類ハ其證人ノ申述ヲ終リタル後チ記憶參考ノ爲メニ陳述書ト共ニ之ヲ合併シ置クモ更ニ差支へ無カル可シ

第七百五十九號 證人其證ヲ述フル間ハ妄リニ他ヨリ辭ヲ參フ可カラス第三、百九條何トナレハ若シ他ヨリ言ヲ發シ辭ヲ參フル時ハ必ス其供述ノ自由ヲ害シ且ツ其陳辯ノ順序ヲ錯亂スルノ恐アルヲ以テナリ證人自カラ其申述ヲ終リタル後ニ非サレハ此ニ可疑スルヲ得ス若シ

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

證人本件外ノ事ニ立入り無益ノ贅言ヲ述フル時ハ上席人ヨリ之ヲ制止スルヲ得千八百二十九年九月然レモ方サニ之ヲ制止スルハ何レノ場合ナル乎ヲ識別スルハ常ニ太ク難シトス證人妄リニ無根ノ評說若クハ本件ニ關係ナキ事ヲ申述ル時ハ必ス之ヲ制止スルヲ要ス然レモ若シ其評說果シテ信據ス可キ者ナル乎又若シ其他事ニ立入りテ述フル所ノ專柄ハ甚ダ本件ニ接近シタル者ニシテ稍本件ヲ詳明ナラシムルニ足ル乎又ハ若シ證人ノ性、辯說中常ニ贅言ヲ述フルノ癖有ル乎此等ノ場合ニ於テハ妄リニ其中述ヲ制止ス可カラス

第七百六十號 證人ハ決シテ之ヲ糾問ス可カラズ單ニ其中述ヲ聽斷スルヲ要ス此規則ハ數多ノ法條ニ明記スル所ナリ第七十三條、第七百十五條、第三百二十一條、第三百二十二條、第三百二十三條、第三百二十四條證人ハ自己ノ思フ所ニ從ヒ、自己ノ欲スル所ノ言語ヲ用ヒ以テ自由ニ其中述ヲ爲ス可キナリ

犯人ノミニ適行ス可キ糾問ノ權限ヲ問、現ハスコト有テニ固リ證人ハ覺ヘス其答議ヲ爲スコト有リ又問、之ヲ促カスニ至ルコト有リ又其質疑ニ因リ遂ニ錯雜紛亂ノ申述ヲ爲スコト有リ是レ甚ク不適當ノ事ナリ
 上席人ハ證人ノ申述ヲ終リタル後ヲ其證ヲ完全ナラシメ以テ事實ヲ明白ナラシムル爲メニ必要ナリト思フ所ノ諸件ヲ單ニ其證人ヲ問フコトヲ得第三百九條然レモ上席人ハ常ニ自カラ注意シテ其證人ニ扶助シ、此ニ其失忘シタル事柄ヲ指示シ、此ニ其中述タル證ノ主眼ヲ喚起シ、此ニ其過分ノ申述ヲ附加スルヲ避ケシメ以テ其疑問ヲ爲ス可キナリ決シテ證人自カラ欲セサル所ノ事柄ヲ其證ニ附加スル爲メ又強ヒテ其中述ノ趣旨ヲ曲クル爲メ又強ヒテ其危疑スル所ノ者ヲ確定セシムル爲メ都テ此等ノ目的ヲ以テ其問ヲ爲ス可カラス
 第七百六十一號 證人ノ取調○各證人其證ヲ述ヘ終リタル後ニハ第

證人其證ヲ陳ノルニ附キ依違ス可キ法式

三百十五條ニ記スル證人ノ取調ヲ爲ス者トス蓋シ共述ヘタル證ヲ評議スルヲ謂フ

上席人ハ先ツ其證人ニ對シテ其述フル所ハ現ニ共席ニ在ル犯人ノ事ニ相違無キヤヲ問ヒ且ツ若シ罪證ト爲ル可キ者有ル時ハ之ヲ差出サシムルナリ此規則ハ第三百十九條及ヒ第三百二十條ニ規定スル所ニシテ假令ヒ之ヲ執行セスト雖モ必スシモ其手續キヲ取消スヲ要セス
次ニ上席人ハ犯人ニ對シ證人ノ述フル所ノ犯罪ノ證ニ答辯セント欲スルヤ否ヤヲ問フ第三百十九條又犯人若クハ其辯護人證人ニ問ハント欲スル者有ル時ハ其證人證ヲ述ヘ終リタル後之ヲ其上席人ニ依頼ス可シ然ル上ニテ犯人又ハ辯護人其證人ト共申述タル犯罪ノ證トニ附キ犯人ノ權利ヲ護スルニ有益ナル者ヲ述フルヲ得可シ且ツ大審院ニ於テハ犯人及ヒ其辯護人ハ一旦糾問ノ濟ミタル共同犯人ノ爲メニモ

亦右ノ陳述ヲ爲スノ權有リト判決セリト謂フ千八百六十六年八月三十一日大審院判決

第七百六十二號 第三百十九條ニ據レハ犯人又ハ辯護人ハ證人ニ對抗シテ總テ犯人ノ權利ヲ保護スルニ有益ナル者ヲ述フルヲ得可シト雖モ單ニ犯人ノ爲メニ有益ナリト思料スル者ヲ述フルヲ得ス其間必ス詳定ス可キ限界有リ

若シ其權利ヲ保護スル爲メニ述フル所ノ疑問ハ其犯罪ノ告訴ニ關スル手又ハ犯人若クハ其辯護人ノ德義行狀ニ關スル時ハ許シテ之ヲ爲サシム可シ故ニ放火ノ告訴ヲ受ケタル犯人ハ證人ニ對シ或ハ其家主自カラ失火シタリトノ評說無キ手ヲ問フヲ得可シ千八百二十四年九月十八日大審院判決又官吏ヲ誹謗シタルノ訴ヲ受ケタル犯人ハ證人ニ對シ官吏ハ其時酌量中ニハ非サリシ手ヲ問フヲ得可シ然レモ其辯護ノ爲メニ有益ナル事柄ニ非サレハ妄リニ之ヲ述フルヲ得ス

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

抑犯人ノ權利ハ自カラ其辯護ヲ爲スニ在リ而シテ此權利ハ其辯護ノ爲メニ有益ナル者ヲ述フルニ附テハ實ニ確的ナル者トス因テ犯人其疑問ヲ爲スニ附キ證人若クハ本犯ニ關セサル他人ヲ害スルニ至ルト雖モ更ニ支障有ルヲ無カル可シ但其疑問ハ必ス本件ニ有益ニシテ且ツ相關接スル者タルヲ要ス

故ニ左ノ場合ニ於テハ其疑問ヲ爲ス可カラスト判決セリト謂フ○證人ノ行狀ニ關セス全ク訴訟外ノ事柄ニ附テハ疑問ヲ爲ス可カラス八千一百二十九年十月○被害者ノ行狀ハ常ニ正直良善ナルヤ否ヤノ疑問ヲ爲ス可カラス十四日大審院判決○辯護ノ爲メニ無益ニシテ訴訟外ノ事ニ關スル時妄リニ人ノ品行ニ關ス可キ疑問ヲ爲ス可カラス二千八百九十九年九月二十二日大審院判決○證人ニ對シテ不敬罵詈ニ涉ル可キ疑問ヲ爲ス可カラス二千八百九十九年九月二十二日大審院判決○願書ノ終尾ニ偽花押ヲ爲シタルニ附キ訴ヘラ

ソタル者ハ其證人ニ對シ自カラ之ヲ承認スルヲ欲セサルヤ否ヤノ疑問ヲ爲ス可カラス千八百五十年十二月

第七百六十三號 辯護ノ爲メニ疑問ヲ爲スノ有益ナルト否トヲ決定スルハ常ニ自カラ其對質ヲ指揮スルノ權ヲ有スル所ノ上席人ナリトス千八百一十七年四月十一日、千八百三十五年十月二日而シテ若シ又はカ爲メニ其故障ヲ生シタル時ハ重罪審院之ヲ處斷ス可シ千八百二十四年八月五日大審院判決辯護者ヨリ其故障ヲ申立ルニ附キ附屬裁判ヲ爲ス時ハ必ス重罪審院之ヲ處理ス可シ千八百三十七年四月十四日大審院判決而シテ其重罪審院ノ判決善ク事實ニ適シタル時ハ固ヨリ確定ノ者タル可シト雖モ千八百二十九年十月十一日、千八百一十八年九月二十日權利ヲ害ス可キ不當ノ判決ヲ爲シタル時ハ必ス其上告願ヲ爲シ以テ之ヲ攻撃スルヲ得可シ千八百五十年十二月

證人其證ヲ陳フルニ附キ依テス可キ法式

第七百六十四號 辯護者ハ各證人ノ申述ヲ爲ス毎ニ其疑問ヲ爲ス
 得ルノミナラス又其中述ヘタル證據ノ主義要旨ノ如何ヲ確認スル
 爲メニ之ヲ質議スルヲ得可シ但其質議ハ直ニ之ヲ爲ス可キカ若ク
 ハ其犯人ノ爲メニ更ニ開應スル迄延滯ス可キ者ナルカテ決定スルハ
 特リ上席人ノ權ナリトス千八百三十五年十月
 二十一日大審院判決
 若シ又上席人若クハ重罪審院ノ決定アルニ拘ハラス辯護者ヨリ證人
 ニ對シテ誹謗弄辱ノ言ヲ陳ヘタルニ因リ其輕罪ニ涉ル者有ル時ハ重
 罪審院ハ其權ヲ以テ直ニ其刑ヲ言渡スヲ有リ又ハ輕罪ノ訴ハ暫ク見
 合セ置クヲ有リ第一百八條若シ此二個ノ方法中何レモ之ヲ執行セサリシ
 時ハ以後其訟庭ノ所爲ニ就テ訴ヲ爲スヲ得ス千八百十九年五月十
 七口ノ法第二十三條
 千八百三十八年八月
 二十三日大審院判決
 第七百六十五號 第三百十九條ノ末項ニ曰ク、上席人ハ事實ヲ明白ナ

ラシムル爲メ必要ナリト思量スル所ノ諸件ヲ自己ハ特權ヲ以テ證人
 ニ訊問スルヲ得可シ又裁判官、檢事長、陪審官ハ上席人ノ許可ヲ得タ
 ル上ニテ同上ノ諸件ヲ證人ニ訊問スルヲ得可シ又民事原告人自カ
 テ、問ハント欲スルヲ有ル時ハ上席人ニ請願シテ之ヲ訊問セシム可シ

ト
 本文ト前項トヲ比照シテ之ヲ觀ルニ犯人ハ先ツ他人ヨリ前ニ其事件
 ニ必要ナル質疑ヲ爲ス可シ然ル上ニテ他人ヨリ其事實ヲ明白ナラシ
 ムル爲メノ訊問ヲ爲ス可キナリ
 然レモ大審院ニテハ左ノ如クニ判決セリト謂フ(第三百十九條ハ證人
 ニ質疑ヲ爲スノ權ヲ有スル者ヲ例示シタルノミニシテ敢テ其權ヲ行
 フニ附テノ順序ヲ確定セタルニ非ス因テ常ニ對質ヲ指揮スルノ任ヲ
 負擔スル所ノ上席人自カテ事宜ニ適當ナリト思料セシ時ハ犯人若ク

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

ハ其辯護人ヨリ前ニ先ツ證人ニ其質疑ヲ爲スノ權ヲ與フルヲ得千八百九十一年九月三十一日、千八百九十一年一月三十一日大審院判決

又第三百二十五條ニ反シ上席人ニ請ハスシテ二個ノ證人若クハ一個ノ證人ト犯人ト互ニ質疑ヲ爲スト雖モ決シテ其規則ニ違背セシ者ト謂フ可カラズ蓋シ此等ノ法章ハ專ラ訟庭ノ順序及ヒ其指揮等ニ關スル者ニシテ假令ヒ之ヲ犯ス千八百九十二年四月十一日、千八百九十二年十二月二日大審院判決ト有ルモ定ニ些細ノ事タルニ過キサルナ

第七百六十六號 第三百二十六條ノ證人ニ於ケル恰モ第三百二十七條ノ犯人ニ於ケルカ如シ蓋シ其事實ヲ發顯スルニ容易ナル爲メノ吟味ノ方法ヲ規定スル者ナリ

犯人又ハ檢事ハ證人等ノ證ヲ述ヘ終リタル後チ其別段指示スル所ノ證人チ一旦吟味ノ席ヨリ退去セシメタル上更ニ一人毎ニ出席シテ其

證ヲ述ヘシメ或ハ數人相對シテ其證ヲ述ヘシムルヲ求ムルヲ得可シ又上席人ハ自己ノ特權ヲ以テ同上ノ事ヲ命スルヲ得可シ一旦初度ノ申述ヲ終リタル後ニ非レハ此再度ノ申述又ハ其對審ヲ要ム可カラズ是レ又吟味ノ一方法ニシテ犯人及ヒ檢事ハ常ニ之ヲ挑撥スルノ權ヲ有スレハナリ

此請願ニ附テハ必ス上席人自カラ之ヲ處斷ス可シ又若シ其故障ヲ述フル者アル時ハ重罪審院ニ於テ之ヲ處理ス可シ千八百九十四年七月一日、千八百九十五年八月二十七日大審院判決

第七百六十七號 證人其席ニ在ル事○第三百二十條ニハ二個ノ規則ヲ記セリ、一ハ證人ハ其證ヲ述ヘ終ル迄吟味ノ席ニ留マル可シト謂ヒ、他ノ一ハ證人ハ其對質ヲ閉止シタル後ニ非サレハ退ク可カラスト謂フ蓋シ此二個ノ法則ハ敢テ其手續ノ爲メニ緊要ノ式ナリトハ謂フ可

證人其證ヲ陳フルニ附キ依違ス可キ法式

カラサルナリ假令ヒ其對質ヲ閉止スル前タリト雖モ上席人ハ許ルシ
テ其證人ヲ退カシムルヲ得但、犯人尙ホ其證人ノ辯解ヲ要ス可キ者ナ
リト思料シタル時ハ上席人ノ許可ヲ拒ムノ權有リトス若シ其權ヲ行
ハサリシ時ハ其證人ノ不在ナルニ附キ更ニ故障ヲ述フルコト得ス八
百二十七年四月七日、千八百四十四年一月十七日、同年三月十一日、千八百四十九年
七月十一日、千八百五十四年一月十八日、同年三月八日大審院判決

○第四節 偽證ノ嫌疑

第七百六十八號 證人供述變更ノ錄取○第三百七十二條ハ先ツ、被告
人ノ答辭并ニ證人供述書ニ載スル所ヲ調書ニ登記ス可カラスト定メ
而シテ但書ヲ加ヘテ曰ク、證人ノ供述變更齟齬スルニ附キ第三百十
八條ノ規則ヲ施用スルヲ妨ケスト蓋シ第三百十八條ハ裁判長ニ命ス
ルニ書記ヲシテ證人ノ供述ト其以前供述シタル所ト増加ノ差異ヲ錄
取セシム可キ旨ヲ以テセリ抑、此檢證タルヤ偽證ヲ推測スルニ出ツル

第三百十八條
第三百三十條
及第三百三十條
一

者ニシテ乃チ第三百三十條ニ於テ聽許シタル處分ヲ行フノ豫備ナリ
今此等ノ法文ニ據リ之ヲ考フルニ其定ムル所ハ○第一、豫審中訊問シ
タル證人ニ限り之ヲ適用ス可シ何トナレハ以前ノ供述ニ齟齬スル申
立ヲ爲スハ獨リ其證人ニ限レハナリ 千八百三十五年四月十日、千八百
○第二、故ニ同一ノ訟庭辯論中屢、訊問シタル證人ニ適用ス可カラス
何トナレハ其數次ノ供述ハ即チ同一ノ供述タルニ過キサレハナリ○
第三、參考ノ爲メ訊問シタル者ニ適用ス可カラス何トナレハ其供述ハ
偽證ノ控告ヲ爲ス可キ證憑ト爲スニ足ラサレハナリ○第四、供述書ニ
記載シタル所ニ變更スル時ニ非サレハ之ヲ適用ス可カラス 千八百十五
年一月十日大審院判決 但、供述ニ因リ被告人ニ對シ更ニ犯罪ヲ發覺シタル場合即チ
第三百六十一條ノ場合ハ此限ニ在ラサルナリ 千八百五十年一月 被告
人并ニ檢察官ハ此檢證ヲ爲サンコトヲ裁判長ニ請求スルヲ得可シ若シ

偽證ノ嫌疑

裁判長ノ之ニ應セサルニ於テハ院其曲直ヲ判ス可キナリ
一千八百二十年九月二十二日大審院判決

第七百六十九號 偽證ノ嫌疑○第三百三十條ハ供述ノ詐偽ニ涉ル者

ト思料ス可キ所ノ證人ヲ捕拿スルヲ聽ス其之ヲ捕拿スルニ附テハ
證人以前ノ供述ニ差異増加アル中立ヲ爲スヲ以テ足レリトセス必ス
偽證タルノ嫌疑アルヲ要ス夫ノ以前ノ供述ヲ正シ又會テ緝晦シ并ニ
否トスル所ヲ更メテ供述ヲ増加スルハ是レ必スシモ犯罪ノ原質ナリト
セス刑法第三百六十一條以下ニ照スニ事實ニ存スル供述ニシテ宣誓
シタル後ヲ他人ノ訴訟事件ニ附キ其訴訟ニ必要ナル模様ヲ證スル爲
メ他ヲ害スルノ意ヲ以テ之ヲ爲シ且ツ或ハ之ガ爲メ損害ノ生ス可キ
時ニ非サレハ偽證タルノ疑アル可キ者ト爲サス故ニ供述ニ於テ荷モ
此等ノ性質ヲ有スルニ非サレハ證人ヲ捕拿スルヲ聽許セサルナリ

第七百七十號 第三百三十條ハ裁判長ニ付與スルニ或ハ其職權ニ因
リ或ハ訴訟關係人ノ請求ニ因リ前述ノ處分ヲ行フノ權ヲ以テセリ
一千八百七十七年三月二日、千八百八十三年十二月二日、
千八百八十八年六月十六日、千八百九十一年一月一日大審院判決
但、其命令狀ニハ理由ヲ附セサルヲ得可シ
千八百九十四年大審院判決
其命令ニ附テハ關係人故障スルヲ得可シ若シ其故障アル時ハ重罪審院之ヲ判決ス
千八百九十二年五月五日大審院判決
蓋シ此場合ニ於テ事件ヲ他日ノ公判ニ付シ又ハ訟庭ノ辯論ヲ繼續
ス可キヤ否ヤヲ判決スルハ獨リ重罪審院ノ管轄ニ屬ス
第三百三十一條 若シ他日ノ公判ニ讓リ或ハ訟庭ノ辯論ヲ終成スルノ前供述ヲ變更セサル
ニ於テハ裁判長ハ捕拿ヲ廢止スルヲ得ス
千八百九十二年十一月一日大審院判決
然レモ辯論中證人其供述ヲ改良釐革スル時ハ罪科ハ共ニ捕拿ヲ止ムル
者トス
千八百九十一年十一月十一日大審院判決
抑、此處分タルヤ斯ノ如キ場合ニ於テハ其性質タル假リニ行フ所ニ過キス而シテ訟庭ノ辯論ヲ終成シ
第三百三十一條

シ本案ノ事件數箇ニシテ之ヲ區分スルヲ得可キ時ハ偽證アル所ノ事件ニ限リ其裁判ヲ他日ニ讓ル可シ且ツ夫レ他日ニ讓ルハ前條ノ場合即チ「證人ノ供述詐偽ニ涉ルト思料ス可キ時」ニ非サレハ之ヲ命スルヲ得ス假令ヒ變更又ハ齟齬スルコアルモ詐偽ヲ推測セサルヨリハ之ヲ命ス可カラズ又證人ノ貨財ニ穢ルコ有ルモ偽證ヲ繼續セサルヨリハ之ヲ命ス可カラサルナリ
千八百十九年八月廿八日大審院判決
 其公判ヲ他日ニ讓ルハ特リ重罪審院ノ判決スル所ニシテ訴訟關係人ヨリ之ヲ拒ムコトヲ得ス
千八百三十九年九月十四日大審院判決
 其他公判ヲ他日ニ讓ルノ原由ハ第三百六條、第三百五十四條及ヒ第四百六條ニ明文有リ就テ見ル可シ

第三百三十二條及第三百三十三條

第五節 通譯人ノ立會

第七百七十三號 如何ナル場合ニ於テ通譯人ヲ命スル乎○第三百三十三條

十二條及ヒ第三百三十三條ニ據ルニ通譯人ヲ命スルハ二箇ノ場合ニ於テス○第一、被告人又ハ證人佛語ニ通セサル時○第二、被告人又ハ證人聾啞ナル時はナリ其第一ノ場合ニ於テ第三百三十二條ノ定ムル所ヲ見ルニ曰ク「被告人、證人又ハ此等ノ者ノ一名同一ノ國語ニ通セサル場合ニ於テハ云々」ト此法文ヲ推スニ被告人又ハ證人方言ニ通セサルモ其方言ヲ以テ供述スル所ヲ解スル時ハ通譯人ヲ用ユルヲ要セサルヲ知ル可シ
千八百三十五年七月廿三日大審院判決
 第二ノ場合ニ於テ法律ノ定ムル所ハ眞ノ聾且ツ啞ナル場合ニノミ之ヲ適用シ
千八百三十五年七月廿三日大審院判決
 聾啞者文字ヲ知ラサル場合ニ限ル者トセサル可カラズ
千八百五十四年十二月廿九日大審院判決
 然レモ其法文ハ聾ニシテ啞ナラス及ヒ啞ニシテ聾ナラサル者文字ヲ知ラサル時ハ之ヲ適用スルナリ

第七百七十四號 第三百三十二條及ヒ第三百三十三條ハ敢テ制限ヲ

通譯人ノ立會

設ケタルニ非ス其適施スル所ノ原則ハ必ス渾テ通譯人ノ立會ヲ要スル場合ニ及ホス可シ是レ左ノ場合ニ於テハ通譯人ヲ用ユ可シトノ判決アル所以ナリ其場合トハ即チ被告人ト裁判官并ニ陪審ト互ニ其言語ノ相通セサル時共和八年「プロメ」證人其國語ヲ異ニセスト雖モ其言語ノ解シ難キ時千八百四十五年七月二十二日大審院判決證人白痴ニシテ其供述難澁ナル時千八百四十九年十二月十六日大審院判決陪審ノ一名訟庭ノ辯論中ニ用ユル所ノ言語ヲ解セサル時千八百四十四年五月證人老衰シテ其述ル所其聽ク所明カナラサル時千八百六十年四月五日大審院判決是ナリ

第七百七十五號 法律ノ定メタル場合ニ於テ通譯人ヲ立會ハシムルハ必要ナル法式ニシテ假令ヒ被告人緘黙シ敢テ争フコト無キモ決シテ其クコトヲ得ス千八百四十二年二月二十二日大審院判決而シテ調書ニハ必ス

其立會アリタル旨ヲ檢證記載ス可シ故ニ被告人又ハ證人中其言語ノ相通セサル證アリ而シテ調書中通譯人ノ訟庭辯論ニ參シ其職ヲ盡シタル旨ノ記載ナキ時ハ其効アルコト無シトス然レモ此法式ヲ履行シタル旨ヲ檢證スルニ附キ別段書式アルコト無シ判決例ニ據ルニ調書中通譯人ヲ命シタル旨ヲ檢證シ又ハ第三百三十二條ノ規則ニ循ヒタル旨ヲ記載スルヲ以テ足レリトシ千八百二十九年一月十五日、千八百二十二年八月十六日大審院判決通譯人ノ立會タル旨ヲ調書ニ記載スレハ則チ通譯人ハ訟庭辯論ニ參シ其職ヲ盡シタルコトヲ推測スル者トス千八百三十五年四月二十三日、千八百三十四年九月二十日、千八百五十年二月二十三日、同年十二月十二日、千八百五十七年一月三十日、千八百六十四年七月七日通譯人ノ事ニ關シ毫モ調書ニ記載スル者無ケレハ則チ其立會ヲ不用ト認メタルノ推測アリ殊ニ左ノ場合即チ被告人ニ於テ通譯人ノ立會ヲ請求セサル時千八百七十二年六月、千八百七十七年十一月被告人佛語ヲ解セサルノ檢證ナキ時千八百一十一年十一月

辯論ノ全部ニ附キ充分國語ヲ解シタルノ推測アリトシ千八百四十六年十一月十七日判決又唯、證人ノ供述ニ際シ被告人ヨリ通譯人ヲ命ゼンコト申請スル時ハ其供述ヲ除クノ外通譯人ノ立會ヲ要セサルト被告人自カラ思料シタル者ト看做ス可シトセリ千八百五十六年三月三十一日、然レハ時狀ニ由リ斟酌スルコトヲ要ス乃チ訟庭辯論中被告人充分ニ國語ヲ解セス以テ辯論ノ細密煩雜ナルニ堪ヘサル者トスル時ハ其被告人ニ於テ干預スルヲ得サリシ所ニ係ル辯論ノ一部ヲ保存スルヤ蓋シ難カル可シ

第七百七十八號 通譯人タルヲ得可キ者ハ何人ナル乎○被告人又ハ

證人同一ノ國語ニ通セサル時ト聲啞若クハ其他ノ痲疾ニ罹リタル時トナ區別セサル可カラス共第一ノ場合ニ於テハ何人ヲ論セス苟モ二十一年以上ニシテ且ツ證人ニ非ス又裁判官並ニ陪審ニ非サルヨリ

ハ通譯人ト爲スコトヲ得可シ第三條三三三此二箇ノ要件中第一ノ者ハ之ヲ檢證スルヲ要セズ只當然推測シテ以テ通譯人トシテ出庭スル者ハ訴訟ノ時ニ方リテ法律ノ定メタル年齢ニ適スル者トス千八百十八年四月十六日、千八百四十六年四月九日大審院判決其職務ヲ兼行スルヲ得サルハ第二ノ要件ニシテ且ツ檢察官並ニ被告人ノ承諾アルモ決シテ能スル所ニ非ス但、此要件ハ裁判官陪審官又ハ證人ト成リ以テ訴訟ニ干預スル者ニ限り之ヲ適施ス可シ故ニ裁判陪審ニ適施スルヲ得可キモ敢テ其他簿冊ニ登記シタル陪審ニシテ抽籤ニ中ラサル者ニ適施ス可カラス千八百五十二年五月十六日、同年七月又特リ訊問ノ爲メ呼出シタル證人ニ適施ス可ク敢テ簿冊ニ登記シタルノミニテ訟庭ニ呼出サ、ル所ノ者ニ適施ス可カラス千八百二十七年六月然レモ必ス訊問ス可キノ證人ニ附テハ其宣誓ノ後ヲ供述スルト參考ノ爲メ供述スルトノ別ナク皆之ヲ適施ス

通譯人ノ立會

第七百八十二號 通譯人ノ宣誓ハ概テ訟庭ニ於テ檢察官並ニ被告人
 即チ時ニ由リ忌避スルヲ得キ者立會ノ上之ヲ爲サシムルヲ例トス
 然レモ訟庭ヲ開カサルノ前宣誓セシムルヲ得可ク月一日、同年十一月
 二十三日大 又檢察官若クハ被告人ノ立會無クシテ宣誓セシムルモ其
 通譯ヲ無効ト爲サ、ル月八日大審院判決六ノ判決アリ若シ公判席ニ於
 テ宣誓セシムル時ハ其旨ヲ公判調書ニ登記ス可ク七月、千八百二十六年
 大審院判決日訟庭外ニ於テスル時ハ調書ヲ作り其旨ヲ檢證ス可シ都テ
 調書ニハ通譯人法律ニ定メタル誓言ヲ宣述シタルヲ記載スルヲ以
 テ足レリトシ月八日大審院判決十二 又審判ノ數回ニ渉ル時ハ一回其旨
 ヲ檢證スルヲ以テ足レリトシ宣誓ノ効力ハ審判中ニ及フ者トス百三
 月二十五年四月一日、同年大審院判決一而シテ一證人ノ訊問ニ附キ宣誓セシムル時ハ
 他ノ證人ヲ訊問スルニ附テモ其効力アリ八月、千八百四十四年五月二十四日、千

判決院 然レモ一事件ノ終結スルニ及ンテハ直ニ其効力ヲ失フ故ニ各

事件ニ附キ更ニ宣誓セシメサル可カラス月十日大審院判決十二

第七百八十三號 通譯人ノ職務○通譯人ノ職務ハ審判中被告人ノ補
 翼トナリ以テ其被告人辯護ノ爲メ申陳スル所並ニ辯論中他ノ申陳ヲ
 爲シ而シテ被告人ノ解セサル所ヲ誠實ニ譯述スルニ在リ然ルヲ以テ
 嚴ニ被告人ノ補翼タルヲ要スルト雖モ通譯人ヲ命シ宣誓セシメ並
 ニ其立會タルヲ以テ概テ被告人ノ補翼タルヲ推測スルナリ其無効
 トスル場合ハ即チ左ノ如シ被告人佛語ヲ解セサル時ニ方リ其忌避ノ
 權ニ關シ告知スル爲メ並ニ當籤シタル陪審ノ姓名ヲ通報スル爲メ陪
 審抽籤中通譯人ノ是カ補翼セラサル時千八百二十七年八月三十日、
 千八百四十四年六月三日、千八百五十六年一月一日、但、辯護人ノ是ニ立會並ニ
 干渉シタル時ハ無効トスルヲ無シ月十日大審院判決十通譯人ニ於テ證

ヲ行ヒタル旨ヲ記載スルハ全ク法規ニ適スル者トス
千八百七十二年七月二十五日
千八百七十三年八月六日
大審院判決

○第六節 證憑物件ノ呈示、場所ノ臨檢、鑒定、書證

第七百八十五號 法律ハ證人ヲシテ證明セシムルノ外尙ホ法官ニ於テ事實發見ノ用ニ供ス可キ一切ノ證據ヲ認可シ殊ニ證憑物件ノ査覈、場所ノ臨檢、鑒定人ノ證明並ニ文書、證券其他書類ノ審査ヲ行フヲ聽許セリ

第七百八十六號 證憑物件ノ査覈○物件ノ査覈ハ法律ニ定メタル證據ノ一ナリ乃チ裁判長ハ其物件ヲ被告人並ニ證人ニ示ス可シ
第三百九條 夫レ證憑物件トハ心證ニ供ス可キ者ニシテ被告事件ヲ檢證スル時ニ方リ押收スル所ノ物件ヲ謂フ即チ第三百三號ニ既ニ其詳細ヲ説ケリ蓋シ證憑物件ハ一件書類タル訴訟書類ト混同スルヲ無カル可シ若シ夫レ此等ノ物件ヲ押收シ及ヒ關係スルニ際シ法規ニ適セサルノ處置ヲレハ敢テ豫審ヲ無効ナラシムルヲ無キモ亦其物件ノ舊物ニ異ナルトノ紛議ヲ生シ隨テ其信力如何ニ附キ爭論ヲ起スコアラシ
千八百三十八年二月八日、千八百四十年九月十七日
大審院判決 若シ其物件ヲ公判廳ニ送致セサル時ハ重罪審院ハ檢察官又ハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ其職權ヲ以テ送致ヲ命シ而シテ之ヲ領收スルニ至ル迄審判ヲ中止スルヲ得
千八百三十七年十月十日、千八百三十九年十一月十七日
大審院判決 公判調書ニハ物件ヲ示シタル旨ヲ記載檢證スルヲ要ス
千八百三十八年三月十六日、千八百三十九年三月二日、千八百三十九年七月二日、千八百三十九年九月九日、千八百三十九年十一月二十日、千八百四十年一月二日
大審院判決 然レモ第三百二十九條ニ無効ノ制定ナキヲ以テ其檢證ヲ缺クモ爲メニ紛議ヲ生スルノ原由ト爲ス
千八百三十八年一月二十日、千八百三十九年七月二日、同一年九月九日、千八百三十九年十一月二十日、千八百四十年一月二日
大審院判決

第七百八十九號 場所ノ臨檢○重罪審院ハ他ノ刑事法廳ノ如ク重罪犯所ノ檢審及ヒ證據ト成ル可キ物件ニシテ運搬シ難キ者ノ査覈ヲ行

證憑物件ノ呈示、場所ノ臨檢、鑒定、書證

フ等都テ其心證ヲ作為スルノ用ニ供ス可キ審査ヲ行ハシカ爲メ其裁判官ヲシテ訟庭外ノ場所ニ臨マシムルヲ得可シ蓋シ斯ノ處分タルヤ特リ裁判長其職制上ノ權ヲ以テ命スルヲ得ル所ニシテ第二百六十八條及ヒ第二百六十九條ニ定ムル豫審處分ノ一ナリトス

第七百八十八號 臨檢ノ命ヲ下シタル時ハ審院ノ裁判官ハ檢察官及ヒ書記ヲ立會ハシメ且ツ陪審被告人其辯護人並ニ民事原告人ヲ誘引ス可キナリ故ニ事實並ニ法律ヨリ見ルニ審院ハ臨檢ノ地ニ於テ之ヲ繼續スル者ニシテ其檢審中ハ亦衆庶ノ公聽ヲ許サ、ル可カラズ
三十四年五月二十二日、千八百四十四年三月二十三日、大審院判決
又都テ訴訟ノ手續ヲ履行セサル可カラズ若シ偏ヘニ陪審全員又ハ其幾員ヲシテ臨檢セシムル時ハ其効無シ
千八百三十八年二月判決例ニ據ルニ此處分ヲ命シタルハ即チ金銀

ノ質ヲ定ムル鑿記ノ贖造ノ事件ニ附キ貨幣鑄造所ノ試驗場並ニ鑿記場ニ於テ檢審ヲ行フ爲メニシテ千八百四十五年九月故殺事件ニ附キ裁判所ノ庭園ニ於テ被告人嘗テ乘用シタル所ノ馬ヲ證人ニ示ス爲メニシテ千八百三十四年五月謀殺事件ニ附キ犯罪アリタル旅宿ノ房室ヲ檢査スル爲メニシテ千八百四十三年三月盜罪事件ニ附キ嘗テ押收シタル物件重大ニシテ訟庭内ニ入ルヲ得サルヲ以テ裁判所ノ庭園ニ於テ之ヲ査覈スル爲メニセシ
千八百四十七年七月ヲ示セリ
第七百八十九號 證明及ヒ鑿定○夫レ事實ヲ探究シ明白ナラシムルニ附キ鑿定ノ有用ナルヤ言ヲ俟タスシテ明瞭ナリ抑鑿定人ノ職タル特リ常ニ生シ常ニ困難ナル裁判醫學上ノ問題ヲ決スルノミナラス又法官ノ與リ知ラサル學術ノ練磨、實際ノ經驗アルニ非サレハ明晰スルヲ得サル千緒萬端ノ事實ヲ證明スル爲メ必要缺ク可カラサル所ナリ

證憑物件ノ呈示、場所ノ臨檢、鑿定、書證

毒殺、毆傷、殺人、詐偽、竊盜等ノ事件ニ附キ毒物ノ性質、効驗、傷痕ノ原由、暴行ノ種類、文書ノ偽造、門戸破壊、偽鑰使用ノ模様等、苟モ鑒定人ノ證明ニ非サレハ法廳ニ於テ安ソ能ク之ヲ知ルヲ得ンヤ重罪事件ノ訴訟ハ概テ此類ニシテ又鑒定ヲ以テ唯一ノ證據トス可キヲ有リ其鑒定ノ處分ハ訴訟關係人之ヲ請求シ又ハ裁判長若クハ重罪審院其請求ニ應シ或ハ職權ヲ以テ之ヲ命ス故ニ鑒定ヲ命スルハ裁判長ノ職權内ニ在ルノミナラス又假令ヒ紛議ノ生スルヲ無キモ重罪審院其法廳タルノ權ヲ以テ之ヲ命スルヲ得是レ蓋シ通常審問ノ處分タルニ過キサレハナリ千八百三十九年一月十七日、同年九月十九日、千八百四十年五月二十九日、千八百四十六年七月二日、千八百五十九年三月十二日大審院判決 裁判長又ハ重罪審院ノ特リ此處分ヲ行フノ權ヲ有スルハ辯ヲ須フルニ及ハス千八百四十年九月二日大審院判決 第七百九十號 裁判官及ヒ陪審ヲ除キ第三百九並ニ法廳ニ於テ鑒定

人タルノ權ヲ剝奪セラレタル者ヲ除キ其他何人タリモ鑒定ノ職ヲ行フヲ得ス故ニ外國人ニ關シ月十六日大審院判決 證人其他訴訟ニ關係スル者ニ關シ月三日大審院判決 同事件ニ附キ既ニ鑒定ヲ行ヒタル者ニ關シ千八百三十五年九月八日大審院判決 又婦女及ヒ幼者ニ關シ例外アルヲ無シ然リ而シテ撰擇ス可キ所ノ者ハ最モ學藝ニ長シ鑒定ノ職ニ堪フルヲ要ス蓋シ其撰擇ニ關シ訴訟關係人異議ヲ陳フルヲ得可ク又通譯人ニ於ケルト同シシ鑒定人ヲ忌避スルヲ得可キナリ千八百三十二年四月二十七日大審院判決

第七百九十一號 鑒定人ハ言渡書又ハ委任狀若クハ口述ニ因リ之ヲ命ス若シ其命ノ訟庭辯論中ニ在ル時ハ調書ニ其旨ヲ記載ス可シ千八百四十八年一月二十日鑒定人其職ヲ行フノ前必ス宣誓スルヲ要ス千八百三十四年六月十三日大審院判決 但裁判長ノ職權ヲ以テ參考ノ爲メ鑒定セシムル時ハ此限

罪憑物件ノ呈示、場所ノ臨檢、鑒定、取證

ニ在ラス千八百四十五年三月十八日大審院判決五月此場合ニ於ケルモ宣誓セシムルヲ得可キナリ千八百三十六年十一月四日千八百三十八年一月二十五日大審院判決千八百九十二年五月三十一日大審院判決千八百九十二年五月三十一日大審院判決千八百九十二年五月三十一日大審院判決

四十四條ニ定メタル所ナリ然レモ其既ニ鑑定シタル所ヲ供述セシメ

ソカ爲メ訟庭ニ呼出シタル時ハ證人ト看做シ第三百十七條ニ循ヒ宣誓セシム

千八百三十五年六月十二日千八百三十六年三月二十日千八百三十七年五月二日若シ訟庭ニ於テ委任シタル職務ニ關セスシテ千八百四十七年五月二日大審院判決千八百四十八年四月八日千八百四十八年四月八日大審院判決千八百四十八年四月八日大審院判決

又ハ技術者學藝上ノ意見ヲ陳述スルニ附テハ此最終ノ宣誓ヲ以テ足レリトス

千八百四十一年十月十日大審院判決抑特ニ宣誓シタル鑑定人其誓言ニ因リ訟庭ニ於テ其事業ノ如何ヲ申報シ其申報前ニ於テ證人ノ誓言ヲ宣述シタル時ハ毫モ是カ爲メ損害ヲ生ス可キヲ無キヲ以テ訴訟

關係人異議ヲ陳フルノ由無シトス

千八百三十五年四月七日千八百三十八年二月一日大審院判決

第七百九十二號 鑑定ハ一名又ハ數名ニ委任スルヲ得而シテ其事業ハ性質ニ循ヒ或ハ訟庭ニ於テシ或ハ訟庭外ニ於テ之ヲ行ハシムルヲ得可シ但訟庭外ニ於テスル時ハ公然被告人ノ面前ニ於テ其結果ヲ告知セシム

千八百三十八年四月假令ヒ鑑定人タル者證人訴訟關係人其他ノ者ト相交通スルモ破毀ノ原由ト爲サス

千八百四十三年二月加旃民事ノ鑑定ニ適施スル訴訟手續ノ規則ハ刑事ノ鑑定ニ適施ス可カラサルヲ以テ原則トスルナリ

千八百三十一年三月十一日千八百三十三年四月二十日大審院判決

第七百九十三號 證書類ノ呈示及ヒ朗讀○我法制ニ據ルニ文書ハ裁判官ノ之ニ拘泥スルヲ無ク其料度裁定ス可キ證據ノ一ナルヲハ既ニ

證據物件ノ呈示場所ノ廢除、鑑定、書證

之ヲ論セリ而シテ文書類ハ訟庭辯論中ニ呈示スルヲ得可ク訴訟關係
 人互ニ之ヲ審査シ相論辯ス然レモ法律上威力ヲ有セス又裁判ヲ
 羈束スルヲ無シ夫レ公判ニ附テハ必ス口述ヲ以テ審問スルヲ本則ト
 爲スモ證據書類ヲ朗讀シ又查覈スルヲ妨ケス是レ第三百五條第三百
 四十一條並ニ第三百四十二條ニ定メタル規則ニシテ一ハ調書及ヒ訴
 訟書類ヲ被告人並ニ陪審ニ交付ス可キヲ命シ一ハ此等ノ者ニ於テ書
 類ヲ證據ト看做サス且ツ偏ヘニ其心證ニノミ依ル可キヲ示ス者ナ
 リ

第七百九十四號 訟庭辯論中朗讀スルヲ得可キ證據書類ハ如何ナル者
 乎蓋シ朗讀スルヲ得可キ者ハ犯罪ヲ檢證スル調書千八百二十二年九月
 二年二月六日、千八百三十
 六月二十二日、大審院判決既ニ死没シ又ハ訴訟ヲ免カレタル被告
 人ノ訊問書千八百八十七年十一月十一日、千八百八十八年四月
 六月二十二日、千八百三十
 二年二月六日、大審院判決第六百四十四號

コ示シタル場合ニ於テ證人ノ供述書並ニ豫審中押收シ集拾シタル書
 類ニシテ被告人又ハ證人ノ品行如何ヲ知ルニ附キ參考トナル可キ所
 ノ書類等ナリ千八百三十一年九月二十二日、千八百
 三十三年三月二十八日、大審院判決其禁止ニ係ル證人
 ノ申述書又ハ訴訟書類ノ一部ヲラサル書類ニ附テハ裁判長其職制上
 ノ權ヲ以テスルニ非サレハ是カ朗讀ヲ命スルヲ得ス千八百二十四日、千八
 百三十七年四月二十七日、千八百四十四年七月十二日、千八百
 三十七年四月二十七日、千八百四十四年七月十二日、大審院判決是ヲ
 以テ被告人ヨリ其朗讀ヲ求ムルモ之ヲ肯セサルヲ得可シ然レモ被告
 人ハ其辯護ノ爲メ訴訟中此等ノ書類ヲ引用シ及ヒ使用スルノ權アリ
 千八百四十年七月九日、千八百四十二年十二月
 二日、千八百四十七年七月三日、大審院判決 渾テ訟庭辯論中呈示シ
 タル文書類ハ裁判所ニ差出シ訴訟書類ニ添ヘ置クヲ要ス千八百三十
 二年一月二十
 日、大審
 院判決

○第七節 訴答辯論ノ終結、裁判長ノ約縮

訴答、辯論ノ終結、裁判長ノ約縮

第三百三十五
 條第三百三十
 六條及自第三

百五十三條至
三百五十六條

第七百九十五號 爭論ノ順序○都テ證據ヲ舉示シ悉ク原被兩造ノ證人ヲ訊問シ一切參考トナル可キ事物ヲ通報シタル時ハ此等證據ノ爭議ニ着手ス第三百三十五條ハ其爭議ノ順序ヲ定メリ即チ民事原告人先ツ請求スル所ヲ陳シ次ニ檢察官其意見ヲ述ヘ而シテ後チ被告人其答辯ヲ盡スナリ

第七百九十六號 民事原告人ノ請求○民事原告人ハ實ニ附加ノ原告タルニ過キスト雖モ其權ヲ有スルヤ甚ク廣シ而シテ一旦訴訟ニ關係スルヨリハ重罪密院ニ證人ヲ呼出シ又訟庭辯論中證人或ハ被告人ニ疑問ヲ附シ及ヒ自家ノ利益ヲ保障スルニ有用ナル請求ヲ爲スノ權アリ是レ前既ニ説キタル所ナリ第三百三十五條ノ意ヲ推スニ訟庭ノ辯論ヲ終リタル時ハ檢察官ニ先ク第一ニ民事原告人ヲ訊問シ其告訴ノ趣旨ヲ詳述セシムルヲ欲セリ故ニ民事原告人ハ事實ノ有無ヲ辯

論ノ間接ニ公訴ノ趣旨ヲ固守スルヲ得然レハ檢察官ハ其ソチシテ專横ニ流レシム可カラス必ス其私益ノ範圍内ニ留マラシム可シ蓋シ民事原告人ハ私訴ノ外詞訟ヲ行フヲ得サルナリ但其私益ノ範圍内ニ於ケルモ私訴ノ理由ヲ確實ナラシム可キ證據方便ヲ敷衍シ千八百四十七年二月十日大審院判決並ニ更ニ答辯スルニ附テハ檢察官被告人ト同一ノ權ヲ有ス第七百九十七號 檢察官ノ意見○檢察官其公訴ノ趣旨ヲ固執スル爲メ訟庭辯論中行フヲ得可キノ權ハ前既ニ之ヲ説ケリ第六百五十八號參看蓋シ其職務ノ最モ至難ナル所ハ訟庭ノ辯論ニ由リ發見シタル證據方便ヲ敷衍スルニ在リ然レハ我輩嘗テ他ノ書中ニ於テ論シタルカ如ク「檢察官タル者ハ其固執スル所ノ訴訟素ト社會ニ屬シ而シテ其唯一ノ主旨ハ社會命運ノ基礎タル法律ヲシテ能ク威力ヲ發セシムルニ在ルヲ服膺シ須臾モ着目ヲ怠タル可カラス故ニ其職務ニ從事スルニ方

証答、辯論ノ終結、裁判長ノ約縮

リ目的トス可キ所ハ公訴ノ成果ニ非スシテ真理ノ勝利ヲ博フセリナ
 期ス可シ何トナレハ社會ニ必要ナル者ハ公訴ノ成果ニ非スシテ公義、正
 理ヲ枉ケス裁判ヲ以テ法律ノ制裁ト爲サシムルニ在レハナリ是ヲ以テ
 事件ノ狀況ヲ舉ケ證據ヲ示スニ必ス誠實ナルヲ要ス其訟庭ニ在テ辯論ス
 ルハ公訴ノ爲ニ非ス又夫ノ代言人ノ其詞訟本人ニ於ケルカ如ク公訴
 ニ附着セザルヲ以テ敢テ公訴ノ利タルト不利タルトヲ問ハサル可シ其
 職務實ニ至大至重ナリ共保守シ及ヒ固執ス可キ者ハ獨リ真理ノミトス
 第七百九十八號 檢察官其意見ヲ陳述スルニ方リ言論ノ自由ヲ有シ
 敢テ他ノ羈絆ヲ受クルコト無キハ爭フ可カラサルノ規則ナリトス故ニ
 公義、正理ノ爲メ至當トシ及ヒ必要トスル所ハ盡ク陳述スルノ權アリ
 テ裁判長毫モ之ヲ障礙スルヲ得ス千八百四十七年七月一日、千八百
 四十八年一月二十日大審院判決其
 訴訟ニ關係ナキ事件ニ附キ議得タル微意ト雖モ是ニ由テ陳述スルヲ

得可ク千八百五十一號一月陪審ニ告知スルニ其中告ヨリ生ス可キ法
 律上ノ結果ヲ以テスルヲ得可ク千八百四十年二月其公訴ニ有用ナル
 書類ハ都テ之ヲ呈示スルヲ得可シ又判決ニ據ルニ他ノ事件ニ關シ營
 テ受ケタル申述千八百三十三年二月被告入ニ通知セサル豫審補助中ニ
 於ケル申述書ト雖モ使用スルヲ得可シトセリ然レモ使用セントスル
 書類ハ訟庭辯論中呈示スルヲ可トス夫ノ審問中ノ事ヲ移シテ意見ニ
 加ヘ以テ齟齬ヲ防カントスルノ信憑ヲ滅却ス可カラサルナリ又檢察
 官ハ更ニ答辯スルノ權アリ蓋シ其目的ハ前ニ確言シタル所ノ當ラサ
 ル者ヲ改更シ真理ニ歸セシメントスルニ在リ而シテ更ニ答辯スルニ
 方リテハ新ナル證據等未ダ曾テ吐露セサリシ所ノ事ヲ舉示、論述ス可
 カラス唯、被告人ノ辯解スル所ニ答フルニ過キササルナリ
 第七百九十九號 被告入ノ答辯○被告入又ハ其辯護人ハ檢察官ノ意

原告、辯論ノ終結、裁判長ノ約稿

見テ陳述シタル後チ直ニ發言ス可シ若シ被告人數名アル時ハ裁判長其發言ノ順序ヲ定ム然レモ交互ノ利益相反セサルニ於テハ各自ノ辯護人ニ委シテ其發言ノ順序ヲ定メシムルヲ至當トス抑被告人自カラ辯護スルノ權ハ法律ノ定メタル特權ニ非ス又人情ニ基キ設ケタル者ニ非ス是レ天然固有ノ權ニシテ成法ノ之ヲ規定ス可シシテ敢テ滅却スルヲ得サル所ナリ然リ而シテ辯護ハ實ニ被告人利益ノ爲メノミナラス又裁判ノ公正ニ出ツル爲メニス若シ夫レ辯護充分ナラスシテ事實ノ明確ナラサルニ於テハ裁判アリト謂フヲ得サルナリ「被告人ハ其辯護人ヲ撰擇スルノ權ヲ有シ而シテ裁判長其職權ヲ以テ辯護人一名ヲ命スルハ被告人ノ撰擇セサル時ニ於テ是レ前既ニ説キタル所ナリ蓋シ裁判長ノ職權ヲ以テ命シタル代言人ハ正當ノ理由若クハ差支アル旨チ陳述シ重罪審院ノ可決ヲ經ルニ非サレハ其職ヲ辭スルヲ得

ス千八百二十二年三月二日其被告人ノ撰擇シタルト裁判長ノ命シタルトチ問ハス辯護人タル者訟庭辯論ヲ始ムル時ニ方リ不在ナル時ハ裁判長ハ被告人チシテ更ニ辯護人ヲ撰擇セシメ若クハ職權ヲ以テ之ヲ命ス可シ但被告人ハ延期ヲ請願スルノ權アリ若シ辯護人ノ不在唯辯論中ニ於テスル時ハ檢察官又ハ重罪審院實ニ其レチシテ不在タラシムルニ非サルヨリハ敢テ辯論ヲ無効トスルヲ無シ何トナレハ辯論ノ一部ニ附キ辯護人自カラ好ノテ不在スルハ訴訟手續ニ瑕疵アリトスルヲ得サレハナリ千八百三十年六月十八日、千八百四十四年三月二月十三日大審院判決 一若シ辯護人意外ノ原由アルニ因リ不在スル時ハ此限ニ在ラス千八百四十九年七月抑法律ノ定ムル所ハ辯護人チ立會ハシムルニ在リテ假令ヒ被告人自カラ辯護セント欲スルモ必ス裁判長ノ職權ヲ以テ一名チ命セサルヲ得サルニ至ル以テ其規則ノ嚴確

歐答、辯論ノ終結、裁判長ノ約辯

ナルヲ見ル可シ

第八百號 辯護ニ屬スル所ノ者ト屬セサル所ノ者ト其權利ノ及フ所ト放恣ニ流ルトキ明晰シ及ヒ區別スルハ容易ノ業ニ非ス抑辯護ノ目的タルヤ公訴ノ由テ起リタル所ノ事件並ニ其證憑ヲ爭議スルニ在リ故ニ被告人ニ不利ナル證據ヲ駁撃シ證人ノ供述眞ニ齟齬シ若クハ齟齬ニ類スル者ヲ舉示シ其他不實不明ノ件ヲ指斥シテ以テ被告人ノ利ニ歸ス可キ所ノ證憑ヲ表示シ苟クモ辯護ノ爲メ有用ナル者ハ自由ニ詳述スルノ權アリトス唯法律ハ二箇ノ制限ヲ設ケリ即チ○第一、第二、百七十條裁判長ニ聽スニ徒ラニ辯護ヲ遷延セシムル所ノ事ヲ制止スルノ權ヲ以テシ○第二、第三百十一條辯護人ニ負ハスルニ其本心ニ背キ國法ヲ侮慢シテ發言ス可カラス禮節、謙退ノ道ヲ守リ辯論ス可キノ義務ヲ以テセル是ナリ

第八百一號 辯護ノ權ニ關シ判決アリタル所ヲ見ルニ裁判長ハ辯護ノ時間ヲ定ムルヲ無ク唯辯護人ニ命ジテ其陳述ヲ簡單ナラシムルヲ得月千八百三十六年十二月三日大審院判決 又審判ノ法式鄭重、嚴肅ヲ要スルコト因リ被告人詩歌ヲ以テ辯護スルヲ禁スルヲ得千八百三十三年六月相類スル事件ニ附キ陪審ノ決定シタル所ヲ例證ト爲スヲ禁スルヲ得千八百二十八年八月大審院判決 又本案ノ辯論中刑ノ適用ニ關スル問題ヲ爭議スルヲ禁スルヲ得可シ千八百四十六年九月十日大審院判決トセリ然レモ辯護人ハ被告事件ノ公訟ニ係ル重罪ヲラサルコト例之ハ決闘人ヲ殺スルハ故殺ニ非ス、遺失物ヲ藏置スルハ盜罪ニ非サル旨ヲ固執スルヲ得可ク千八百三十一年五月又異說アリト雖モ千八百二十五年三月三十一日千八百二十六年三月二十五日大審院判決 陪審ニ告知スルニ其中告ヨリ生ス可キ法律上ノ結果ヲ以テスルヲ得可シ其他宥恕ノ原由ノミナラス辯論ニ因リ發見シ而シテ酌量減輕法ヲ適施スルノ

解答、辯論ノ終結、裁判長ノ約縮

原由トナル可キ事項ヲ主張シ及ヒ詳述スルヲ得可キナリ
一千八百九十三年五月三十日、
六月一日大審院判決

第八百二號 辯護ノ放恣ニ涉ルニ附テハ其放縱ニ止マル歟
紀律ニ反スル歟將テ犯罪タル可キ歟ヲ區別セサル可カラズ其放縱ニ止マル時
ハ裁判長之ヲ制止スル爲メ充分ナル權アリ然レテ第二百六十七條、第
二百七十條及ヒ第三百十一條ニ在リ即チ辯護ノ妨碍ヲ爲スヲ無クシ
テ辯護人ノ陳述ヲ遮斷シ禮節謙退ヲ守ラシムルヲ得ルト謂フ者是ナ
リ其紀律ニ反スル時ハ事情ニ因リ重罪審院紀律ノ刑ヲ宣告スルノ權
アリ千八百八十八年三月三十日ノ布告第三百三條、千八百九十二年十一月二
日ノ布告第四百三條及ヒ第四百三條、千八百九十九年五月十七日ノ
法律第二十條 其辯護ノ放縱ニ涉リ卒ニ刑典ニ觸ル、ハ罕ニ見ル所ナリト
雖モ若シ之レ有ル時ハ重罪審院ハ亦治罪法第八十一條及ヒ第五百
五條ノ規則ヲ適施スルヲ得可シ千八百九十二年四月十七日、千八百九十二年
五月十八日

大審院判決

第八百三號 第三百三十五條ノ第二項ニ曰ク「被告人又ハ其辯護人ハ
常ニ最終ニ發言スヘシ」ト是レ辯護權ノ精神ニシテ缺ク可カラサル所
ナリ若シ檢察官又ハ民事原告人ノ陳述ニ附テ更ニ答辯スルヲ許サ
サレハ遂ニ裁判ヲ無効トスルニ至ル可シ千八百九十六年五月廿一日、
辯論中偶然生シタル事件ヲ爭議スル時ニ於テモ亦此規則ヲ適施ス可
キナリ然リ而シテ調書ニハ必ス此規則ヲ履踐シタル旨ヲ記載、檢證ス
ルヲ要ス但被告人又ハ其辯護人ニ對シ更ニ答辯センコトヲ督促シタル
旨ヲ記載スルヲ以テ足レリトス千八百九十三年四月八日、千八百九十三年
三月十三日大審院判決 其辯護ノ充分ナルコトヲ檢證スル爲メニハ裁判長
ヨリ被告人其辯護ノ爲メ復テ陳述ス可キコトアル歟否ヤテ直ニ問フヲ
以テ慣行トス

原告、辯論ノ終結、裁判長ノ約略

第八百四號 辯論ノ遮斷停止及ヒ終結○辯論ノ遮斷停止及ヒ終結ニ
 關スル規則ハ其之ヲ適用スルノ目的同一ナルヲ以テ今茲ニ之ヲ合説
 ス抑此等ノ處分ハ皆テ裁判長ノ權内ニ屬スル所ニシテ如何ナル場合
 ニ於テ之ヲ命ス可キ歟ヲ定ムルヲ要ス然リ而シテ遮斷ナル者ハ停止
 ト同シカラサルヲ以テ先ツ其區別ヲ明カニセサル可カラス第三百五
 十三條ニ據ルニ訟庭辯論ハ遮斷スルヲ得スシテ裁判ヲ以テ訴訟ヲ終
 結スルニ至ル迄必ス繼續スルヲ要ス然レモ同條第二項ニ據ルニ裁判
 官陪審證人被告人休憩ノ爲メ必要ナル時間ハ辯論ヲ停止スルヲ得可
 シトセリ是ニ由テ之ヲ觀ルニ遮斷トハ他ノ處分他ノ事件ニ着手シ而
 シテ前ニ着手シタル事件ヲ一時差置クノ謂ヒニシテ停止ナル者ハ辯
 論ヲ遮斷セス唯之ヲ他ノ時日ニ譲リ而シテ其停止中ノ時間ハ他ノ處
 分他ノ事件ニ用フルヲ無ク偏ヘニ休憩ノ爲メニスル者ヲ謂フナリ

第八百五號 第三百五十三條ノ禁シタル辯論ノ處斷ハ判決例ヲ以テ
 其解釋ヲ下シ並ニ其限界ヲ定メリ蓋シ判決アリタル所ニ據ルニ本條
 ハ無効ノ制裁アル者ニ非ストシ千八百二十年三月二日大審院判決
 ル事件ヲ差置キ其事件ニ關係ナキ處分ニ着手スル時ニ非サレハ眞ノ
 遮斷ナル者無シトセリ千八百四十三年一月故ニ休憩ノ爲メナラサル
 モ唯論辯ヲ停止スルニ過キサル者ハ決シテ遮斷ニ非サルナリ千八百
 四年五月二十六日大審院判決是ヲ以テ辯護人急病ヲ發スルニ因リ千八百三十二年四月
 日大審院判決或ハ未ク訟庭ニ差出サ、ル證憑物件ヲ搜索スル爲メ千
 八百三十八年五月或ハ證人出庭ノ猶豫ヲ與フル爲メ千八百
 四年八月三十一日大審院判決或ハ未ク訟庭ニ差出サ、ル證憑物件ヲ搜索スル爲メ千
 八百五十年十月十日或ハ數名ノ證人ヲ呼出ス可キ裁判長ノ命令ヲ執行セ
 ノカ爲メ千八百三十八年六月辯論ヲ翌日ニ讓ルヲ得可シトノ判決ア
 証答、辯論ノ終結、裁判長ノ約縮

リテリ故ニ重罪審院ハ荷クモ他ノ事件ニ着手スルニ非サルヨリハ共
豫知セサリシ所ノ事情ノ生スルニ從ヒ之ヲ度量シテ辯論ヲ停止スル
ヲ得可シ是レ蓋シ一般ノ規則ナリ千八百二十一年三月

第八百六號 辯論ノ停止ハ其時日ノ如何ナルト並ニ其原由ノ如何ナ

ルトヲ問ハス破毀ノ原由トナルヲ無シ千八百三十一年一月十八日、千
十八年七月七日、大審院判決而シテ必要ナル休憩ノ時間ヲ量定スルハ
實ニ裁判長ノ權内ニ屬ス然レモ陪審ノ欲スル所ヲ問ヒ並ニ其利害得

失ヲ咨詢スルヲ禁セス但、法律ノ定メタル唯一ノ目的即チ辯論ニ關ス
ル一切ノ者ニ必要ナル休憩ノ爲メナルヲテ該ル可カラサルナリ判決

例ニ據ルニ數時間ノ停止ニシテ正午ヨリ午後三時ニ至リ午後四時ヨ
リ同七時ニ至ル者ハ適正ナリトシ千八百十九年九月九日、千八百二
日ニ至ル迄停止スルヲ得可シトシ、千八百四十五年八月又土曜日は辯論

ヲ始メタル時ハ日曜日ニ繼續スルモ取テ不適正ナラズト雖モ翌日ノ
祭日ニ當ルニ於テハ翌々日ニ至ル迄停止スルヲ得可シトセリ千八百
四月十四日、千八百三十一年六月二十三日、抑、停止ハ其是ヲ必要ナリトス
日、千八百三十二年四月五日、大審院判決ル時ハ何時ニテモ之ヲ聽許スルヲ得可シ例之ハ辯論終結ト陪審申告
トノ間千八百十七年四月並ニ陪審申告ト刑ノ言渡トノ間千八百五十六
日、大審院判決類ナリ

第八百七號 辯論ノ終結ハ原被告相辯論シ更ニ答辯シタル後チ第三百
三十五條ニ循ヒ裁判長之ヲ言渡スヲ例トス其終結ノ言渡アル後ハ渾
チ論争スルヲ禁シ而シテ裁判長ハ何レノ關係人ニモ發言ノ權ヲ與フ
ルヲ得ス又裁判長ハ審問ノ處分ヲ行フヲ得ルナリ千八百三十二年四
月二十七日、大審院
判決是レ蓋シ裁判ノ原質既ニ充分ナリト看做スニ由ルト雖モ其終結ハ
確定シタル者ニ非ストス

証答、辯論ノ終結、裁判長ノ約稿

○第一項 送付ノ言渡ヨリ生スル問題ノ交付

第八百十一號 裁判長ハ事件ヲ約縮シタル後ヲ陪審ニ問題ヲ付ス可
 シ第三百三 而シテ其問題ニハ都テ論告ニ係ル所ノ事件ヲ記載セサル
 可カラズ蓋シ陪審ハ論告事件並ニ被告人ノ有罪ヲ證ス可キ情狀ノ裁
 判官ニシテ重罪審院ハ其事件情狀ニ就キ法律上ノ性質ヲ評量シ刑ヲ
 適用スルノ權ヲ有ス是レ實ニ一箇ノ原則ナリ 千八百二十五年十月七
 二十日、同年六月十五日、千八百
 三十六年十月六日大審院判決
 共事實ト法律トノ別ハ陪審並ニ審院ノ構由テ分歧スル所ニシテ之ヲ
 明晰スルニ苦ムコト無キニ非ス乃チ其詳カナルハ後ニ辯論セン抑陪審
 ノ問題ニ答ヲルヤ必ス然リ又ハ否ヤノ語ヲ用ユ是ヲ以テ問題ヲ記載
 スルニ方テハ深ク意ヲ用ヒ決シテ忽諸ニ付ス可カラス
 第八百十二號 問題ハ事實ニ送付言渡書ノ本文ヲ摘載スル者ナルヲ

要ス是レ第一則ナリ蓋シ第三百三十七條重罪公訴狀ノ要略ニ就キ問
 題ヲ作ラントチ欲スルハ即チ第二百七十一條ニ定ムルカ如ク其要略
 ハ送付言渡書ノ摘載ニ過キサルヲ思料スルナリ故ニ送付言渡書ハ獨
 リ論告ノ關係ヲ定メ而シテ問題ヲ付スルニ附キ唯一ノ基礎ト成ル可
 シ 千八百二十五年十二月二日、千八百
 五十八年十二月十六日大審院判決 是ヲ以テ假令ヒ重罪公訴狀ノ要
 略中錄スル所ニ係ルモ送付言渡書ニ記スル所ニ異ナル事件ヲ問題ニ
 登載スル時ハ其効無カル可キナリ 千八百二十年二月十七日、千八百三
 千八百三十三年四月十二日、千八百三
 十四年十一月二十九日大審院判決

第八百十三號 問題ハ送付言渡書ニ記スル一切ノ模様ニ附キ之ヲ爲

スチ要ス是レ第二則ナリ抑論告ハ之カ基礎トナリ之カ性質ヲ定ムル
 一切ノ證據一切ノ模様ヲ評量スルニ非ハレハ敢テ之ヲ免カレシムル
 可無シ 千八百三十八年三月十五日、千八百
 四十九年四月十二日大審院判決 假令ヒ重罪公訴狀ノ要略中

送付ノ言渡ヨリ生スル問題ノ交付

總テ此等ノ場合ニ於テハ問題中各輕罪構造ノ性質ヲ明記スルヲ必要トス

第八百十五號 訟庭辯論中公正ノ文書ヲ呈示シ以テ事件ヲ證明シタル時ト雖モ必ス其事件ヲ陪審ニ問ハサル可カラズ是レ第四則ナリ蓋シ陪審ハ依法證據ノ牽掣ヲ受ケス唯其心證ニ依ルノミ故ニ諸證書類ニ出產證書ヲ添置シ時ト雖モ強姦又ハ猥褻事件ニ附キ被害人ノ年齡ヲ申告シ百三十四年四月一日大審院判決千八百九十八年十一月二十九日大審院判決又書籍ヲ印刷シテ既ニ刑ノ言渡ヲ受ケタルニ再ヒ之ヲ印刷シタル事件ニ附テハ裁判言渡書ノ拔書ヲ證書類ニ添置シ時ト雖モ其刑ノ言渡アリタルヲ申告ス可キナリ千八百九十三年五月然レ此規則タルヤ再犯事件ニ附テハ其例外アリ即チ再犯ハ公正ノ文

書ヲ以テ之ヲ證シ而シテ陪審ニ下問スルヲ無シ千八百九十二年六月三日千八百二十九年六月十八日大審院判決共レ然リ而シテ此例外アル所以ノ者ハ殊ニ再犯ハ論告事件ニ相關係セス且ツ一箇ノ罪科ト爲フサルニ由ルナリ第八百十六號 裁判長問題ヲ付スルニ方リ過テ論告ニ係ル事件若クハ情狀ノ幾分ヲ問ハサル時ハ須カラク其事件ハ論告一般ノ事件ニ關スル歟又唯論告中ノ一事件ニ關スル歟及ヒ罪科ヲ構造スル者ナル歟將タ之ヲ加重スル者ナル歟ヲ審査セヨル可カラス若シ論告中ノ一事件ニ關スル時ハ過テ之ヲ問ハサルモ敢テ影響ヲ他ノ論告事件ニ關スル問題ニ及ホサス千八百六十七年七月五日大審院判決若シ重罪構造ノ性質タル時ハ之ヲ問ハサルノ瑕瑾必ス隨テ論告事件ニ及ハン若シ又加重ノ模様タルニ過キサル時ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告スルモ敢テ影響ヲ生スルヲ無シ然レハ檢察官ノ上告ニ係ル時ハ未タ論告事件ヲ盡サ、ルヲ以

添付ノ言渡ヨリ生スル問題ノ交付

テ訴訟手續ヲ無効トスルニ至ル可シ
同年四月二十八日大審院判決、重罪
審院ニ於テ陪審中告狀朗讀ノ前問題ノ缺ヲ檢證スル時ハ更ニ新タナ
ル問題ヲ付シ以テ之ヲ填補スルヲ得可シ
月千八百五十年十一月十七日大審院判決

○第二項 訟庭辯論ヨリ生スル問題ノ交付

第八百十七號 陪審ニ付ス可キ問題ニハ審ニ送付ノ言渡書中ニ記載
シタル事件ノミナラス又訟庭辯論ニ因リ發覺シタル事件ニシテ論告
事件ニ關係シ且ツ事件ノ模様トナリ若クハ之ヲ變更ス可キ者ナルニ
於テハ必ス登載セサル可カラス其訟庭辯論ヨリ發覺セル者トシテ下
問ス可キ事件ハ或ハ加重ノ模様或ハ宥恕或ハ減輕ノ模様或ハ罪名ヲ
變更ス可キノ事件ナリトス

第八百十八號 加重ノ模様○云々ノ加重ノ模様ハ果シテ辯論ヨリ發
覺シ而シテ之ヲ陪審ニ問フ可キ歟否ヤテ論定スルノ權ハ實ニ裁判長

ニ屬シ異議アル時ハ重罪審院之ヲ判決ス蓋シ裁判長此模様ヲ發覺ス
ル時ニ方テハ被告人ヲシテ辯護ノ用意ヲ爲サシメンカ爲メ告知スル
ニ此模様ニ附キ問題ヲ陪審ニ附スル旨ヲ以テスルヲ慣行トス
千八百五十六年九月十一日抑犯罪ノ模様ハ送付ノ言渡書ニ記載セサル時ノミナラ
大審院判決
ス又其言渡書ニ於テ暗ニ其有ラサルヲ示シ又明カニ之レ無シトス
ル時ト雖モ之ヲ問フヲ得可シ故ニ裁判長ハ送付ノ言渡書ニ於テ之
レ有ラサルヲ揚言シ
千八百三十一年十月十四日大審院判決
又ハ充分ナル證憑ナキヲ
以テ明カニ棄却シタル
千八百三十年八月十九日、千八百六
加重大審院判決
ニ附キ陪審ニ問フヲ得實ニ裁判長ハ毆打創傷事件ニ附テハ送付ノ
言渡書ニ記載セサル心意ノ如何ヲ問ヒ
千八百二十七年十二月
猥褻事
件ニ附テハ工丁ノ身分ニ代フルニ雇人ノ身分ヲ以テスルヲ得
千八百
年十二月十日
大審院判決
又此等ノ模様自カテ重罪又ハ輕罪ト爲ル時ト雖モ之ヲ

訟庭辯論ヨリ生スル問題ノ交付

問フコチ得可キナリ故ニ裁判長ハ訟庭辯論ヨリ發覺セル者トシテ故
 殺ノ前後ニ行ヒタル竊盜又ハ猥褻ノ重罪ヲ問ヒ千八百四十五年四月
六月二十日又盜罪ヲ行フニ際シ犯シタル創傷ノ輕罪ヲ問フコチ得
大審院判決可キ千八百四十二年四月十八日判決アリタリ
第八百十九號宥恕○都テ辯護ノ爲メ申述シタル宥恕ノ事件ハ必ス
 陪審ニ問ハサル可カラス此規則ニ背ク時ハ問題ノ効無シトス第三百九
條蓋シ宥恕ノ事件ニ關シ被告人ノ權利至大ニシテ其一旦之ヲ申述ス
 ル時ハ陪審ヲ令テ他ニ取捨ヲ裁斷スル者ナシ若シ重罪審院ニ於テ或
 ハ送付ノ言渡ニ記スルニ因リ千八百三十三年八月二十二日大審院判決千八百
 送付ノ言渡書及ヒ重罪公訴狀ニ宥恕ノ事件ヲ載セサルニ因リ千八百五
年十月一日或ハ被告人ノ申述スル所管テ宥恕トシテ申述シタル事件
大審院判決ニ因リ千八百四十二年三月或ハ訟庭ノ辯論ニ因リ其事件

チ發覺セサルニ因リ千八百三十五年三月十八日大審院判決
 問題ヲ付スルコチ肯セサル時ハ共問題ノ効アルコト無シ然レモ此權利
 ナ行フニ二箇ノ要件アリ○第一被告人若クハ其辯護人ヨリ申述スル
 ヲ要ス千八百五十五年三月倘シ檢察官ノ陳述ニ係ル時ハ裁判長及ヒ重
 罪審院之ヲ評量シテ裁斷ナス可シ千八百四十四年三月○第二宥恕
 トシテ申陳シタル事件法律ノ若カク定メタル所ナルヲ要ス蓋シ其事
 件タルヤ輕減ノ模様トシテ陪審ニ問フ可キ所ノ事件ニ非ス第三百四
法第四百六十三條又正當防禦、瘋癲、抑制ノ如キ罪責ヲ免除シ犯意ヲ消散セシム
 ル者ニシテ從テ有罪、無罪ノ問題中ニ含蓄スル所ノ辯解事件ニ非サル
 ナリ然レモ陪審タル者裁判官ト異ニシテ法律ノ學識ニ乏ク因テ有罪、
 無罪ノ問題中自カラ辯解事件ヲ含蓄スルコチ辯セサルコト無キニシモ
 非ス乃チ裁判長ニ於テ有用ナリトスル時ハ其權ヲ以テ辯解事件ニ附

トセサル時例之ハ、酌酹千八百四十五年四月十八日、千八百二被盜者ノ債
 主タル身分千八百五十二年十月眞贋ヲ檢セスシテ偽造ノ寶貨ヲ行使ス
 ルノ類千八百二十三年十二月○第三、宥恕ノ事件タル素ト論告ニ係ル
 事件ニ適施ス可カラサル時例之ハ、故殺ノ被告人其職務ヲ行フニ方リ
 作リタル公力證書ヲ引證シ以テ挑撥アリタルヲ中陳スルノ類千八
 七年三月十五日、千八百四十七年四月三十日、千八百五十五年
 一月三十日、千八百五十六年十二月十六日、大審院判決 ○第四、事件
 實ニ依法宥恕ノ名アルモ其宥恕トナル可キ性質ヲ具備セサル時例之
 ハ、被告人挑撥ヲ以テ宥恕ノ理由ト爲スモ其挑撥ノ言語、些少ナル暴行
 又ハ脅迫ニ因ルヲ陳シ千八百五十二年一月二十二日、千八百若クハ
 刑法第三百二十一條ニ定メタル重大ナル暴行トナラサル所爲ヲ陳ス
 ルノ類ナリ千八百五十五年八月三十日、千八百被告人宥恕ノ理由タ
 ル可キ事件ヲ指サスシテ唯、第三百二十一條ノ文辭ヲ用ヒ以テ宥恕ア

ルヲ中陳スル時ハ、必ス其問題ヲ陪審ニ付セサル可カラズ千八百五
 大審院判決 ○第五、主タル事件ヲ變更スルニ止マリ敢テ其刑ヲ輕減ス
 ルヲ無キ時千八百四十八年十一月又輕減スルト否トシ裁判官ノ所見ニ
 信委シタル時千八百五十二年二月是ナリ
 第八百二十二號 論告ヲ變更ス可キ事件 ○重罪密院ニ於テ受理シタ
 ル訴訟事件ハ其全面ニ就キ之ヲ檢審シ而シテ訟庭ノ辯論ニ因リ變更
 シタル所ヲ尋釋シ又加重輕減ノ摸樣ヲ密察スルヲ得可シ是レ蓋シ法
 律ニ於テ加重ノ摸樣及ヒ宥恕ニ關シ他ノ補助トナル可キ問題ヲ付ス
 ルヲ明許シ敢テ又此二箇ノ場合ノミニ限ルトセサル所以ニシテ其問
 題ノ目的實ニ此ニ在リ判決例ニ據ルニ陪審ノ論告事件ヲ判スルハ偏
 へニ訟庭ノ辯論ニ因ル可シ敢テ書審ノ定メタル所ニ據ル可カラス故
 ニ裁判長ハ訟庭ノ辯論ニ因リ發見シ而シテ論告事件ヲ變更ス可キ一
 訟庭辯論ヨリ生スル問題ノ交付

切ノ事項ニ附キ問題ヲ付セサル可カラストセリ千八百二十六年七月六日大審院判決但、其事項タル主タル事件ニ非サル所ノ者ニ關セス且ツ送付ノ言渡書ニ基因スル論告事件ヲ變更スルニ止マリ敢テ他ノ論告事件ヨリ發生シタル者ニ非サルヲ要ス千八百二十七年一月三日、千八百四十一年五月十六日大審院

決判

第八百二十三號 抑、論告事件ヲ變更スルノ事件ハ之ヲ新タナル事件ト混同ス可カラス蓋シ一ハ同一ノ論告事件ヲ變更スルニ過キサル者ニシテ敢テ其觀ヲ改ムルヲ無ク一ハ初度ノ論告事件ニ代フルニ新事件ヲ以テスル者ナリ今假リニ四箇ノ場合ヲ想像シ以テ此區別ヲ爲サノ其第一ノ場合ハ即チ訟庭ノ辯論ニ因リ發見シタル所ノ事件唯、送付ノ言渡書ニ定示シタル事件ノ不足ヲ補綴シ若クハ其誤謬ヲ改正スルニ止マル時はナリ此場合ニ於テハ被告事件、改正事件共ニ前事件ト異

ナル無キヲ以テ毫モ困難アルヲ無シ乃チ裁判長ハ訟庭ノ辯論ニ因リ覺知シタル所ニ從ヒ犯罪ノ月日ヲ改更シ千八百五十一年一月又、未タ三年若クハ十年ヲ經過セサル時日又ハ、殊ニ某ノ時日等ノ語ヲ主タル問題ニ増加シ千八百三十一年五月十九日、千八百四十九年一月又、送付ノ言渡書ノ本文過ツテ脱漏シタルモ其事件申明書ニ記載シ且ツ訟庭ノ辯論ニ因リ分明ナル所ノ重罪構造ノ性質ヲ問題ニ登載スルヲ得可シ千八百六十五年十二月是レ實ニ判決アリタル所ナリ

第八百二十四號 第二ノ場合ハ即チ事件常ニ同一ナルモ其名稱ヲ異ニスルノ時はナリ乃チ同一ノ事件ニシテ更ニ其原素ヲ新タニスルニ非サルモ唯、其性質ヲ變スル所ノ者ニ附キ裁判長問題ヲ附スルヲアル可シ例之ハ既遂犯罪ニ關スル論告事件ニ附キ未遂犯罪ノ問題千八百四年二月三日、千八百三十五年六月十日、千八百四十九年一月二十五日大審院判決 重罪ノ首犯ニ對スル事件ニ附

訟庭辯論ヨリ生スル問題ノ交付

キ附從ノ問題 千八百九十五年五月二十六日、千八百八十八年四月十六日、千八百
 大審院 弒尊屬親ノ事件ニ附キ謀殺ノ問題 千八百三十一一年十二月十二日 故殺事
 件ニ附キ人ヲ死ニ致スノ意無クシテ故意毆傷シタルノ問題 千八百四
 三月十一日、千八百四十四年 又ハ共事件ニ附キ營業スルコト能ハサルニ至ラ
 シメタル故意毆傷ノ問題 千八百十六年四月 強姦事件ニ附キ暴行ヲ以
 テ猥褻ノ罪ヲ犯シタル問題 千八百五十二年二月 暴行ヲ以テ猥褻ノ罪
 ナ犯シタル事件ニ附キ被害人十三年以下ナレハ暴行ナキ猥褻罪ノ問
 題 千八百五十二年十二月十八日、千八百一十一年十一月十八日、千八百
 十六年以下ナレハ略誘ノ問題 千八百四十九年十一月十一日、千八百
 播ス可キ放火罪 千八百四十七年十二月 又ハ自家放火罪ノ問題 千八百
 年八月七日、千八百四十四年 大審院判決 雇人盜罪ノ事件ニ附キ背信ノ問題 千八百四十三
 大審院判決 雇人盜罪ノ事件ニ附キ背信ノ問題 千八百四十三
 スルノ類是ナリ

第八百二十五號 第三ノ場合ハ認庭ノ辯論ニ因リ發見シタル事件素
 ト論告事件ニ附加スルモ全ク原事件ト異ナル時是ナリ其新クナル事
 件ハ論告事件ノ附加トナリ之ヲ變更シ若クハ詳細ナラシムルニ過キス
 而シテ更ニ證據ヲ舉ケ更ニ審査スルヲ要セサルヲ以テ他ノ補助タル
 可キ問題ト爲スヲ得可シ故ニ強盜ノ論告事件ニ附キ故意毆傷ノ問題
 千八百四十二年四月二十二日、千八百一十一年四月二十二日、千八百
 六千八百四十二年四月二十二日、千八百一十一年四月二十二日、千八百
 九千八百四十六年二月 強逼シテ姓名ヲ手署セシメタル事件ニ附キ謀リテ
 毆傷シ又ハ命令若クハ約束ヲ用ヒ脅迫シタルノ問題ヲ付スルヲ聽サ
 ス千八百四十五年六月 又原事件ヲ變更スルニ非ス微ク之ニ關係シ而
 シテ共事件ノ模様ノ一タル可キ新クナル事件ハ亦新クニ論告ス可キ
 コ非サルヲ以テ問題ト爲スヲ得可シ例之ハ陰謀ノ論告事件ニ附キ陰
 謀狀ヲ配付シタル事件 千八百一十七年一月三 暴行ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ
 認庭辯論ヨリ生スル問題ノ交付

帶スルト否トヲ定ムルヲ要セス何トナレハ附帶ノ効川ハ併ヒテ管轄
ヲ裁判官ニ歸スルニ止マリ而シテ共事件ノ相異ナルヲ妨クサレハナ
リ千八百二十二年十一月十四日大審院判決但、此例外トス可キハ附帶ノ事件素ト主タル事
件ノ加重ノ摸樣トナリ又ハ初ヨリ被告事件ノ中ニ算入シタル時ニ在
リトス千八百四十五年六月十九日大審院判決

○第三項 陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

第八百二十七號 裁判長ノ權○裁判長ハ第三百三十七條第三百三十
八條、第三百三十九條、第三百四十條及ヒ千八百三十六年五月十三日ノ
法令ニ定メタル法式ニ循ヒ問題ヲ付ス可シ然レモ其問題ヲ作ルヤ敢
テ法律上ノ定式及ヒ送付ノ言渡書ニ記載スル所ニ拘束セラル、ナ
シ何トナレハ其書式タル常ニ決シテ遵奉セサル可カラサル者ニ非ス
シテ各論告事件ノ如何ニ適應ス可ク且ツ送付ノ言渡書ニ記載スル所

ヲ詳述セソカ爲メ最モ明亮ニ最モ實確ナル文辭ヲ用フルヲ要スル
アレハナリ但、論告事件ニ觸ル、ナ無ク即チ其用フル所ノ文辭全ク法
律及ヒ送付ノ言渡書ニ用フル所ト價直チ同フシ意義ヲ等フシ毫モ廣
狹差異ヲ生セサルヲ以テ足レリトス千八百十八年七月三十一日、千八
百二十二年五月二十四日、千八百四十八年十二月二十二日、千八百
四十二年五月十三日、四月七日、同年九月一日大審院判決

第八百二十八號 是ヲ以テ裁判長ハ第三百三十七條、第三百三十八條、
第三百三十九條及ヒ第三百四十條ニ定メタル順序及ヒ書式ニ關シ敢
テ此等ノ條則ニ拘束セラル、ナ無シ抑、法律ノ定示シタル場合ニ於テ
問題ヲ付スルノ法式ト其之ヲ付スルニ方リ遵奉ス可キノ書式トハ明
カニ其區別ヲ爲サル可カラズ蓋シ法律ノ文辭ハ純ハラ表章明示ス
ルニ過キササルヲ以テ苟クモ論告事件ノ外ニ出テサルニ於テハ裁判長
其至當トスル所ノ次第ヲ定メ其順序ヲ退フ_ナヲ得可シ千八百十二年、

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

ヲ用ヒ月九日大審院判決一盜罪ノ事件ニ附キ竊盜ノ語ヲ以テ詐僞ヲ用
 ヒ他人ノ物品ヲ竊取スルノ語ニ代ヘ月三日大審院判決一毒殺事件ニ附
 キ人ヲ死ニ致ス可キ毒物ヲ以テ生命ヲ害スルノ語ヲ用ヒスシテ一般
 ナル文辭ヲ用フルヲ得可キナリ月十七日大審院判決然レモ故殺盜罪、
 抗拒官命等陪審其原質ヲ知得セス遂ニ誤解スルニ至ル可キ混雜ナル
 語ヲ用ヒサルヲ要ス月十八日大審院判決六月
 第八百二十九號 問題ニ記入ス可キ條件○問題ニハ必ス被告人ノ罪
 狀被告事件ノ詳細、重罪、輕罪構造ノ原質加重ノ摸樣又ハ宥恕ス可キノ
 摸樣ヲ記入ス可シ其第一ニ記載スル所ノ者ハ所爲ノ是非ヲ定ムル爲
 メニシテ有罪ノ語ハ被告人ノ意思及ヒ其所爲ノ罪タルヲ示ス者ト
 ス即チ所爲ノ確實ナル事、被告人其本人ナル事、犯意ヲ以テ犯シタル事
 ハ並ニ皆ナ其中ニ含蓄ス何トナレハ此三箇ノ條件ヲ具備スルニ非サ

レハ罪アリト爲スヲ得サレハナリ月十八日大審院判決五月二十三日大審院判決
 ニ被告人罪アル乎ノ問式ハ必ス遵奉ス可キ者ニシテ法律ハ則チ命令
 詞ヲ用ヒテ之ヲ定メ敢テ毫モ變更スルヲ許サス月十八日大審院判決但
 判決例ニ據ルニ詐僞倒行ノ犯罪ニ附キ唯一ノ例外ヲ設ケリ即チ所爲
 ノ性質必ス惡意アルヲ要スル場合はナリ月十八日大審院判決五月十三日、千
 八百二十七年四月十四日、千八百二十九年五月十三日、千
 八百二十七年十一月十二日大審院判決 抑論告事件ノ種類ニ因リ或ハ被告
 人ノ罪狀ヲ宣示スルヲ以テ是レリトシス必ス知テ犯セシ歟、故意アル
 歟、詐僞アル歟ヲ宣示スルヲ要スルコトアリ夫ノ隱匿、毆傷、盜罪ノ如キ即
 チ是ナリ是レ法律ニ於テ罪ヲ犯スニ詐僞及ヒ意思ノ兩存セルヲ欲ス
 ルニ由ルナリ月十八日大審院判決五月九日大審院判決
 第八百三十號 事件ノ詳細○問題ニハ論告ノ趣旨タル事件即チ重罪
 タルノ所爲、之ヲ犯シタル時日、場所及ヒ被告人ノ姓名ヲ詳述セサル可

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

カラス其送付ノ言渡書ニ記載シタル事件ニ適應スルヲ以テ足レリトセス乃チ第三百三十七條ハ其事件ヲ復出ス可シト定メリ然レモ犯罪ノ時日及ヒ犯所ニ附テハ假令ヒ遺脱、誤謬アルモ其犯罪若シハ刑罰ノ責任ニ缺ク可カラサルノ原質タルニ非サレハ敢テ異議ヲ來ス可キノ原由トナルヲ無シトス
 千八百二十五年一月二十七日、千八百二十七年三月三日、千八百四十六年九月四日、大審院判決
 又被害人ノ姓名等ニ附テモ亦此規則ヲ適用ス可シ蓋シ其何人タルヲ示スノ趣旨獨リ事件ヲ定示スル爲メニ過キサル時ハ或ハ之ヲ脱漏スルヲアレハナリ然レモ被害人ノ年齢又ハ身分ニシテ罪名ヲ附シ若クハ刑ヲ適施スルノ基本タル可キ時ハ必ズ明示セサル可カラス
 千八百四十五年六月六日、大審院判決
 重罪中或ハ普通ノ條件ノ外特ニ他ノ條件ヲ問題ニ記載スルヲ要スル者アリ例之ハ詐偽事件ニ附テハ損害ヲ及ホス可キノ所爲ニ千八百四十八年一月商業ニ

關スル書類ノ偽造事件ニ附テハ其書類ノ商業ニ關スル事
 千八百七十九年十一月十九日、千八百八十四年十月十五日、大審院判決
 書類ヲ強テ交付セシメタルノ事件ニ附テハ其書類ノ性質、月、日、大審院判決
 強姦又ハ猥褻ノ事件ニ附テハ被告人其被害人ニ對シ威權ヲ有スル事
 千八百五十六年十二月十一日、大審院判決
 ヲ記載セサル可カラス然レモ此等ノ條件ハ其犯罪又ハ刑罰ノ原質タル場合ヲ除クノ外之ヲ記載スルヲ要セサルナリ
 千八百二十六年三月十四日、千八百四十二年四月十七日、大審院判決
 重罪構造ノ性質及ヒ試犯ノ問
 ○此問題ニハ必ス都テ犯罪トナリ且ツ罪種、罪質ヲ定ム可キノ模様ヲ記載セサル可カラス
 千八百三十七年九月、今此規則ヲ某ノ被告事件ニ適用セン乃チ試犯ノ論告ニ附テハ法律上試犯トスルノ模様及ヒ其試犯タルノ所爲ヲ問題ニ記載ス可シ
 千八百五十三年九月、故ニ實行ノ端緒アリテ且ツ被告人意外

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

ノ景況ニ因リ其試犯ヲ停止シ又ハ其効ヲ缺キタルヲ記載スルヲ要ス若シ此二箇原質ノ一ヲ記載スルニ不充分ナル時ハ問題ノ効アルヲ無シ千八百十八年十二月十日、千八百五十二年九月一日大審院判決又他ノ語ヲ用ヒ而シテ律文ト其意義ヲ異ニスル時モ亦問題ノ効ヲ失フ千八百二十七年六月大審院判決、抑、裁判長ノ問題ヲ付スルヤ必ズ偏ヘニ律文ニ據リ、毫モ其文辭ヲ變ス可カラス唯、暴行猥褻ノ試犯ニ在テハ此例ヲ用ヒス千八百三十年六月十日、千八百三十七年二月十日、大審院判決其他ノ重罪ハ強姦タルト、國安ニ對スル犯罪タルト、墮胎タルト、問ハス敢テ之ヲ例外ニ措カサルナリ千八百三十七年九月十三日、千八百三十九年一月六日、大審院判決

第八百三十二號 附從ノ問 ○附從ニ付テハ主タル重罪及ヒ附從ノ構造ノ性質ヲ問題ニ記載セサル可カラス即チ第一ニハ主タル重罪構造

ノ性質ヲ記載ス是レ附從ハ素ト其重罪ニ牽連スルニ非サレハ罰スル

一 無シ千八百二十三年七月二十九日、千八百三十一年三月十日、若シ主犯、從犯共ニ之ヲ重罪審院ニ付シタル時ハ各自ニ附キ構造ノ性質ヲ重複説明スルヲ要セス何トナレハ總テ陪審ニ付ス可キ一事件ノ問題ハ相互ニ補助トナリ且ツ主タル問題ト相關係スルヤ明瞭ナレハナリ千八百三十八年五月二十六日、千八百四十六年七月九日、千八百五十五年一月二十九日、同年九月二十四日、大審院判決然レハ主犯ト分チテ從犯ヲ訴フル時ハ陪審ヲシテ重罪アリタルヲ申告セシメサル可カラス千八百二十七年九月十三日、千八百三十四年九月九日、大審院判決乃チ云々ノ重罪犯アリシ乎云々ノ摸樣ニテ犯シタル乎ト問ヒ而シテ後ヲ始メテ重罪ニ牽連スル附從ノ問題ヲ付スルナリ第二ニハ附從構造ノ性質ヲ記載ス何トナレハ刑法第六十條、第六十二條ニ定メタル特別ナル所爲有ルニ非サレハ附從アル可キノ理無ケレハナリ若シ夫レ論告ノ事件、贈與、約束、脅迫、擅權、奸謀、偽計ニ係ル、附從ナル時ハ挑撥ノ種類及ヒ附從タラシメタ

ルノ方法ヲ詳ニス可シ百千八百十五年十月二十七日、大審院判決若シ重罪ヲ犯
 サシムル爲メ教令シタル事件ニ係ル時ハ重罪ヲ犯スノ目的ヲ以テ教
 令セシメテ問題ニ加フルヲ至當トス八百四十四年八月二十三日、大審
 院判決又兵器其他ノ器物ヲ得セシメタル事件ナル時ハ被告人ニ於テ犯
 罪ノ用ニ供ス可キ旨ヲ知リタルヲ記載ス可シ千八百三十二年六月
 五月二十三日、大審院判決其參會加功ノ附從ナル時ハ被告人其事ヲ知テ行ヒタル
 一ヲ記載スルヲ要ス千八百四十七年十月、但之ヲ明記スルモ若シハ他
 ノ同意義ノ語ヲ用フルモ敢テ妨ケ無シ千八百三十五年八月、此終末ノ
 場合ニ於テハ參會加功ノ事件ヲ詳記スルヲ必要トセス乃チ被告人ハ
 重罪ノ用意ヲ爲シ又ハ之ヲ遂成シタル所爲ニ附キ其本犯ニ加功シ參
 會シタルノ罪アル乎ノ語ヲ用ヒテ問題ト爲スヲ得可シ千八百五十一年、
 百千八百五十六年七月三日、大審院判決、千八百

第八百三十三號 人ニ對スル重罪ニ關スル問題 ○故殺ノ論告事件ニ附
 テハ問題中殺人及ヒ殺意ノ語ヲ含蓄ニサル可カラス千八百二十九年大
 審院判決若シ被告人刑法第百六條ニ記載シタル者タル時ハ問題中猶ホ其
 被告人正當ノ理由無シテ行ヒタルヲ記載スルヲ要ス千八百二十
 四年、千八百五十年、若シ毒物ノ使用又ハ被害人ノ身分ニ因リ故殺
 罪ヲ加重ス可キ時ハ其加重ノ事件、重罪ニ結合シテ其構造ノ原質ト
 ナリ從テ主タル問題ニ之ヲ含蓄スルヲ得可シ是レ即チ別種ノ重罪ト
 稱スル者ナリ夫ノ毒殺ノ如キ必ス意思ト豫謀トヲ具有スル者ニシテ
 其問題ニハ人ヲ死ニ致ス可キ毒物ヲ用ヒ以テ生命ヲ害シ又ハ害セン
 一ヲ試ミタルヲ記載ス可シ千八百四十六年一月、弒尊屬親ノ罪ニ附
 テハ被害人ノ身分ヲ重罪構造ノ性質ナリトシテ主タル問題ヲ以テ問
 ヒ又ハ加重ノ摸樣ナリトシテ別段ナル問題ヲ以テ問フヲ聽ス百千八

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

千八百四十七年六月、同年九月二十二日、千八百四十九年三月二十三日、大審院判決、殺
 兒罪ニ附テハ又初生兒ノ身分構造ノ性質又ハ加重ノ摸樣ナリトシ或
 ハ主タル問題或ハ別段ナル問題ヲ以テ問フヲ得可シ月六日、同年八月二
 千八百五十六年三月三日、大審院判決、毆打創傷事件ニ附テハ故意ヲ以
 テ某人ヲ毆打シ又創傷ヲ被ラシムルヲ主タル事件トシ而シテ其罪
 ヲ加重ス可キ摸樣ハ別ニ問題ト爲ス可シ月七日、大審院判決、故ニ毆傷
 ニ因リ二十日以上疾病トナリ若クハ職業ヲ營ムヲ能ハサルニ至ラシ
 メタル事又ハ死ニ致スノ意無クシテ卒ニ毆傷ノ爲メ死没セシメタル
 事又ハ尊屬親ニ對シ毆傷ヲ行ヒタル事等ノ摸樣ハ別段ノ問題ト爲サ
 サル可カラズ都テ此等ノ場合ニ於テ意思ハ犯罪タルニ缺ク可カラサ
 ル原質ナルヲ以テ明カニ之ヲ示ス可キナリ假令ヒ判決例ニ於テハ毆
 打數回ニ涉リ千八百二十八年九月十九日、大審院判決、千八百八十八年九月十九日、大
 日大審院判決十一等意思ヲ明示スルニ等シカル可キ語ヲ用フルヲ許ス
 ト雖モ此等不分明ノ語ハ之ヲ用フルヲ無ク偏ヘニ律文ニ據ル可キ者
 トス月千八百四十五年十一月二十三日、千八百四十七年八月

第八百三十四號 猥褻罪ニ附テハ其十三年未滿ノ幼者ニ對シ暴行ヲ
 用フルヲ無ク之ヲ犯シタル時ハ被害人ノ年齢乃チ犯罪構造ノ性質ヲ
 ルヲ以テ主タル問題ニ之ヲ記入ス可シ千八百四十二年七月十五日、大審院
 判決若シ暴行ヲ用ヒタルニ於テハ其暴行ハ乃チ亦構造ノ性質タリ故ニ
 「被告人ハ何月何日何某ニ對シ猥褻ノ所爲ヲ行ヒタルノ罪アル乎」ト問
 ヒ敢テ其事件ヲ詳述スルヲ要セス然レモ被害人ノ年齢、犯人ノ身分又
 ハ附從等加重ノ摸樣ハ別ニ之ヲ問フ可キナリ擅ニ人ヲ逮捕、監禁スル
 罪ニ附テハ被告人不法ニ何某ヲ逮捕、監禁シタルノ罪アル歟ヲ問フヲ
 以テ足レリトス千八百二十八年六月、兒ノ出產隱蔽ノ罪ニ附テハ主タ
 陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

ル問題中兒ノ生存シテ出生シタルヲ記載ス可シ千八百三十八年三月十九日、千八百三十八年七月十六日、千八百三十九年七月二十六日、大審院判決 幼者誘出ノ罪ニ附テハ被告人詐偽ヲ以テ幼者何某ヲ其親屬又ハ後見人ノ之ヲ照管スル者ノ住所ヨリ誘出スルノ罪アル歟ヲ問フ可シ千八百四十四年五月九日、大審院判決 若シ被害人十六年未滿ナレハ其年齢ハ則チ加重ノ模様トナル可キナリ 墮胎ノ罪ニ附テハ問題中管ニ被告人其墮胎ヲ獎勵セシメラヌ又現ニ墮胎セシメタルヲ記載ス可シ故ニ被告人ハ妊婦何某ニ對シ墮胎ヲ致ス可キノ方法ヲ使用シタルノ罪アリテ墮胎ハ其方法ヲ使用シタルノ結果ナル乎ト問フモ其効アリトス千八百五十年六月十六日、千八百五十二年九月九日、大審院判決 蓋シ法律ハ其方法ノ墮胎ヲ致スニ足ル可キヲ知り又ハ知り若クハ故サラニ等ノ語ヲ加フルヲ必要トセサルナリ又被告人ノ身分ハ左ノ如ク問フヲ得可シ即チ被告人ハ醫師又ハ凡醫ナル乎ト千八百五十七年三月三十一日、大審院判決 是ナリ

第八百三十五號 所有權ニ對スル重罪ニ關スル所ノ主タル問題ヲ付スルニ附テハ敢テ困難アルヲ無シ乃チ盜罪ニ附テハ問題ニ法律上ノ釋義ヲ記シ且ツ詐偽ヲ以テ他人ノ所有物ヲ竊取シタルヲ記載セ千八百三十四年四月二十二日、千八百三十五年九月二日、同年十月二十六日、千八百三十五年十一月十二日、大審院判決 詐偽罪ニ附テハ主タル問題中○第一、現然タル所爲書類ノ變造及ヒ其變造ノ方法○第二、害意及ヒ變造書類ニ因リ現ニ損害ヲ生シ又ハ之ヲ生ス可キヲ記載ス可シ故ニ○第一、被告人ハ某ノ所爲ヲ以テ詐偽ヲ行ヒ某ノ書類ヲ贋造シ又ハ贋造シシメ又ハ變造シ又ハ變造セシメタルノ罪アル歟ヲ問ヒ○第二、變造及ヒ其方法如何ヲ問題ニ詳述シ千八百三十四年三月十一日、千八百四十七年十二月三日、千八百五十年五月二十日、大審院判決 ○第三、詐偽ノ爲メ生ス可キ損害ニ關係無クシテ千八百四十七年八月二十七日、千八百五十年七月二十七日、大審院判決 有罪ノ申告アレハ則チ暗ニ之レ有リトスル者トス千八百三十四年九月八日、千八百三十七年八月五日、大審院判決

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

二七〇日大 可キ所ノ被告人ノ惡意ヲ檢證シ〇第四變造ニ因リ他人ニ
 被ラシメタル損害即チ或ハ顯實或ハ心意上ノ損害ヲ檢證ス可キナリ
 千八百五十年九月十八日大審院判決 蓋シ其損害ハ現ニ生シタルト又生
 ス可キトヲ問ハス 四月八日、同年八月二十六日大審院判決 而シテ詐
 偽ハ損害ヲ生ス可キニ非サレハ重罪トナルヲ無キヲ以テ必ス陪審ニ
 於テ其損害ヲ申告スルヲ要ス然レモ變造ノ書類必ス他人ニ害アルノ性
 質ヲ有スル時ハ其損害ノ條件ヲ記載スルハ則チ重複スル者ト謂フ可
 シ 千八百五十五年三月二十五日、同年四月二十四日大審院判決 若シ公ケ
 ノ文書又ハ商業ニ關スル文書ヲ偽造スル時ハ其摸樣ハ即チ刑法第百
 四十五條及ヒ第四百七條詐偽罪ヲ構造スル者ト看做ス可ク從テ之
 チ主タル問題ニ記入シ 千八百四十四年二月 又或ハ之ヲ別ツヲ得可
 シ其問題ヲ合一スルト分離スルトニ論ナク公文又ハ商業ニ關スル文

書ナル歟ト問フ可カラス若シ斯ノ如ク問フニ於テハ是レ法律上ノ問
 題タリ故ニ問題ニハ何レノ文書タル歟ヲ明晰ナラシム可キ事件ヲ記
 載セサル可カラス 第八百四十七號、千八百五十二年六月三日、千八
 百五十七年五月二十四日大審院判決 十偽書使用ノ事件ニ附テハ
 七年二月十二日、同年五月八日大審院判決 偽書使用ノ事件ニ附テハ
 問題中使用ノ構造事件ヲ記載スルヲ無ク 千八百五十三年三月三日大審院判決 被告人ハ
 偽書タルヲ知テ之ヲ使用シタルヲ檢證シ 千八百三十四年六月二
 日大審院判決 次ニ書類偽造ノ性質ヲ記載シ又ハ其性質ヲ定示シタル
 問題ニ照應ス可シ 千八百四十九年四月十二日大審院判決
 第八百三十六號 偽造寶貨事件ニ附テハ主タル問題中變造又ハ贗造
 ニ係ル寶貨ノ適法通貨タルヲ記載ス可シ是レ即チ重罪構造ノ原質
 ナリ 千八百三十一年八月十日大審院判決 其行使ノ場合ニ於テハ被告人偽
 貨タルヲ知リタル歟ヲ問フヲ要セス此摸樣ハ即チ有罪ノ問題中ニ

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

含蓄スル所ナリ詐偽倒行事件ニ附テハ問題中○第一倒産シタル商人ノ身分○第二商法第五百九十一條ニ記載シタル詐偽事件ノ一ヲ記入ス可シ千八百三十八年九月二十日、千八百四十二年十月、敢テ其事件ヲ詳述スルヲ要セス蓋シ明カニ詐偽ヲ定示スルニ於テハ律文ニ據ルヲ以テ足レリトス千八百三十九年九月、放火事件ニ附テハ○第一、被告人放火セント欲スルノ意即チ刑法第四百三十四條ニ於テ其罪質ヲ混セスシテ明カニ指示シタル所ノ意思○第二、法律ノ示シタル物件ニ放火シタル事○第三、或ハ放火ニ因リ他人ニ害ヲ及ホシタル事或ハ人ノ住居シ又ハ住居ノ用ニ供ス可キ建造物ニ放火シタル事或ハ火ヲ傳播シタル時ハ之ヲ傳播ス可キ爲メ配置シタル物件ニ放火シタル事ヲ記入ス可シ此等三箇ノ摸樣ハ各構造ノ性質タルヲ得可シ千八百四十八年六月、若シ被告入其所有物ニ放火シタル時ハ爲メニ生シタル損害ノ種類ヲ

檢證シ千八百二十六年五月七日、千八百四十四年八月、損害ヲ生セサル時ハ問題中住居又ハ傳播ノ旨ヲ記載シタル場合ノ外重罪有ルヲ無シ千八百四十七年一月十四日、千八百四十八年二月三日、千八百八十五年五月二十八日、同年九月十三日、大審院判決、若シ物件ノ他人ニ屬スル時ハ問題中唯、此摸樣ヲ記載スルヲ以テ完全ナリトス而シテ住居ハ加重ノ摸樣トナルナリ千八百四十年五月二十七日、千八百四十二年三月二十二日、大審院判決、若シ放火傳播シタル時ハ問題中實ニ火ヲ傳播ス可キ爲メ物件ヲ配置シタルノミナラス又實ニ傳播シタルヲ記入ス可シ千八百四十六年四月十八日、十一月三十日、千八百五十年四月十一日、大審院判決、又第四百三十四條第三項、第五項ニ示シタル物件ニ係ル時ハ之ヲ指示スルヲ要ス故ニ刈收シタル樹木又ハ穀物ニ係ル時ハ必ス其物件ノ收割物タル性質ヲ有セシヲ詳明ス可キナリ千八百五十二年三月三日、同年四月、第八百三十七號、強テ書類ヲ交付セシメタル事件ニ附テハ問題チ一

陪審ニ付ス可中問題ノ作爲

箇ニシテ而シテ強迫暴行ヲ以テ書類ヲ交付セシメタル事件及ヒ其書類
 タル素ト義務又ハ義務ノ免脱ニ關シタル模様ヲ記載セサル可カラズ
 千八百四十五年六月十九日、千八百四十七年五月十五日大審院判決、偽證事件ニ附テハ被告人ヲ陷害シ
 又ハ曲庇ス可キ供述ナルヲ檢證スルヲ要ス故ニ被告人ハ重罪事件
 ニ附キ某ノ被告人ヲ陷害スル爲メ又ハ曲庇スル爲メ偽證ヲ行ヒタル
 ノ罪アル歟ヲ問フ可シ、千八百五十年十一月、證人ヲシテ其職ヲ瀆サシ
 メタル事件ニ附テハ教唆ニ因リ附從トナル可キノ原質ヲ揭示シ若ク
 ハ共職ヲ瀆サシメタルノ語ヲ單用ス可シ蓋シ判決例ニ據ルニ此語ヲ
 以テ重罪ノ性質ヲ示スニ足レリトセリ、千八百五十一年五月三十日、同
 年三月一日、千八百五十四年十二月十八日、千八百五十四年四月
 第八百三十八號 加重ノ模様○加重ノ模様ハ單ナル有リ複ナル有リ
 豫謀、租靚、住宅、公ナル場所、犯人又ハ被告人ノ身分ノ如ク單ナル模様ハ

律文ニ據リ問題中之ヲ記載スルヲ以テ是レリトス然レモ故殺ト他ノ
 重罪、輕罪トノ牽連、僞鑰、破壞、踰越等盜罪ヲ加重スル數箇ノ模様又ハ休
 業ニ至ラシメタル事、被告人ノ威權ヲ有セシ事、僞造書類ノ性質、公ケノ
 文書又ハ商業ニ關シタル事ノ如ク模様ノ多複ニ涉ル時ハ問題中各摸
 様ノ原質及ヒ法律上ノ要件ヲ記載ス可キナリ

第八百三十九號 故殺ト他ノ重罪又ハ輕罪ト相牽連スルニ基ク加重
 ノ模様ニ關スル問題ニハ○第一、其牽連スル事○第二、加重タル重罪又
 ハ輕罪ヲ構造スル原質ヲ記載ス可シトス故ニ先ツ二箇ノ罪ヲ同時ニ
 犯シ又ハ彼此ノ間、因タリ果タルノ關係アルヲ證シ、千八百十六年四
 日大審院判決、次ニ第二ノ所爲重罪又ハ輕罪タル可キ性質ヲ有スルヲ
 明カニス可シ、千八百四十二年四月十四日、千八百五十年三月二日、此終
 ノ模様ハ或ハ加重ノ模様ニ關スル問題ヲ以テ問ヒ或ハ別ニ問フヲ

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

得五千八百五十四年四月二十日、千八百偽鑰ノ使用ニ關スル問題ニハ當
 ニ偽鑰ヲ用ヒテ盜罪ヲ犯シタルノミナラス又家宅若クハ住居ス可
 キ建造物又ハ房室庭園中ニ於テセシメテ證ス可シ千八百二十八年七月
 四年七月二十五日、千八百五十九年六月六日、千八百四十四外部ノ破壞ニ
 關スル問題ニモ亦同上ノ模様ヲ記載ス可ク乃チ唯、外部ヲ破壞シテ盜
 罪ヲ犯シタリトスルヲ以テ是レリトセス必ス破壞ノ目的タル隔牆内ニ
 ニ突入セント欲スルニ在ルヲ記載スルヲ要ス故ニ盜罪ハ隔牆内ニ
 於テ外部ヲ破壞シテ之ヲ犯シタル手ト問フヲ得可シ千八百五十二年
 百九日大審院判決共盜罪ヲ犯シタル所ノ場所繞圍アリシヲ記載ス
 レハ即チ破壞アリシヲ推測スルヲ得ルト雖モ之ヲ證明スル者ニ非
 ス千八百四十四年四月二十日、千八百内部ノ破壞ニ附テハ亦同上ノ例ニ
 從テ千八百五十二年十一月二十七日、千八百五十三除越ニ關スル問題ハ

是ニ反シ敢テ其模様ヲ指明スルヲ要セス乃チ通常ノ問式ニ據リ、盜罪
 ハ除越シテ之ヲ犯シタル手ト問フ可シ千八百五十一年五月三十日、

第八百四十號 加重ノ模様ニ關スル問ハ獨リ主犯ノミナラス又從犯

ニ附テ爲ス可シ然レモ主犯、從犯ヲ併セテ之ヲ審理スル時ハ各自ニ附
 キ此模様ヲ問フヲ要セス乃チ被告入ハ加功云々又ハ知テ隱匿シ云々
 ニ因リ上ニ指名シ及ヒ模様ヲ明記シタル重罪犯ノ附從タル手ト問フ
 チ得可シ然レモ隱匿ノ附從ニ附テハ從犯隱匿ノ時ニ當リ猶ホ此模様
 チ知リシ歟ヲ加問ス可シ千八百四十九年十月十二日、千八百若シ從犯ノ
 ミテ訴ヘ之ヲ審理スル時ハ對質辯論シ而シテ後チ重罪構造ノ性質及
 ヒ其加重ノ模様確實ナルノ中告アルヲ要ス故ニ主犯ノ訴訟ニ關スル
 時ノ如ク同一ノ問題ヲ付シ次ニ其問題ト附從ノ問題トノ關係ヲ證明
 ス可キナリ千八百四十四年三月五日、千八百五十四年八月三十一日、大審院判決

陪審ニ付ス可キ問題、作爲

第八百四十一號 裁判長ハ某ノ論告事件ニ附キ豫メ一問題ニ附キ否ナル答辭アルヲ慮リ以テ總體ヲ然リトスルノ申告アル場合ニ於テハ重複ニ渉ルノ煩勞アルモ幾部ヲ否トスル場合ニ於テハ實ニ缺ク可キ所ニ非サル二三ノ摸樣ヲ問フヲ得可シ故ニ詐僞倒行ノ論告事件ニ附テハ其附從ニ關スル論告ニ拘ラサルヲ確實ナラシムル爲メ問題中被告人ハ倒産シタル商人ナル主犯ノ財産ヲ私シタルノ附從タルヲ記載シ月千八百五十五年二月九日大審院判決人ノ住居ヲ放火シタル事件ニ附テハ豫メ住居ノ摸樣ニ附キ否ナル答辭アルヲ慮リ以テ先ツ他人ニ害ヲ及ホシタルノ摸樣ヲ問ヒ一月千八百三十八年四月二十日千八百四十一年特名アル盜罪事件ニ附テハ加重ノ摸樣有ラスシテ唯輕罪タルニ過キサルノ申告アル時ハ期滿免除ヲ判決スルニ困難ナカランカ爲メ先ツ犯罪ノ事實ヲ問ヒ千八百四十六年三月偽證及ヒ證人ヲシテ其職ヲ濫サシメ

タルノ事件ニ附テハ濫職ノ問題中被告人ヲ陷害シ又ハ曲庇スル爲メ詐僞ノ供述ヲ爲シタル事件ヲ記載シ以テ假合ヒ偽證アラストスルモ附從事件ヲシテ依法ノ根據アラシムル爲メニスルヲ至當トスルナリ千八百三十六年九月十五日千八百四十四年八月二十九日千八百四十五年一月十六日千八百五十一年四月二十六日大審院判決第八百四十二號 法律上ノ問題○夫レ陪審及ヒ重罪審院ノ管轄ハ其異ナル所事實ト法律トノ區別ニ由ル即チ事實ノ申告ヲ陪審ニ委シ法律ノ適用ヲ裁判官ニ任セリ是ヲ以テ問題ニ法律上ノ問題ヲ登載シ以テ陪審ノ判決ヲ求ムルヲ決シテ之レ有ル可カラス乃チ法律上罪名ノ原質タル事實ヲ問ヒ敢テ其罪名ヲ問フ可カラス又法律上ノ問題ノ由テ生ス可キノ摸樣ヲ問ヒ敢テ事件ニ關スル法律上ノ性質、法律ノ意義及ヒ其意義ノ限度ヲ問フ可カラス故ニ附從又ハ試犯ノ論告事件ニ附テハ試犯又ハ附從アル歟ヲ問ハスシテ此等ノ性質ヲ顯示スル摸樣ヲ問

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

ヒ而シテ若シ陪審其事件ヲ確認スル時ハ審院ニ於テ其法律ニ定メタル原質ヲ含有スルヤ否ヤヲ判ス可シトス
千八百三十三年七月二日、千八百三十八年一月二十四日、千八百三十五年六月二十日、同年十二月三日、大審院判決
千八百三十八年三月十六日、千八百三十五年六月二十四日、同年十二月三日、大審院判決

第八百四十三號 前述ノ區別ハ左ノ事件ニ之ヲ適用スルヲ得可シ即チ猥褻ノ論告事件ニ附テハ被告人、被害人ノ上ニ威權ヲ有セシ歟ト問フヲ無シ、云々ノ身位ヲ有セシ歟、尊屬親ナル歟、繼父、妻ノ父、後見人、授業師、雇人ナリシ歟ト問フ可シ而シテ後チ其身位ノ如何ニ附キ法律上ノ効果ヲ決スルハ實ニ審院ノ職掌ニ屬ス
千八百三十五年三月二十五日、千八百三十六年九月二十二日、千八百四十四年三月十五日、千八百四十四年三月十五日、大審院判決
詐偽事件ニ附テハ陪審ハ詐偽アル歟又偽造ノ書類ハ私ノ文書、公ノ文書又ハ商業ニ關スル文書ナル歟ト申告セシテ被告人ハ云々ノ書類中他人ノ害トナル可キ云々ノ變造ヲ行ヒタル歟又其書類ハ官吏ノ手ニ成リ而シテ其官吏ノ管掌ス可キ所

ナル歟商人ノ手ニ成リ而シテ其目的トスル所商業ニ關スル歟否ヤヲ申告ス可キナリ
千八百三十八年十月五日、千八百四十四年二月十四日、千八百五十二年六月二日、詐偽倒行、重婚、賄賂、殺兒又ハ故殺ノ事件ニ附テハ千八百五十二年六月二日、大審院判決
此等重罪ノ性質タル摸樣ヲ明示スルヲ要ス例之ハ起由ノ事件、身位、依法威權及ヒ各加重ノ摸樣ノ原質等是ナリ
千八百五十一年六月二十二日、千八百五十八年六月十八日、大審院判決

第八百四十四號 然レモ此規則ハ嚴ニ之ヲ適用セズ又之ヲ適用スルヲ得サルナリ假令ヒ問題中所爲云々ノ重罪タル可キ事例之ハ人ノ姓名ヲ詭リ又ハ公證書若クハ爲換券ノ如キ公正ノ文書若クハ商業ノ文書中ニ詐偽ヲ訴ヘタルヲ記スルモ尙ホ他ニ其所爲其摸樣ヲ詳細ニスル者有ルニ於テハ爲メニ其問題ノ効ヲ失フヲ無シ
千八百三十七年十月十四日、千八百三十九年十一月十八日、千八百四十四年三月十六日、千八百四十四年三月十九日、大審院判決
又事實及ヒ法律ノ別ヲ爲スヲ甚ク難

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

キヲ無キニ非ス夫ノ偽造寶貨事件ニ附テハ其通貨タルヤ否ヤハ實ニ構造ノ性質ニシテ陪審ノ決ス可キ所トス十八百五十年一月十一日大審院判決又陪審ハ強テ書類ヲ交付セシメタル事件ニ附キ其書類ハ義務約定又ハ義務ノ解除ニ關スル者ナルヤ否ヤヲ斷シ千八百三十五年六月十九日大審院判決盜罪事件ニ附テハ公道ニ於テ犯セシヤ、踰越セシヤ又ハ偽鑰ヲ使用シテ犯セシヤ否ヤヲ判シ千八百四十四年七月十八日大審院判決又強姦、猥褻、證人ノ收賄、陰謀、内亂ノ罪ヲ犯セシヤ否ヤヲ決ス可シ判決例ニ據ルニ此等ノ場合ニ於テハ法律上ノ名稱ヲ用フルヲ許セリ今其理由ヲ釋ヌルニ蓋シ罪名或ハ事實ト合シ或ハ明瞭ニシテ陪審之ヲ他ノ事件ト混淆スルヲ無キヲ以テナリ

第八百四十五號 複雜ノ問題○治罪法第三百四十五條及ヒ千八百三十六年五月十三日ノ法令第一條ニ據ルニ陪審ハ先ツ主タル事件ニ附

キ逐次各別ニ投票シ又加重ノ摸樣、宥恕事件、是非辨別ノ問題アレハ之ニ附キ投票シ次ニ輕減ノ摸樣ニ附キ投票ス可キナリ蓋シ此等ノ法文ハ法律ニ於テ問題ノ複雜ニ涉ルヲ禁絶セサルヲ示ス者ニシテ即チ其非トスル所ハ其別ニ定メタル特種ノ複雜ニ問題ニ過キサルナリ法文ヲ以テ論スルニ問題中二箇各別ノ趣意及ヒ二箇ノ摸樣ヲ記載スルニ於テハ假令ヒ其趣意及ヒ摸樣固ヨリ同一事件ノ原質タリト雖モ其問題ヲ以テ複雜ニ涉ル者トス立法者ノ禁制シタル複雜トハ是レ之ヲ謂フニ非ス乃チ立法者ハ事件ノ複雜スルト否トチ問ハス敢テ之ヲ分離セス唯共事件ノ同一ナラサル時相互ニ之ヲ分ツニ過キサルナリ故ニ法律ノ意義ニ據ルニ二箇ノ事件ニシテ二箇各別ノ答辭ヲ要シ而シテ答辭ノ異ナル時ハ各別ノ效果ヲ生ス可キ所ノ者ヲ同一ノ問題中ニ記載シタル時ニ非サレハ所謂ル複雜ナル者無シトス千八百四十八年十二月二十二日

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

大審院 蓋シ此區別ヲ爲ス所以ノ者ハ唯訴訟ニ係ル一切ノ摸樣ニ附キ
陪審ノ投票ヲ明確ナラシムル爲メナリ是ヲ以テ獨リ左ノ場合ニ於テ
ハ禁止ニ係ル複雑アリトス○第一同一ノ問題中關係ナキ二箇各別ナ
ル論告事件ヲ併記シタル時○第二數名ノ被告人ニ關スル時○第三主
タル事件及ヒ一箇又ハ數箇ノ加重ノ摸樣ヲ記シタル時○第四宥恕事
件ヲ他ノ摸樣ト混シタル時はナリ

第八百四十六號 各別ナル論告事件ヲ併記シタル時ハ問題複雑ニ涉
ル者トス故ニ問題中各別ノ人ニ對スル數箇各別ノ盜罪ヲ記載シ千八
百三十九年三月三十日大審院判決千八百二名ノ證人ニ收賄シタル二箇ノ事件ヲ
合シ千八百一十八年四月二十三日大審院判決千八百五數名ノ幼婦ニ對スル數箇ノ猥
褻事件ヲ包含ス千八百四十四年七月父母ニ對スル毒殺ト他人ニ對ス
ル毒殺トヲ混シ千八百四十五年四月他人ノ家屋ニ放火スルト自己ノ家
屋ニ放火スルトヲ混シ又直接ノ放火ト他物ヲ藉リテ傳播シシメタル
放火トヲ混シ千八百四十八年十一月附從ノ論告事件ニ附キ二箇ノ論告
事件ヲ分別セスシテ被告人ハ前ニ記シタル重罪ヲ犯シタルノ罪アル
乎ト問ヒ千八百四十四年六月二十日大審院判決千八百四十八年三月十二日大審院判決
ナリトス然レモ一人ニシテ同種ノ數罪ヲ犯シ又ハ數箇ノ人ニ對シ同
時ニ其數罪ヲ犯シタル時ハ之ヲ同一ノ重罪ト看做シ從テ一箇ノ問題
中ニ記載スルヲ得可シトス千八百四十八年八月八日同年十二月二十四
日千八百四十九年六月二十日千八百四十八年十月十二日千八百五十年
一月二十日同年六月二十日千八百四十八年三月十二日千八百五十年
第八百四十七號 數名ノ被告人ニ關スル時ハ其問題複雑ニ涉ル者ト
ス千八百三十九年九月六日千八百四十二年九月九日大審院判決然レモ加重ノ摸樣

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

ニ附テハ顯實ナル摸樣ト心意上ノ摸樣トヲ區別セサル可カラス其心意上ノ摸樣即チ豫謀ノ如キハ被告人各自ニ限ルヲ以テ各自ニ問フヲ要ス五十八年三月二十九日四月四日千八百八十年七月三十一日大審院判決其他夜陰、公道、兵器ノ陽携、陰帶、聚衆ノ如キハ甲ノ犯人ニ附キ存セサレハ乙ノ犯人ニ附テモ亦存スルヲ得サルヲ以テ問題ヲ簡單ナラシメンカ爲メ同一ナル重罪ノ被告人數名アル時ハ此等ノ加重ノ摸樣ヲ一問題ニ記載スルヲ得可シトス例之ハ盜罪事件ニ附テハ各被告人ニ附キ主タル事件ノ有罪如何ヲ問ヒタル後チ左ノ問辭ヲ加フルヲ以テ足レリトス即チ此盜罪ハ陽ニ又ハ陰ニ兵器ヲ携帶シタル數名ノ者夜間公道ニ於テ之ヲ犯シタル乎千八百八十年二月十日、千八百四十七年七月三十一日、千八百六十三年四月四日大審院判決

第八百四十八號 第三コハ主タル事件及ヒ一箇又ハ數箇ノ加重ノ摸樣ヲ併記シタル時ハ其問題複雜スル者トス千八百八十三年七月八日、千八百八十六年三月十三日、千八百八十六年四月十九日大審院判決此規則ヲ適施セントセハ必先ツ重罪構造ノ性質ト其加重ノ摸樣トヲ區別セサル可カラス蓋シ加重ノ摸樣ト稱スル者ハ故殺事件ニ附テハ豫謀、狙撃或ハ職務ヲ執行スル公力士ニ對シテ之ヲ行ヒ或ハ其前後ニ他ノ重罪ヲ犯シ或ハ其目的他罪ヲ犯シ又ハ犯人ノ逃亡ヲ確保センカ爲メニシ或ハ同時ニ慘毒殘忍ノ所爲アリシヲ又墮胎事件ニ附テハ墮胎セシメシ者ノ身位、強姦又ハ暴行ヲ以テ犯シタル猥褻ノ事件ニ附テハ被害人ノ年齡、行害者ノ身位及ヒ他人ノ加援、盜罪事件ニ附テハ其罪ヲ加重ス可キ一切ノ摸樣、毆打創傷事件ニ附テハ被害人尊屬親タルノ身位及ヒ其罪ヲ變更ス可キ他ノ摸樣等ニシテ一々爰ニ列叙スルヲ要セサルナリ蓋シ此規則ニ附キ亦其例外無キニ非ス即チ○第一、弑尊屬親、殺兒、文書強奪、官ヨリ受寄シタル物品ノ竊盜、衆人相會シ兵力ヲ以テ掠奪スル罪ノ如ク特種ノ罪ニ附テハ

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

其加重タル可キ事件ハ構造ノ性質トナルヲ以テ主タル事件及ヒ加重
 ノ摸樣ヲ同一ノ問題中ニ記載スルモ其効チ失フヲ無シ○第二主タル
 問題中摸樣ノ記載適正ナラスト雖モ其別段ノ問題ヲ以テ分ナテ之ヲ
 問ヒタル時千八百五十三年四月○第三唯加重ノ原質ノ一部ヲ示スニ過
 キスシテ他ノ問題中之ヲ補成ス可キ者無キヲ以テ其摸樣ノ贅物ニ屬
 スル時千八百四十三年五月四日、千八百五十年六月四日、千八百五十二年三月十一日、千八百五十四年六月三日、千八百五十六年三月十一日、千八百五十八年三月十一日、千八百六十一年三月十一日、千八百六十四年三月十一日、千八百六十七年三月十一日、千八百七十年三月十一日、千八百七十三年三月十一日、千八百七十六年三月十一日、千八百七十九年三月十一日、千八百八十二年三月十一日、千八百八十五年三月十一日、千八百八十八年三月十一日、千八百九十年三月十一日、千八百九十三年三月十一日、千八百九十六年三月十一日、千八百九十九年三月十一日亦然リトス

第八百四十九號 問題中二箇ノ加重ノ摸樣ヲ併記シタル時ハ亦複雑
 ニ渉ル者トス千八百四十三年二月二十五日、千八百四十七年七月十七日、千八百五十年七月十七日、千八百五十二年七月十七日、千八百五十四年七月十七日、千八百五十六年七月十七日、千八百五十八年七月十七日、千八百六十年七月十七日、千八百六十二年七月十七日、千八百六十四年七月十七日、千八百六十六年七月十七日、千八百六十八年七月十七日、千八百七十年七月十七日、千八百七十二年七月十七日、千八百七十四年七月十七日、千八百七十六年七月十七日、千八百七十八年七月十七日、千八百八十年七月十七日、千八百八十二年七月十七日、千八百八十四年七月十七日、千八百八十六年七月十七日、千八百八十八年七月十七日、千八百九十年七月十七日、千八百九十二年七月十七日、千八百九十四年七月十七日、千八百九十六年七月十七日、千八百九十八年七月十七日、千八百九十九年七月十七日故ニ故殺事件ニ附キ
 豫謀狙覷ノ二摸樣千八百四十二年十月八日、千八百四十四年十月八日、千八百四十六年十月八日、千八百四十八年十月八日、千八百五十一年十月八日、千八百五十二年十月八日、千八百五十四年十月八日、千八百五十六年十月八日、千八百五十八年十月八日、千八百六十年十月八日、千八百六十二年十月八日、千八百六十四年十月八日、千八百六十六年十月八日、千八百六十八年十月八日、千八百七十年十月八日、千八百七十二年十月八日、千八百七十四年十月八日、千八百七十六年十月八日、千八百七十八年十月八日、千八百八十年十月八日、千八百八十二年十月八日、千八百八十四年十月八日、千八百八十六年十月八日、千八百八十八年十月八日、千八百九十年十月八日、千八百九十二年十月八日、千八百九十四年十月八日、千八百九十六年十月八日、千八百九十八年十月八日、千八百九十九年十月八日又ハ豫謀及ヒ同時
 ニ輕罪ヲ犯シタル二摸樣千八百三十七年七月十七日、千八百三十九年七月十七日、千八百四十一年七月十七日、千八百四十三年七月十七日、千八百四十五年七月十七日、千八百四十七年七月十七日、千八百四十九年七月十七日、千八百五十一年七月十七日、千八百五十三年七月十七日、千八百五十五年七月十七日、千八百五十七年七月十七日、千八百五十九年七月十七日、千八百六十一年七月十七日、千八百六十三年七月十七日、千八百六十五年七月十七日、千八百六十七年七月十七日、千八百六十九年七月十七日、千八百七十一年七月十七日、千八百七十三年七月十七日、千八百七十五年七月十七日、千八百七十七年七月十七日、千八百七十九年七月十七日、千八百八十一年七月十七日、千八百八十三年七月十七日、千八百八十五年七月十七日、千八百八十七年七月十七日、千八百八十九年七月十七日、千八百九十一年七月十七日、千八百九十三年七月十七日、千八百九十五年七月十七日、千八百九十七年七月十七日、千八百九十九年七月十七日包含シ盜罪事件ニ附キ
 暴行及ヒ其痕跡ノ二摸樣ヲ記載シ千八百一十一年三月十一日、千八百一十三年三月十一日、千八百一十五年三月十一日、千八百一十七年三月十一日、千八百一十九年三月十一日、千八百二十一年三月十一日、千八百二十三年三月十一日、千八百二十五年三月十一日、千八百二十七年三月十一日、千八百二十九年三月十一日、千八百三十一年三月十一日、千八百三十三年三月十一日、千八百三十五年三月十一日、千八百三十七年三月十一日、千八百三十九年三月十一日、千八百四十一年三月十一日、千八百四十三年三月十一日、千八百四十五年三月十一日、千八百四十七年三月十一日、千八百四十九年三月十一日、千八百五十一年三月十一日、千八百五十三年三月十一日、千八百五十五年三月十一日、千八百五十七年三月十一日、千八百五十九年三月十一日、千八百六十一年三月十一日、千八百六十三年三月十一日、千八百六十五年三月十一日、千八百六十七年三月十一日、千八百六十九年三月十一日、千八百七十一年三月十一日、千八百七十三年三月十一日、千八百七十五年三月十一日、千八百七十七年三月十一日、千八百七十九年三月十一日、千八百八十一年三月十一日、千八百八十三年三月十一日、千八百八十五年三月十一日、千八百八十七年三月十一日、千八百八十九年三月十一日、千八百九十一年三月十一日、千八百九十三年三月十一日、千八百九十五年三月十一日、千八百九十七年三月十一日、千八百九十九年三月十一日放火事件ニ附

キ其家屋ヲル人ノ住スル所ヨリ且ツ保險シタル者ニ係ルノ二摸樣
 ヲ併記シタル時千八百四十七年八月八日、千八百四十九年八月八日、千八百五十一年八月八日、千八百五十三年八月八日、千八百五十五年八月八日、千八百五十七年八月八日、千八百五十九年八月八日、千八百六十一年八月八日、千八百六十三年八月八日、千八百六十五年八月八日、千八百六十七年八月八日、千八百六十九年八月八日、千八百七十一年八月八日、千八百七十三年八月八日、千八百七十五年八月八日、千八百七十七年八月八日、千八百七十九年八月八日、千八百八十一年八月八日、千八百八十三年八月八日、千八百八十五年八月八日、千八百八十七年八月八日、千八百八十九年八月八日、千八百九十一年八月八日、千八百九十三年八月八日、千八百九十五年八月八日、千八百九十七年八月八日、千八百九十九年八月八日即チ複雑ニ渉ル者トシテ其問
 題ノ効チ失フ可シ然レモ夜陰ト住居破壊ト繞園内ノ如ク一箇ノ加重
 ノ摸樣本ト二箇ノ原質相合スルニ成ル時ハ同一ノ問題中併記スルヲ
 得可シ何トナレハ是カ爲メ生スル所ノ加重ハ唯一ニシテ毫モ異ナル
 者無ケレハナリ千八百四十七年六月三十日、千八百四十九年六月三十日、千八百五十一年六月三十日、千八百五十三年六月三十日、千八百五十五年六月三十日、千八百五十七年六月三十日、千八百五十九年六月三十日、千八百六十一年六月三十日、千八百六十三年六月三十日、千八百六十五年六月三十日、千八百六十七年六月三十日、千八百六十九年六月三十日、千八百七十一年六月三十日、千八百七十三年六月三十日、千八百七十五年六月三十日、千八百七十七年六月三十日、千八百七十九年六月三十日、千八百八十一年六月三十日、千八百八十三年六月三十日、千八百八十五年六月三十日、千八百八十七年六月三十日、千八百八十九年六月三十日、千八百九十一年六月三十日、千八百九十三年六月三十日、千八百九十五年六月三十日、千八百九十七年六月三十日、千八百九十九年六月三十日
 第八百五十號 問題中宥恕事件又ハ辨別ニ關スル問題ト共ニ主タル
 事件或ハ加重ノ摸樣ヲ記載シタル時ハ亦複雜ニ渉ル者トス故ニ偽造
 寶貨事件ニ附テハ被告人共行使シタル偽貨ヲ眞實ナリト信シテ領收
 シタルコトハ主タル事件ニ併記ス可カラズ千八百四十八年六月十五日、千八百五十一年六月十五日、千八百五十四年六月十五日、千八百五十七年六月十五日、千八百六十年六月十五日、千八百六十二年六月十五日、千八百六十四年六月十五日、千八百六十六年六月十五日、千八百六十八年六月十五日、千八百七十年六月十五日、千八百七十二年六月十五日、千八百七十四年六月十五日、千八百七十六年六月十五日、千八百七十八年六月十五日、千八百八十年六月十五日、千八百八十二年六月十五日、千八百八十四年六月十五日、千八百八十六年六月十五日、千八百八十八年六月十五日、千八百九十年六月十五日、千八百九十二年六月十五日、千八百九十四年六月十五日、千八百九十六年六月十五日、千八百九十八年六月十五日、千八百九十九年六月十五日然レモ
 犯罪ノ時日ノ如ク公訴ニ對抗スル辯護トナル可キ事件ハ主タル問題
 ニ屬スルヲ以テ之ヲ宥恕ト混同ス可カラサルナリ千八百五十年三月十一日、千八百五十二年三月十一日、千八百五十四年三月十一日、千八百五十六年三月十一日、千八百五十八年三月十一日、千八百六十年三月十一日、千八百六十二年三月十一日、千八百六十四年三月十一日、千八百六十六年三月十一日、千八百六十八年三月十一日、千八百七十年三月十一日、千八百七十二年三月十一日、千八百七十四年三月十一日、千八百七十六年三月十一日、千八百七十八年三月十一日、千八百八十年三月十一日、千八百八十二年三月十一日、千八百八十四年三月十一日、千八百八十六年三月十一日、千八百八十八年三月十一日、千八百九十年三月十一日、千八百九十二年三月十一日、千八百九十四年三月十一日、千八百九十六年三月十一日、千八百九十八年三月十一日、千八百九十九年三月十一日

陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

第八百五十一號 問題ノ分離○概論スルニ裁判長ハ假令ヒ裁判上複
 雜ナル問題ト爲サス且ツ法律ニ背クコト同一文辭中事件ヲ包含ス
 ルヲ得可キ時ト雖モ問題ヲ分離スルヲ得ルナリ蓋シ事件ノ各種ナル
 原質ヲ分離スルハ陪審ノ決議ヲ容易ナラシムル者ニシテ判決例ニ據
 ルニ常ニ之ヲ認可シタリ即チ裁判長ハ弒尊屬親事件ニ附キ故殺ト被
 害人ノ身位トヲ分チ四十八百三十九年九月二十九日大審院判決故殺事件ニ附
 キ故意ノ毆傷死ニ致シタルノ毆傷及ヒ死ニ致スノ意ニ出ル毆傷ノ三
 問題ニ分チ二千八百四十四年七月詐偽事件ニ附キ書類偽造ノ事件及ヒ
 其書類ノ商業ニ關スル性質ヲ分チ千八百九十三年五月十日大審院判決文
 書強奪事件ニ附キ文書奪取ノ事件及ヒ強暴ノ所有ヲ分チ千八百四十
 一年大審院判決盜罪事件ニ附キ破壞アリタル歟ヲ問ヒ次ニ其破壞ハ繞圍内
 ニ於テセシ歟ヲ問フ二千八百四十四年大審院判決ヲ得可キ者トス但シ其問題分

離スルニ附テハ送付ノ言渡書ニ記載シタル論告ヲ毫モ變更セサルコト
 ヲ要ス是レ其分離ノ要件ナリ千八百三十五年一月九日大審院判決
 第八百五十二號 交錯ノ問題○判決例ニ據ルニ交加ナル二箇ノ文辭
 ヲ用フルモ罪刑共ニ同一ニシテ敢テ變スルコト無キ者ナル時ハ參錯ナ
 ル文體ヲ用ヒ問題ヲ作ルコト許セリ故ニ幼者誘拐事件ニ附キ誘拐ハ
 詐計又ハ暴行ニ出ル歟ト問ヒ千八百二十一年十月詐偽倒行事件ニ附
 キ被告人ハ其貸高ヲ枉取シ又ハ隱匿シテ其罪ヲ犯シタル歟ト問ヒ千
 八百五十四年一月十日詐偽事件ニ附キ被告人ハ義務ノ證書ヲ作爲シ又ハ
 三〇日大審院判決 詐偽事件ニ附キ被告人ハ義務ノ證書ヲ作爲シ又ハ
 作爲セシメ手摺ヲ偽作シ又ハ偽作セシメ其偽作ハ法律ニ定メタル云
 々ノ方法ヲ以テセシ歟ト問ヒ千八百四十二年五月二十六日大審院判決猥褻事
 件ニ附キ被告人ハ猥褻ノ所爲ヲ試ミ又ハ遂ケタル歟ト問ヒ千八百四
 十一年大審院判決 附從事件ニ附キ附從タル可キノ各方法ヲ詳述シテ被告人ハ
 陪審ニ付ス可キ問題ノ作爲

致唆示令又ハ參會加功シタルノ罪アル歟ト問ヒ千八百五十四年四月偽造寶貨事件ニ附キ被告人ハ寶貨ヲ偽造シ又ハ變造シタル歟ト問フ千八百四十四年十月ヲ得可キナリ然レモ交錯シタル二箇ヲ文辭其原質効果ヲ異ニスル時ハ復タ問題ヲ一ニスルヲ得ス例之ハ官命抗拒ノ罪ハ「襲撃又ハ抗拒」ニ因ル歟千八百三十五年七月盜罪ハ「詐偽」ヲ以テ奪取シ又ハ留置シテ之ヲ犯シ千八百三十六年三月又ハ庭園又ハ住居ノ家宅ニ屬スル場所ニ於テ之ヲ犯シタル歟千八百二十年四月被告人ハ「家宅ヲ廢毀シ又ハ掠奪シタル」歟千八百十五年十月ト問フ可カラス之ヲ要スルニ交錯ノ問題ハ概テ宜キヲ得ル者ニ非ス何トナレハ陪審ノ答辭之ヲ然トシ又ハ否トスルモ其答辭ハ問題中孰レノ部分ニ適スル乎ヲ知リ難シ然リ而シテ陪審ノ申告ハ刑罰ヲ加フルノ基礎タルヲ以テ決シテ曖昧ニ失ス可カラズ又其意義ヲニニス可カラズ抑罪科ノ點ニ附

テ之ヲ觀ルルニ身親カラ行ヒ又ハ行ハシメ作爲シ又ハ作爲シシメ所爲ヲ試ミ又ハ遂ルハ其間區別ナキニ非ス故ニ前ニ掲ケタル如キ問題ヲ用ヒサルヲ要スルナリ

○第四項 問題下付ニ關シ偶然生スル所ノ事件

第八百五十三號 問題ヲ付スルノ順序如何○問題ハ概テ左ノ順序ヲ以テ之ヲ付ス即チ裁判長ハ論告事件ヲ分割シ而シテ其各事件ニ附キ先ツ主タル事項ヲ問ヒ次ニ加重ノ摸樣次ニ宥恕次ニ附加ノ事項ヲ問フ然レモ事實發見ノ爲メ此順序ヲ變更シ以テ問題ヲ付スルヲ得可シ但シ論告事件及ヒ辯論ヲ行ヒタル所ノ外ニ出テサルヲ要ス千八百七十六年同月三月三日千八百三十七年二月十六日同月三月三日千八百三十六年十二月三日大審院判決又裁判長ハ陪審ヲシテ容易ニ解得ヒシメシカ爲メ問題ヲ區分シ其順序ヲ改更スルヲ得ルナリ蓋シ問題ニシテシ荷モ重罪公訴狀ノ約縮及ヒ訟庭ノ辯論ニ因リ發覺シタル所ノ結末

問題下付ニ關シ偶然生スル所ノ事件

ヲ以テ問題ヲ付ス可キ時ハ此特種ナル問題ノ主旨トスル事項ニ附キ
辯護論陳セシメンカ爲メ像メ其旨ヲ通スルヲ至當トス千八百五十九年四月十三日、
千八百六十年五月又朗讀ノ時ニ方テハ云々ノ問題ハ辯論ニ因リ發覺
シタル所ナリトシテ之ヲ付シタルコトヲ被告人ニ告知セサル可カラズ
若シ夫レ問題ヲ讀聞セタルノ檢證ナキ時ハ即チ其効無キ者トス千八百
十六年九月十一日大審院判決

第八百五十六號 問題下付ニ關シ偶然生スル所ノ爭議○被告人其辯

護人及ヒ檢察官ハ問題下付ノ方法ニ附キ各異見ヲ陳述スルヲ得可シ

第三百七十六條共和四年「ブリ判決例ニ據ルニ毎子ニ此規則ヲ適施セ

リ乃チ問題下付ニ關シ陳述スルノ權ハ素ト辯護ノ權ニ基ク者ニシテ

法律ノ付與シタル權利ヲ使用スルニ過キスト判決セリ千八百十五年
三月三十日、千

八百二十三年四月二十六日大審院判決若シ被告人問題下付ニ關シ意見ヲ陳

述シタル時ハ重罪審院之ヲ判決ス可ク然ラサル時ハ第四百八條ニ循

ヒ共判決ノ効ヲ失フ可シ千八百二十五年十二月九日、千八百四十年附

加ノ問題下付スルニ附キ爭議スルノ權ハ特ニ檢察官及ヒ被告人ニ

屬ス千八百三十八年七月其爭議陳述ニ附キ判決スルノ權ハ裁判長ニ

屬セスシテ重罪審院ノ有ニ歸ス乃チ審院ハ檢察官ノ意見ヲ聞キタル

上ニ判決ヲ下ス可シ千八百三十九年七月二十一日、同年五月二十六日、千

八百四十四年七月二十五日、千八百五十年二月八

日、同年同月二十三日大審院判決ハ亦問題ヲ變更シ之ニ代フルニ新タル問題ヲ

以テスルヲ得可キナリ千八百三十八年八月二日、千八百

第九節 陪審ニ對スル告知及ヒ書類ノ交付

第八百五十七號 問題ヲ朗讀シテ既ニ之ヲ確定シタル時ハ陪審會議

ノ爲メ退庭スルノ前裁判長ヨリ其陪審ニ數件ヲ告知ス其告知ノ旨趣

トスル所ハ○第一秘密ノ投票○第二其裁斷ヲ成スノ多說○第三各被

陪審ニ對スル告知及ヒ書類ノ交付

第三百四十一
條及第三百四
十二條

告人ニ關シ輕減ノ摸樣存否ノ查覈○第四其會議ノ法式是ナリ

第八百五十八號 秘密ノ投票ニ關スル告知○投票ヲ密行ス可キノ告

知ハ第三百四十一條第三項ニ定メタル所ニシテ決シテ缺ク可カラサ

ルノ法式トス故ニ若シ之ヲ缺ク時ハ申告ノ効ヲ失フ可シ千八百四十

三日、千八百五十四年十二月七日、同年同月十五日大審院判決是ヲ以テ裁判長ハ秘密ニ投票ス可キ旨

ヲ陪審ニ告知セサル可カラス若シ此規則ニ背ク時ハ其裁判ノ効ナシ

何トナレハ其告知ハ法式ノ履行ヲ保スル唯一ノ信憑ナレハナリ千八百

十五年九月二十日大審院判決而シテ其履行アリタルヲ推測シ且ツ之ヲ證スルハ調

書中獨リ裁判長ニ於テ陪審ノ行フ可キ職務ヲ復説シタルヲ記載ス

ルヲ以テ足レリトセサルナリ千八百四十八年六月二十九日、千八百四

十六日大審院判決第八百五十九號 多説ニ關スル告知○裁判長ハ次ニ陪審ニ告知スル

ニ其裁斷ハ説ノ多數ニ因リ而シテ其數ヲ舉示セス唯、其申告中多數ノ

説ニ因リシ旨ヲ檢證ス可キヲ以テス可シ第三百四十一條此告知ハ

陪審ノ訓誨タル可キ所ナリ然レモ之ヲ缺クモ若シ陪審ノ答辭中説ノ

多數ニ因ルノ檢證アル時ハ敢テ裁判ヲ効無シトスルヲ無シ但、申告中

檢證アラサル時ニ限リ之ヲ効無シトス千八百五十四年十二月

第八百六十號 減輕ノ摸樣ニ關スル告知○此告知ハ無効タルノ制裁

ヲ以テ定ムル所ニシテ其制裁ヲ受クルハ調書中之ヲ履行シタルノ檢

證ナキ時ニ於テス但、陪審適實ナル告知ヲ受ケサルモ減輕摸樣ノ存ス

ル旨ヲ申告シタル時ハ此限ニ在テス千八百三十三年九月二十日、千八

十四年一月三日、千八百五十二年三月十日、千八百五十四年十一月七日、千八百五

十四年一月三日、千八百五十二年三月十日、千八百五十四年十一月七日、千八百五

判決告知ハ法律ニ掲ケタル文辭ヲ用ヒ之ヲ爲スヲ要ス陪審ニ告知ス

ルニ其減輕ノ摸樣ニ關スル裁斷ハ説ノ多數ニ由ル可キヲ以テスル

陪審ニ對スル告知及ヒ書類ノ交付

ハ敢テ之ヲ足レリトスルヲ得ス必ス減輕ノ摸樣存否如何ヲ審査ス可
 キ義務ヲ陪審ニ懇説セサル可カラサルナリ千八百三十四年九月十一日大審院判決然レハ調書中裁判長ハ第三百四十一條及ヒ第三百四十七條ニ
 定メタル所ヲ陪審ニ復説シタルヲ記載スル時ハ其檢證充分ナリト
 スルノ判決アリ千八百四十三年八月二十七日、千八百四十五年三月九日大審院判決若シ唯此兩條ノ一ヲ示スニ過キサル時ハ其檢證充分ナラサ
 ルナリ千八百三十三年四月三十日、同年六月三十日、千八百五十年一月三日、千八百六十一年五月三十日、千八百六十二年五月三十日、千八百六十二年五月三十日大審院判決
 第八百六十一號 陪審ノ討論權ニ關スル告知○投票多説及ヒ減輕ノ
 摸樣ニ關スル三箇ノ告知ニ加フルニ尙ホ陪審ノ討論權ニ關スル第四
 ノ告知ヲ以テスルヲ可トス千八百四十八年三月六日ノ告令第五條ニ
 曰ク「陪審會集中討論スルハ當然ノ事トス然レハ該告令ニ於テハ此事
 ニ關シ告知ス可キ旨ヲ定メサルヲ以テ其告知ヲ有用トスル時ニ方リ

之ヲ爲サ、ルモ爲メニ無効ノ制裁ヲ來スヲ無シ判決例ニ據ルニ千八百四十八年三月六日ノ告令ニ於テハ告知ス可キ旨ヲ定ムルニ無効ノ
 制裁ヲ付セスト雖モ裁判長ヨリ陪審ニ復説スルニ其職務上ノ規則ヲ
 以テス可キヲ命シタルハ敢テ疑ヒ無キ所トス千八百五十二年五月三十日大審院判決
 第八百六十二號 裁判長ハ第三百三十六條ニ循ヒ陪審ニ其行ヲ可キ
 所ノ職務ヲ復説スルヲ得ルヲ以テ仍ホ前ニ列記シタル告知ヲ爲シ且
 ツ陪審ニ其必要ナル訓諭ヲ爲スノ權アリ是レ既ニ第八百九號開設セ
 シ所ニシテ其所謂ル訓諭ナル者ハ陪審ノ職務ヲ説明スルヲ主旨トシ
 敢テ其職務ノ施行ヲ指揮スルヲ目的トス可カラス判決例ニ據ルニ其
 訓諭ハ陪審ノ申告如何ニ從ヒ如何ナル結果ヲ生スル歟ヲ告知スルニ
 及フヲ許ス千八百四十五年八月二十七日大審院判決雖モ陪審ノ決定ス可キ問題ニ附キ法
 官ノ意見如何ナル歟ヲ知ラシム可カラズ千八百四十五年三月二十七日大審院判決

陪審ニ對スル告知及ヒ書類ノ交付

第八百六十三號 陪審。證書類ヲ交付ス。○裁判長ハ陪審長ニ問題書

ヲ交付シ其問題書ニハ重罪公訴狀、犯罪ヲ檢證スル調書及ヒ証人供述

書類ヲ除キ他ノ證書類ヲ添フ可シ第三百四條故ニ證書ハ口書ノ後ニ隨ヒ

其補助トナルナリ但、供述書ハ既ニ供述アリ之ニ代フルヲ以テ之ヲ除

ク是ヲ以テ証人供述書類ヲ除キ其他ノ一件書類ハ盡ク之ヲ陪審ニ交付

ス故ニ交付ス可キ者ハ犯罪ノ情狀ヲ以テスル調書及ヒ一切ノ訴訟書

類千八百三十一年三月三十一日、千八百三十一年三月三十一日、千八百三十一年三月三十一日被告人ノ住所ニ於テ押收シタル

手束千八百三十二年十月訴訟辯論中朗讀シタル無名ノ書翰千八百三十六年十一月二十九日、千八百三十六年十一月二十九日告訴狀、告發狀又詐偽倒行事件ニ附キ差出シ

タル帳簿千八百三十八年三月十八日、千八百三十八年三月十八日被告人ニ對シ言渡アリシ既

往ノ判決書千八百三十九年三月十四日、千八百三十九年三月十四日抗傳ノ判決書千八百四十一年五月十五日偽造ノ

申立アル書類千八百四十二年八月、千八百四十二年八月犯所ノ圖千八百四十二年八月、千八百四十二年八月不規則

ニ作リタル者ト雖モ犯所ヲ示スノ圖千八百五十一年三月十日、千八百五十一年三月十日大審院判例、對

鑑定人ノ申報書千八百五十八年一月三十日、千八百五十八年一月三十日大審院判例、對

人訊問書千八百五十八年六月二十七日、千八百五十八年六月二十七日大審院判例、對

交付ス可カラサル者ハ○第一、訴訟書類ニ非サル文書○第二、証人ノ供

述書是ナリ其訟庭辯論中朗讀セス且ッ被告人ニ通セサル書類ハ訴訟

書類ニ非サル者トス千八百五十四年三月十八日、千八百五十四年三月十八日大審院判例、對

ニ問題中訊問シタル証人ノ手束千八百五十六年六月、千八百五十六年六月証人ト被告人ト

對質シタル所ヲ檢證スル調書千八百五十六年六月、千八百五十六年六月証人ノ供述書ヲ登載

スル重罪公訴狀千八百五十四年三月十八日、千八百五十四年三月十八日大審院判例、對

月七日、大審院判例、對

制ハ獨リ証人訊問ノ調書ニ限ル加之交付ノ檢證完全ナラス又法律ニ

背キ禁制ノ書類ヲ交付スルト雖モ唯之ヲ不規則ナル者ト看做シ敢テ

陪審ニ對スル告知及ヒ書類ノ交付

裁斷ヲ無効トスルヲ無シ千八百四十六年四月二十三日、千八百四十七年三月五日、大審院判決但、被告人ニ於テ嚴ニ第三百四十一條ノ法則ヲ施行セシメテ請求シタル時ハ此限ニ在ラサルナリ千八百三十七年一月二十六日、千八百六十年六月三十一日、同年八月十日、大審院判決

自第三百四十三條至第三百五十條

○第十節 陪審ノ會議及ヒ申告

○第一項 陪審ノ會議

第八百六十四號 問題及ヒ訴訟書類ヲ陪審長ニ交付シタル時ハ陪審全員會議ヲ行フ爲メ共席ニ退ク可シ第三百四十二條而シテ第三百四十二條及ヒ千八百三十六年五月十三日ノ法令ニ記載シタル心得書ハ其會議席ニ貼附ス可シ是レ實ニ法律ノ欲スル所ナリ第三百四十二條、千八百六十六年五月十三日、千八百六十六年五月十三日、千八百六十七年五月十三日、大審院判決若シ前ニ陪審本員ニ添フルニ補員ヲ以テシタルニ於テハ本員退席ノ時ヨリ補員ハ陪審ノ一部タル身位ヲ失ヒ而シテ其陪審

ノ缺ヲ補フニ非サルヨリハ會議ニ班スルヲ得ス千八百九十三年三月六日、大審院判決陪審ノ會議ハ其席内ニ非サレハ之ヲ行フヲ得ス何トナレハ第三百四十三條ニ據ルニ陪審ハ其申告ヲ失シタル後ニ非サレハ其席ヲ出ルヲ許サ、レハナリ是レ投票ノ不羈及ヒ秘密ナルヲ保スルニ缺ク可カラサルノ法式ニシテ乃チ此法式ニ據ラサルノ申告ハ不規則ニシテ其効無キ者トス千八百九十二年一月、大審院判決陪審ハ唯、其最初ノ申告ヲ改正シ若クハ補成スル爲メ會議ヲ行フ時ト雖モ必ス此規則ニ循ハサルヲ得ス千八百五十九年六月、大審院判決

第八百六十五號 陪審ノ會議ハ必ス之ヲ密行ス若シ此規則ニ背ク時ハ無効ノ原由ト成ル可シ千八百二十六年三月三日、千八百五十九年六月二十七日、大審院判決法律ハ其密行ヲ保センカ爲メ數箇ノ方法ヲ設ケリ曰ク第一、陪審ハ其申告ヲ決シタル後ニ非サレハ其會議席ヲ出ツ可カラス乃チ陪審ノ此規則ニ背

ク者ハ審院ニ於テ五百フラン以下ノ罰金ヲ科スルヲ得第三百四其衆人ノ知得シ且ツ定マリタル理由ニ因リ一時席外ニ出ルハ敢テ之ヲ犯罪ナリトセス千八百三十二年五月二十八日、千八百四十年七月第二、陪審ノ會議中其席ニ入ルニハ獨リ裁判長書面ヲ以テ許可シタル時ニ限ル可シ乃チ裁判長ノ命令ニ背ク者ハ、其何人タルヲ論セス重罪審院ニ於テ即座ニ二十四時間ノ禁錮ヲ言渡ス可シ第三百四但、陪審ノ使用ノ爲メ其席内ニ入りタル使部、給使ニ附テハ此限ニ在ラス千八百四十二年四月十四日大審院判決第三裁判長ハ所屬ノ備警兵卒長ニ命シ陪審會議席ノ門戸ヲ監査セシム可シ蓋シ此三箇ノ方法ハ必ス之ヲ施行ス可キ者ナリト雖モ萬一之ヲ缺ク有ルモ爲メニ無効ノ制裁ヲ來ス可無シ千八百三十九年五月三十日、千八百四十八年九月二日但、此方法ヲ施行セサルニ因リ陪審ノ判決上ニ影響ヲ及ホス可キ交通アリシ時ハ此限

ニ在ラサルナリ千八百三十八年四月二十六日、千八百第八百六十六號裁判長ハ人ノ陪審會議席ニ入ルヲ許スノ權アリト雖モ其會議中自カラ之ニ入ルヲ得可キ乎否ナ判決例ニ據ルニ裁判長ハ陪審説明ヲ乞ハソカ爲メニ明カニ其出席ヲ求メタル時ハ乃チ會議席ニ入ルヲ得ルト雖モ陪審ノ會議ヲ容易ナラシムルヲ口實トシ明カニ其出席ノ請求ナクシテ自カラ會議席ニ入ルヲ得ストセリ千八百二十六年十一月一日大審院判決又裁判長ニシテ陪審會議席ニ入ルヲアル時ハ每子ニ陪審ノ請求アリシニ因リシ推測アリトノ判決アリ千八百二十六年五月二十六日、千八百二十七年五月此判決タル陪審ニ影響ヲ及ホス可キノ交通ヲ認許スルヲ以テ常ニ非難ニ係ルヲ免カレヌ抑、説明ノ陪審ニ必要ナル時ハ公判席ニ於テスルニ非サレハ決シテ之ヲ爲ス可カラヌ若シ陪審ノ請求アル時ハ裁判長之ヲ公判席ニ喚入レ而シテ

訴訟關係人ノ面前ニ於テ説明ヲ與フルモ敢テ妨ケ無シトス千八百五十二年六月十日大審院判決

第八百六十七號 陪審ノ會議ニ附テハ二三ノ規則アリ以テ其方向ヲ指致ス蓋シ陪審長ハ會議ノ前第三百四十二條ノ心得書ヲ讀聞ス可シ然レモ之ヲ爲スト爲サ、ルトハ偏ヘニ其權内ニ屬スルヤ言ヲ俟タス而シテ陪審ハ其投票ヲ行フ前相議論スルノ權ヲ有ス千八百四十八年五月十日大審院判決 第五 共相議論スルハ憲トニ缺ク可カラサル者ナリト雖モ是モ亦其權内ニ在リ千八百四十九年四月十日大審院判決 陪審ノ論議ハ先ツ主タル事件ニ附テ之ヲ爲シ次ニ各模様ニ及ホス第三百四十四條 陪審長ハ順次問題ヲ朗讀シ第三百四十五條 而シテ其各問題ニ附キ秘密ノ投票ヲ行フ第三百四十六條 其投票ノ法式ハ千八百三十六年五月十三日ノ法令ヲ以テ之ヲ定ム該法令ニ據ルニ各陪審ハ重罪審院ニ於テ其印紙ヲ貼附シテ交付セシ所ノ票ニ然[○]又ハ

否[○]ノ文字ヲ密書シ密封シテ之ヲ陪審長ニ呈ス陪審長ハ乃チ之ヲ箇中ニ投シ次ニ陪審全員ノ面前ニ於テ之ヲ開披ス而シテ其意見ヲ示サス且ツ陪審六名以上ニ於テ解讀シ難キ旨ヲ申立ル所ノ票ハ被告人ニ利アル者ノ中ニ算入ス可シ投票開披ノ後ハ直ニ陪審全員ノ面前ニ於テ其票ヲ燒棄ツ可キナリ

第八百六十八號 一箇ノ事件ニ附キ又是非ノ辨別ナクシテ犯シタルコトヲ覺知スル時ト雖モ被告人其罪アリト爲シタル時ハ必ス輕減ノ摸樣ヲ問題ト爲ス可シ千八百五十二年五月十日大審院判決 然レモ法律ニ於テ此問題ヲ下付スルコトヲ要セサルヲ以テ其下付ノ檢證ナキ時ト雖モ被告人異議ヲ陳スルコトヲ得ス千八百三十八年十一月十日大審院判決 若シ論告事件數箇ナル時ハ其各箇ニ附キ問題ヲ各別ニシ若シハ之ヲ合一包括スルヲ得千八百三十九年十二月十七日、千八百三十六年十二月二日、千八百四十年六月二日、千八百四十年十一月十日、千八百四十四年六月二日、千八百四十四年十一月十日大審院判決 若シ又被告人數

名アル時ハ各自ニ附キ問題ヲ下付ス可シ千八百四十二年四月一日大審院判決

第八百六十九號 總テ陪審ノ裁斷ハ說ノ多數ニ因ル而シテ其中告書

ニハ說ノ數ヲ舉示セスシテ唯多說ニ因リシ旨ヲ記載ス可シ此規則ニ

背ク時ハ其効無シトス第三百四十七條 故ニ決シテ二說ニ分レ其數相等シキ

ヲ有ルヲ無シ若シ有罪ノ說其數六ニ止マル時ハ被告人罪ナキノ申告

ヲ爲ス可シ乃チ說ノ數相等シキ場合ニ於テハ被告人ニ利アルノ說ヲ

採ル可シトノ規則ハ不用ニ屬スルナリ

第八百七十號 千八百三十六年五月十三日ノ法令第三條ハ千八百五

十三年六月九日ノ法令第二條ヲ以テ之ヲ改正セリ其條ニ據ルニ陪審

長ハ各票ヲ點檢スルヲ得可キ陪審ノ而前ニ於テ各票ヲ開披シ即時ニ

問題書ノ欄外又ハ紙尾ニ決議シタル所ヲ記載ス可シ蓋シ其決議ハ陪

審長ニ於テ各問題書ノ欄外ニ然。又ハ否ナル文字ヲ記載スルヲ以テ之

ヲ檢證スル者トス而シテ被告人罪アリ又ハ罪ナキ旨ヲ加書スルヲ要

セス其然否ノ記載ハ乃チ問題ト相合シ其文辭ト一體ヲ爲スナリ千八百

十一年七月十四日大審院判決 然レモ答辭ハ必ス然否ノ一ヲ用ヒ決シテ制限區別及

ヒ說明ヲ爲スヲ得ス千八百二十六年七月十四日大審院判決 又論告ノ外ニ出

テ而シテ下付セラレサル問題ヲ決ス可カラス千八百三十年五月十八

日 然レモ同種ナル數箇ノ事件ヲ一問題ニ包含シ

タル時又ハ問題ニ係ル重罪特種ノ者ニシテ且ツ其原質混合シ其一ヲ

缺ク可シトスル時ハ陪審ニ於テ其問題ヲ區別スルヲ得可シ千八百五

月十一日大審院判決 陪審長ハ決議ノ多說ニ因リシ旨ヲ加書ス是レ主タル事件

及ヒ加重ノ模様ヲ然リトシ宥恕ヲ否トスルノ答辭ノ後ニ記載ス可シ

然ラサレハ其効無キ者トス若シ主タル事件及ヒ加重ノ模様ヲ否トシ

宥恕ヲ然リトスル時ハ之ヲ記載スルヲ要セサルナリ千八百四十年五月